



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	共通科目のための読書案内 2003
Author(s)	東京学芸大学附属図書館
Citation	
Issue Date	2003-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/59996
Publisher	東京学芸大学附属図書館
Rights	

共通科目のための

読 書 案 内

東京学芸大学附属図書館

2 0 0 3

ブレヒトの異化する思考

-- まえがきにかえて --

入学おめでとう。正門の咲き誇る桜や眼にしみるつつじを前にして、これから拓けていく世界をさまざまに思い描いていることと思います。あまりに茫漠としたひろがりに、めまいのようなものを感じているかもしれません。それは自分の在り方への問い、自明としてきたことへの疑い、新しい世界への模索、等々への予感でもあるでしょう。

家族や両親から与えられてきた枠組、学校の先生から教えられた枠組、学習した知識の枠組、それらを新しい眼差しで問い返すこと。そう、大学とは、これまでのような「学習の場」ではなく、「学問の場」、つまり学ぶことを問い、問うことを学ぶ場なのです。

ドイツの劇作家にブレヒトという人がいます。「黄金の1920年代」のベルリンで『三文オペラ』の成功によってスターダムに躍り出たのですが、ヒトラーに追われて亡命。スウェーデンからアメリカへと転々としながら『第三帝国の恐怖と貧困』『セチュアンの善人』『肝っ玉おっかあとその子供たち』などの作品を通じて、反ファシズムの活動を展開。第二次世界大戦後は東ドイツを選択したという大変面白い人物で、文字通り「戦争と革命の20世紀」を生きただけに、歴史の方向への考察、生き抜く知恵、固定的に物事を考えない挑発的思考と逆転の発想に溢れた思想家でもあります。

なかでも「同化」に対する「異化」の考え方は、極めて示唆に富んだ興味深いもので、今、新しい大学生活を始めようとしている皆さんに大いに参考になるかもしれません。

異化とは何か。「異化するとは、出来事や性格のもつ自明なもの、馴染みのもの、明白なものを除去し、それに対する驚きや好奇心を生み出すことである」とブレヒトは述べています。当たり前と思っていたこと、それを新しい眼差しで見ること、この新鮮な眼差しから生まれる新しい認識、発見の喜び、これこそが肝要な問題なのだと。異化する眼差しは発見の眼差しでもあります。

ブレヒトには『ガリレオの生涯』という劇がありますが、天動説に対して地動説を発見したガリレオは、常に自明と思われているものを検討の俎上にのせる人、まさに異化の人でした。ピサの大聖堂でシャンデリアが揺れるのを見て、大きく揺れようが小さく揺れようが揺れている時間は同じという振り子の等時性を発見したのは有名な話ですし、ピサの斜塔では、重いものは早く軽いものはゆっくり落ちると考えられていたのに対して、同時に落ちることを大小の石の落下実験で証明しました。

周囲の人々のいだいている固定的な見方に同化，同調しては決して生まれない発見です。ノーベル化学賞を受賞した田中耕一さんも、同じような体験を語っていたことを記憶している皆さんも多いと思います。

ブレヒトは従来の演劇を「ドラマ的演劇」と呼び、それに対して自分の構想する演劇を「叙事的演劇」と名付けて対置し、その方法論の中核に「異化効果」を置きました。

普通、例えば、娘たちに裏切られたリア王の怒りについて、「俳優は、観客がリアの怒りを世界で最も自然なことだとみなし、完全にリアの味方になり、リアにすっかり共感し、観客自身が怒ってしまうように、演技する」わけで、観客も俳優と一体になって、感情同化の世界にひたります。これは私たちがドラマを見る時の態度でしょう。しかしこれでは感情を単に消費しているだけで、カタルシスして満足し、見終わった後は急速に消えていく。これでは物事の本質を明確にしたことにはならないとブレヒトは考えます。

異化的な演劇では、「観客がなぜリアは怒っているのかを驚き、怒りとはまさに別の反応をリアがしてもよいのではないかと想像することが出来るように」演ずるのだといいます。これは相当な力量を俳優に要求しますが、ブレヒトの狙いは、怒りがどれだけ必然性をもっているか、普遍的なものか、時代と結びついたものか、他の表現もありえたのではないか、等々といったことを観客がどれだけ相対化して見て考えるかということでした。絶対的なものとして没入的に見るのではなく、歴史的なもの、過ぎ行くものとして検討する態度こそ、肝要だと。自明性を疑い、主体的に受容し、新しい認識と行動の契機にしていく。これこそが現代の演劇であり、真の学びだと主張します。

人間は、自己中心的なもので、どうしても同化の世界に生きようとします。しかし、新しい発見は同化からでなく、異化からしか生まれません。しかも自分を異化して初めて、新しい人間に成れる。同化の自己絶対化から異化による自己相対化へ、それを通じたしなやかで新たな自己形成へ。認識の転換だけでなく、存在の転換へ。

ブレヒトの考え方は、なかなか示唆的だと思いませんか。大学生活のポイントもここにあるのではないかと思います。

この「共通科目のための読書案内」は、あらゆる分野の先生方がその一番のエキスを含めて選択し、コメントしているものです。ブレヒト流に言えば、同化して読みつつも異化されてしまう、知の宝庫です。

自由な自己形成のこれからの4年間、自分の今までの殻を破って、どこまで広い世界に出ていけるか。まずはこれらの書物と四つに組み合せて、拓いていって下さい。

2003年3月

東京学芸大学附属図書館長
鷲山恭彦

目 次

総合学会領域

社会系

日本国憲法	3
歴史と現代	7
歴史と社会	7
歴史と地域	7
欧米の正義と人権	14
経済と福祉	17
ボランティアとNPO	20

文化系

近代文学と思想	27
近代文学と社会	27
日本美術の解釈	30
人生と思索 A	33
映像文化	35
文学と社会	38
現代文化	41
ピアノ音楽文化史	46
英米文学の世界	47
インド哲学入門	50
ヨーロッパの文学	52
《第9》を奏でる	59

教育系

人権教育	63
障害児・者の教育	65
幼児の遊びと生活	68
現代心理学の課題	70

環境系

野外教育法	75
健康と環境	78
環境とデザイン	80
環境教育	81
人類史と環境	85
学校園の活用と計画	89

情報系

情報・文献へのアクセス	95
人間の情報処理	98
コンピュータ・ネットワーク	101
コンピュータ・ミュージック	103
コンピュータ・プログラミング	106

自然系

現代物理学の話題	111
現代物理学の基礎	111
宇宙と地球と人間	116
自然と数理	122
脳と人間	131
生物へのいざない	132
バイオテクノロジーと生活	137

身近な物質と化学	139
科学・技術と社会	142

健康・スポーツ領域

「健康・スポーツ領域」とは	147
「健康・スポーツ領域」におけるベーシックコースのねらいと性格	148
スポーツ・フィットネス実習	149
ウエルネス概論	151
「健康・スポーツ領域」におけるアドバンスドコースのねらいと性格	152

語学領域

英 語	157
ドイツ語	163
フランス語	168
上級日本語会話・講読・作文	173
上級日本語文法 A	176
上級日本語文法 B	178

総合学芸領域
社会系

日本国憲法

日本国憲法に関する著書は膨大な数にのぼり、それぞれに論者の視点からの特色をもつ。およそテキストの解釈という営為は、仮に正答なるものがあつたとしても、各論者の論理的前提に依存せざるを得ない。本講義では、憲法全般に関する深遠な解釈体系のうち、ほんの導入的な面を扱うことしかできない。したがって、一般市民として、あるいは、将来教職を目指す者として、憲法に興味関心を持ち、講義を発展させて憲法的な思考と知識を身につけるためには、憲法を体系的に解明する『基本書』その他が大いに参考になる。じっくりと精読して、それぞれの論点において各論者がいかなる論理的帰結を導出しているかを比較検討し、以て自らの思考の発展の一契機とされることを願う。以下は著者の氏名順に列挙されている。なお、憲法関連文献の紹介書として、長谷部恭男編『憲法本41』（平凡社、2001年）も参照のこと。

1. 入門書

『入門書』は、あくまでも入門用であるに留まることをお含みおき頂きたい。

アエラ・ムック『憲法がわかる。』（朝日新聞社、2000年）

芦部信喜『憲法判例を読む』（岩波セミナーブックス、1987年）

浦部法穂・棟据快行・市川正人編（対談）『いま、憲法学を問う』（日本評論社、2001年）

奥平康弘・杉原泰雄編『憲法を学ぶ（第4版）』（有斐閣選書、2001年）

奥平康弘・宮台真司（対談）『憲法対論』（平凡社新書、2002年）

紙谷雅子編著『日本国憲法を読み直す』（日本経済新聞社、2000年）

渋谷秀樹『憲法への招待』（岩波新書、2001年）

渋谷秀樹『日本国憲法の論じ方』（有斐閣、2002年）

初宿正典・高橋正俊・米沢広一・棟据快行『いちばんやさしい憲法入門（第2版）』（有斐閣アルマ，2000年）

樋口陽一『個人と国家』（集英社新書，2000年）

2. 基本書・注釈書

憲法を学んだと言うためには、最低限、『基本書』や『注釈書』を精読する必要がある。まずは、清宮四郎『憲法Ⅰ（第3版）』（有斐閣，1979年）・宮沢俊義『憲法Ⅱ（新版）』（有斐閣，1974年）の二著を、内容的には旧くなってしまったが、戦後憲法学の出発点として挙げておく。

芦部信喜『憲法（第3版）』（岩波書店，2002年）

芦部信喜『憲法学Ⅰ 憲法総論』・『Ⅱ 人権総論』・『Ⅲ 人権各論（1）（増補版）』（有斐閣，1992・94・2000年）

芦部信喜編『憲法Ⅱ 人権（1）』・『Ⅲ 人権（2）』（有斐閣，1978・81年）

伊藤正己『憲法（第3版）』（弘文堂，1995年）

浦部法穂『全訂 憲法学教室』（日本評論社，2000年）

奥平康弘『憲法Ⅲ 憲法が保障する権利』（有斐閣，1993年）

阪本昌成『憲法理論Ⅰ（第3版）・Ⅱ・Ⅲ』（成文堂，2000・1994・95年）

佐藤功『日本国憲法概説（全訂第5版）』（学陽書房，1996年）

佐藤幸治『憲法（第3版）』（青林書院，1995年）

杉原泰雄『憲法Ⅰ 憲法総論』・『Ⅱ 統治の機構』（有斐閣，1987・89年）

野中俊彦・中村睦男・高橋和之・高見勝利『憲法Ⅰ（第3版）』・『憲法Ⅱ（第3版）』（有斐閣，2001年）

長谷部恭男『憲法（第2版）』（新世社，2001年）

樋口陽一『憲法（改訂版）』（創文社，1998年）

樋口陽一『憲法Ⅰ』（青林書院，1998年）

松井茂記『日本国憲法（第2版）』（有斐閣，2002年）

3. 演習書・判例集・講座等

『基本書』で憲法全体を概観したのち、具体的な事例や判例を通じて学習することにより、深い憲法的洞察が身につく、応用力が鍛えられる上、種々の資格試験等にも役立つ。

芦部信喜・高橋和之・長谷部恭男編『憲法判例百選Ⅰ・Ⅱ(第4版)』(有斐閣, 2000年)

芦部信喜監修『注釈憲法1(以下続刊)』(有斐閣, 2000年)

芦部信喜編『講座・憲法訴訟1-3』(有斐閣, 1987年)

大石眞『日本憲法史』(有斐閣, 1995年)

古関彰一『新憲法の誕生』(中公文庫, 1995年)

佐藤幸治・中村睦男・野中俊彦『ファンダメンタル憲法』(有斐閣, 1994年)

高橋和之・大石眞編『憲法の争点(第3版)』(有斐閣, 1999年)

高柳賢三・大友一郎・田中英夫編著『日本国憲法制定の過程Ⅰ・Ⅱ』
(有斐閣, 1995年)

田中英夫『憲法制定過程覚え書』(有斐閣, 1979年)

戸松秀典『憲法訴訟』(有斐閣, 2000年)

野中俊彦・江橋崇編著『憲法判例集(第8版)』(有斐閣新書, 2001年)

長谷部恭男編著『リーディングズ 現代の憲法』(日本評論社, 1995年)

樋口陽一・佐藤幸治・中村睦男・浦部法穂『注解法律学全集 憲法Ⅰ(以下続刊)』(青林書院, 1994年)

樋口陽一『比較憲法(全訂第3版)』(青林書院, 1992年)

樋口陽一・野中俊彦編『憲法の基本判例(第2版)』(有斐閣, 1996年)

樋口陽一編『ホーンブック 憲法(改訂版)』(北樹出版, 2000年)

樋口陽一編『講座 憲法学1-6・別巻』(日本評論社, 1994-5年)

4. 法律雑誌・学会誌

より専門的な勉強がしたい人に。『法学セミナー』は学生および資格試験志望者向け。

『法律時報』(日本評論社)・『Jurist』(有斐閣)・『法学教室』(有斐閣)・『法学セミナー』(日本評論社)・『公法研究』・『国家学会雑誌』・『憲法問題』・憲法理論研究会編『憲法理論叢書』

5. 資料集・辞典類

勉強の参考に。

初宿正典・大沢秀介・高橋正俊・常本照樹・高井裕之編著『目で見る憲法』
(有斐閣, 1999年)

杉原泰雄代表『日本国憲法史年表』(勁草書房, 1998年)

高木八尺・末延三次・宮沢俊義編『人権宣言集』(岩波文庫, 1957年)

樋口陽一・吉田善明編『解説 世界憲法集(第4版)』(三省堂, 2001年)

大須賀明・栗城寿夫・樋口陽一・吉田善明編『憲法辞典』(三省堂, 2001年)

6. その他

直接に憲法の著書ではないが、前提として読んでおくべきものとして、一般向けのものであるが、6冊のみ挙げておく。

石川文康『カントはこう考えた』(筑摩書房, 1998年)

苅谷剛彦『知的複眼思考法』(講談社+ 文庫, 2002年)

佐伯胖『「きめ方」の論理』(東京大学出版会, 1980年)

竹田青嗣・西研編『はじめての哲学史』(有斐閣アルマ, 1998年)

田中成明『法理学講義』(有斐閣, 1994年)

田中成明・竹下賢・深田三徳・亀本洋・平野仁彦『法思想史(第2版)』

(有斐閣Sシリーズ, 1997年)

(角替晃・金井光生)

歴史と現代

歴史と社会

歴史と地域

Ⅰ 歴史学を学ぶために

『歴史とは何か』 E.H. カー著 清水幾太郎訳 岩波書店（岩波新書）

歴史についての根本問題の一つ一つを周到に論じた本で、哲学者の立場からではなく、カー自身の長い歴史研究および叙述の経験を通じて得られた智恵の結晶である。

『歴史をなぜ学ぶか』 土井正興著 青木書店

歴史を学ぶことは、まず現実に私たちのまわりで日常起こっている出来ごとに深い関心をもつことから始まるのだ、ということを教えてくれる歴史学への入門書である。

『歴史を学ぶこと教えること』 北島万次・峰岸純夫編 東京大学出版会

歴史を学ぼうとする人に考えてほしいことと、歴史教育が小学校から大学までどのようにあるべきかを提起した本。歴史教育に関心のある人は是非読んでほしい。

『歴史学入門』 弓削達著 東京大学出版会

ローマ古代史を専門とする著者が、現代の提起する諸問題に積極的に発言し、その中で歴史学とはなにかを問いかけている。歴史学を学ぼうとしている人はぜひ1年生のうちに読んでほしい。

『歴史科学入門』 歴史科学協議会編 三省堂

歴史学に関心を持つ学生が、歴史学とはどのような学問で、どのような方法で学んでいくのがよいかを知りたいときにぜひ読んでほしい本である。

II 外国史を知るために

A 世界史

『世界史への問い 全10巻』岩波書店

『民族の世界史 全15巻』山川出版社

『講座世界史 全12巻』東京大学出版会

いずれも10巻, 15巻, 12巻という大部な講座であるが, 地域・時代を超えて世界史の根本問題を浮き彫りにしている。自分の関心のある巻から読み進めてほしい。

B 西洋史

『ヨーロッパの成立』前沢・大江他著 南窓社

古代ギリシア, ローマからヨーロッパ中世までの歴史を概観し, 関連する日本語の文献を紹介する。歴史学研究上の問題点を知ることでもでき, 西洋史を学ぼうとする者には便利な手引書である。

『ヨーロッパとは何か』増田四郎著 岩波書店

ヨーロッパ社会の特殊性を追求し, それがヨーロッパ中世に形成されたことを指摘する。日本史との比較において興味深い。

『わたしたちのギリシア人』ケネス・ドーバー著 久保正彰訳 青土社

イギリスの高名な古典学者の筆になる本書では, 現代社会に生きる者の立場から古代ギリシア世界がとらえられている。叙述は平易で, 古代ギリシア文明について全体的理解を得るための良い導き手となろう。

『古代都市』クーランジュ著 田辺貞之助訳 白水社

19世紀フランスの史家が, ギリシア・ローマの社会を貫く原理・法則に着目し「信仰の変化がもたらす革命」という観点から古代史全体を論じ切った名著。百年以上前の書物であるが, なお学ぶべき点が多い。

『中世の産業革命』ギャンベル著 坂本賢三訳 岩波書店

ヨーロッパの12・3世紀を巾広い変革の時代と捉え, 新しい視点を提示する。経済・技術から哲学・文化の領域まで叙述が行きわたり, 示唆に富んでいる。

『宗教改革の時代』エルトン著 越智武臣訳 みすず書房

宗教改革運動だけでなく、16世紀ヨーロッパ国際社会の政治・経済も概観されていて、面白い。

『地中海 全5巻』ブローデル著 浜名優美訳 藤原書店

近世の地中海世界を地理的環境から説きおこし、そこに展開された経済・政治の動きを中心に多面的に描き出した大著。

『世界強国への道 - ドイツの挑戦1914-1918 - I,II』フィッシャー著 村瀬興雄
監訳 岩波書店

第一次大戦の勃発原因と戦争中の問題点をドイツに焦点を合わせて、従来の定説を批判しながら、独自に解明している。

『スターリン I,II』ドイッチャー著 上原和夫訳 みすず書房

たんなる個人の伝記、あるいはソビエト・ロシアの通史ではなく、20世紀の歴史の基調の一つとしての社会主義の問題、さらにそれを超えて、現代史全体の流れの把握・理解に大きな示唆を与えるであろう。

『向う岸からの世界史 一つの48年革命史論』良知力著 未来社

1848年におけるウィーンの革命を描きながら、そこから西欧中心主義的な世界史像の捉え直しをせまると共に、中東欧の民族問題の重層的構造を考察する。

『ファシズム』山口定著 有斐閣

しばしば混乱して用いられる「ファシズム」概念を、運動としてのファシズム、思想としてのファシズム、体制としてのファシズムという角度から、比較史的に検討し、単なる保守反動とも、ましてや「社会革命」とも異なるファシズムの歴史的特徴を描き出す。

『ナチス・ドイツ ある近代の社会史』デートレフ・ポイカート著 木村靖二・山本秀行訳 三元社

1980年代の日常史研究の成果の踏まえ、ナチズムのもつ「近代の病理」としての性格を検討すると共に、そこから近代社会そのものを問い直そうとする意欲的な書。

C 東洋史

世界史でも外国史でもなく、東洋史と西洋史が一對になって歴史研究の一分野をなしている。こうした状況は、今日の学生にとってむしろ奇異なことかも知れない。学界においても「東洋」・「西洋」という地域区分で歴史を眺めること自体、十分吟味してみなければならなくなっているが、「東洋」や「アジア」の歴史を学ぶことは、それを通して私たちの国際認識や世界観をきたえるために今なお有効性があると考えられている。したがって、東洋(アジア)史に関心を持つ学生は、アジア各地の歴史を専門的に勉強する前に、次のような諸書を通して自分の歴史認識を確かめてほしいものである。

『東洋とは何か』仁井田陞著 東京大学出版会

『近代日本と東洋史学』五井直弘著 青木書店

『アジアの歴史と歴史家』増井経夫著 吉川弘文館

『マルクスとアジア』小谷汪之著 青木書店

『アジア現代史 全5巻』歴史学研究会編 青木書店

専門への橋渡しとして適当な講座ものとして

『世界史への問い 全10巻』岩波書店

『民族の世界史 全15巻』山川出版社

次に地域別に入門的な図書を紹介しておく。どこから読んでもかまわないが、できることならここに掲げるものは全部通読してもらいたい。

(中国史関係)

『中国の歴史 全10巻』講談社

『図説 中国の歴史 全12巻』講談社

『ビジュアル版 世界の歴史 全20巻』講談社

『講座 中国近現代史 全7巻』東京大学出版会

『中国近現代史 上・下』姫田光義他編 東京大学出版会

『中国史研究入門 上・下』山根幸夫編 山川出版社

- 『岩波講座 現代中国 全8巻』岩波書店
- 『中国とソ連』毛里和子著 岩波新書
- 『科挙 中国の試験地獄』宮崎市定著 中公新書
- 『ある農婦の死 十七世紀中国の現実と夢幻世界』J. スペンス著 平凡社
- 『中国史を学ぶということ』西嶋定生著 吉川弘文館

(朝鮮史関係)

- 『新版 朝鮮の歴史』朝鮮史研究会編 三省堂
- 『入門 朝鮮の歴史』朝鮮史研究会編 三省堂
- 『朝鮮史』武田幸男編 山川出版社
- 『朝鮮』武田幸男他 朝日新聞社

(東南アジア, 西アジア関係)

- 『サマルカンド年代記』アミン・マアルーフ著 リプロポート
 - 『イスラム世界の人びと 全5巻』東洋経済新報社
 - 『講座 東南アジア学 全10巻, 別巻1』弘文堂
- 東洋史全体の概説書は種々あるが、ここでは次の一点だけを推薦しておく。
- 『概説東洋史』堀 敏一・山崎利男編 有斐閣

III 日本史を知るために

- 『教養の日本史』竹内 誠他編 東京大学出版会

古代史から現代史まで、30項目を設定して作られた日本史の入門書である。高校で学んだ日本史と大学で学ぶ日本史の違いを知るのに良いテキストといえよう。より深く学びたい人のためには、巻末に参考文献が掲載されている。

- 『史料 教養の日本史』竹内 誠他編 東京大学出版会

教養の日本史の続編で、古代から現代まで30項目を設定し、史料を通して日本史を見ようとしたもの。各項目ごとに1~2点の、従来の史料集には収録されていない貴重な史料を収録しているので、史料に親しみながら日本史を学べるテキスト

トである。

『方法 教養の日本史』竹内 誠他編 東京大学出版会

歴史学への入口はどこにでもある。身近な素材をさまざまな角度から見直すと、その背景に隠れていた歴史の世界がみえてくる。素材との出会いから歴史学研究にいたる具体的な作業過程を示しながら、読み手としての読者を、歴史の書き手へと導く格好のテキストである。

『日本史年表』東京学芸大学日本史研究室編 東京堂出版

歴史は暗記ものとされているが、大学で歴史を学ぶには年代の丸暗記は不必要である。不確かな年代は年表で確認したほうが良い。そのためにぜひ優れた年表が手元に必要である。この年表は初心者にも使いやすく配慮されており好評である。

『日本民衆の歴史 全11巻』門脇禎二他編 三省堂

日本の民衆のあゆみを現代歴史学の成果にもとづいて、新しい通史としてえがいたものである。入門書として最適である。

『日本文化史(第2版)』家永三郎著 (岩波新書)

美術史・建築史というような部門史ではなく、日本文化の総体を原始から近代まで、一人の著者が一貫した立場から描いた雄大な著作。日本文化を科学的に把握するための入門書として最適。

『中世的世界の形成』石母田正著 岩波書店 (岩波文庫)

伊賀国の山間の一荘園黒田荘の歴史を通じて、日本の古代から中世への転換を捉えた名著。壮大なドラマを見る想いがするだろう。

『一揆 全5巻』東京大学出版会

前近代を通貫する民衆の闘争形態を「一揆」としてとらえ、中・近世史の若手研究者が共同で書き上げた意欲作。闘争だけでなく思想・生活・文化なども取り上げられており、読者に新しい一揆を提供するであろう。

『一茶の時代』青木美智男著 校倉書房

江戸時代の一人の文化人を通して、都市と地方との文化交流の実態を描いた好著。一茶というなじみ深い人物を取り上げているので新入生の歴史への窓口としても最適である。

『大系日本の歴史 江戸と大阪』竹内 誠著 小学館

江戸時代の2大都市である江戸と大阪を取り上げて、その経済交流と文化交流をわかりやすく叙述したもの。特に江戸文化に関する部分は最新の研究成果を生かしながら叙述しており傑出している。

『江戸の本屋さん - 近世文化史の側面 - 』今田洋三著 日本放送出版協会 (NHK ブックス)

江戸時代の出版界の展開を文化史・経済史の両面から追求した画期的業績。

『日本近代史 Ⅰ～Ⅲ』遠山茂樹・今井清一・藤原彰著 岩波書店 (岩波全書)

19世紀後半から現代までの概説であるが、近來の研究の成果をとり入れてまとめた好著である。

『明治維新と天皇』遠山茂樹著 岩波書店

明治維新の過程で近代天皇制が形成されてくる実態を、維新时期から自由民権期、さらに帝国憲法成立期までを対象に論じたもの。本書は市民講座での講演をもとにして編纂されたもので、読みにくい史料の読み方、その意味なども丁寧に解説されており、日本近代史に興味のある新入生には最適の著書である。

『昭和史』遠山茂樹ほか著 岩波書店 (岩波新書)

この書物をめぐって、いわゆる「昭和史論争」が巻き起こされた。激動の現代史を簡潔に描いた名著である。

『労働者と農民』中村政則著 小学館 (日本の歴史 29)

日本近代史を女工、坑夫、農民を中心としてみた異色の著書で、歴史に興味のある学生には必読の書である。叙述も平易で読みやすい。

(歴史学研究室)

欧米の正義と人権

「人権 human rights」という考えは、西洋近世の思想においてとりわけ自覚されてきたもので、現代日本ではその存在があたかも自明の理のように見られている。国連軍が動く際の判断基準の一つも、「人権が犯されているか否か」である。では、(1)人権とは何か、(2)それが本来存在すると言うがどうやって確かめるか、(3)人権の「平等 equality = 同等性」を主張するが、計算も測定もできない人権なるものがどうして人皆な同等だと言えるか、等々の問題が生じる。他方、「正義 justice」は、洋の東西・過去現在を問わず、人間社会の存立にとって最広範な概念であり、倫理上政治上の殆どの考えが正義概念に収斂すると言ってよい。儒教に大義名分論あり、古代ギリシア政治思想に国家の正義あり、現代民主政治に人権擁護の正義あり、等々。正義は“根本価値に適って just いる、それによって根拠づけられている well-grounded” ことである。すると問題は“根本価値”にある。こうした観点から幾つかの図書を紹介するが、主として“原典に近いもの”(訳書)を挙げる。というのも、本学学生の中には、原典を見ないで解説書と自己の作文だけでモノを書いたり論じたりする傾向が時に窺えるからである。『源氏物語』を読まずにその卒論を書くなどおよそナンセンスであろう。

1. 『人権宣言集』(高木八尺他編, 岩波文庫)……世界の代表的な人権宣言を集めたもの。イギリスのものとしては「マグナ・カルタ」から始まって「権利章典」, 「奴隷制廃止法」など。アメリカでは「独立宣言」, 「合衆国憲法修正十箇条」他。ヨーロッパ大陸を見ると、フランスの「人間および市民の権利宣言」(フランス人権宣言), 「1946年第四共和国憲法前文」等。ドイツの「プロイセン憲法」, 「ヴァイマル憲法」, 「ボン憲法」, 「東ドイツ憲法」その他。ソ連では「ロシア諸民族の権利の宣言」, 「ロシア社会主義連邦ソヴィエト共和国憲法」など。アジアに眼を転じると、「ヴェトナム民主共和国独立宣言」, 「中華民国憲法」, 「中華人民共和国憲法」, 「大日本帝国憲法」, 「日本国憲法」が収められている。 - “全て人には

本来的権利が備わり、それらは平等である”と宣言することはできる。しかし、何を根拠にして宣言がなされているか（例えばアメリカ独立宣言には清教徒の神あり）を、読み取っていただきたい。

2. アリストテレス『政治学』（岩波文庫。或いはアリストテレス全集15，山本光雄訳，岩波書店）……現代政治思想における諸問題の原型をほぼ尽くしていると言える。例えば王制（一者支配），貴族制（複数支配），民主性を詳細に考察し，西洋的「正義」の源泉となって今日まで続く考え方（公平，当事者間の同等性）を論じている。

3. J. ロック『統治論』（世界の名著27「ロック・ヒューム」，中央公論社，大槻春彦・宮川透他訳）……B. ラッセルによれば，今日まで史上様々な社会改革論が開陳されてきたが，それらは“ロック型”と“ルソー型”に集約される，と言う。前者は各人の権利を重視する意味での個人主義であり，後者は国家優先の全体主義となってくる。前者を体現したのがチャーチルとルーズベルト，後者を担ったのがヒトラーである，とも言う。大変興味深い見方であり，ロックとルソーを読めばそれが理解される。ロックの『統治論（政治二論）』は，現代民主政治の一原型をなす重要著作であり，人権・国家権力・政治（統治）などが何であるかを示し，王権の絶対性（王権神授説）を論破している。

4. J.-J. ルソー『社会契約論』（世界の名著30「ルソー」，中央公論社，平岡昇・小林幸治他訳）……「社会契約」という考えは，上記ロック，ホッブス，ルソー，カントなど多くの思想家に見られ，それぞれ内容が異なる。ルソーの場合は，「全員一致」（不賛成の者を無理には参加させない）を根幹とする根源的約束である。その目標は，「平等な構成員による共和国の建設」である。共和国は公的人格であり主権者であり，構成員は市民（主権に関わる）にして臣民（国法に従う）である。国家は「一般意志」（国家意志）を持ち，国家の執行部が或る市民に対し「汝の死ぬことが国家の為に必要である」と判断するなら，「市民は死なねばならない」とする。これは明らかに全体主義の様相を呈する。ルソーはまた「立

法」に関して、その仕事ができるのは抜きん出た「神的人物」だけだとしているのも注目される。「政府」の構成は選挙による代表者を以てする（最も賢明な人々が民衆を支配するべし）と考えている。ともあれルソーにあっては、「自然人」（国家成立以前の孤立人）から「市民にして臣民」への大転換が志向され、教育もこの転換のために行われると言う。この転換の仕方こそ問題であり、ルソーとさえも「自然万歳人間万歳」と見なすような甘い把握は差し控える必要が生じてくる。

5 . カント『永遠平和のために』（岩波文庫）……国家法に続いて国際法を立てる法的理念が目指すのは、「世界平和」である。いかなる民族も他に従属しない「民族自決」の原理で貫き、具体的には「国際連合 Völkerbund」を設立すべし、というのがカント（その具体的内容はほぼ今日の国連）。本来的自由人の「調和」の為の全条件が法である。

（筒井文隆）

経済と福祉

今日、教育、福祉、環境・資源、労働といった社会経済生活のいろいろな場面で、「公正」、「公平」、「正義」、「平等」、そして「自由」の問題を、根源的なレベルでとらえ直す必要が生まれている。その背景には、次のようなことが考えられるだろう。21世紀を迎え、グローバリゼーションとか、地球環境問題とか、また少子・高齢社会の到来など、誰もが例外なくその影響を受けざるをえない諸問題が台頭してきており、そしてこれらの諸問題に対応しようとするとならなく、「人権」、「正義」、「公平」、という諸問題に突き当たってしまうことである。言いかえれば、かたや20世紀、人間が一生懸命に追いかけてきた物質的繁栄と、かたや社会の連帯、公共性の形成、そして「自由」の間に、どのように「折り合い」をつけることができるかが、改めて大きく問われるようになってきた。

このように、「社会と正義」は現代社会の重要なトピックスとなっている。ただ、振り返ればこの問題は、社会科学など学問の領域では、今までも基本的なテーマとして取り上げられてきた。したがって、私たちがこの問題を学ぶには、二つの作業を同時に行わねばならない。一つは、今、私たちが関わっている問題は何かについて、広く、豊かで、そしてシャープな感覚を磨くこと、もう一つは、問題の原点をきちんと理解出来るように、知識と学力を蓄えることである。いずれにせよ、今日の「社会と正義」の問題には、特に経済の問題が深く関与している。ここでは、主に経済学の領域から、二つの作業を進めるのに役立つと思われる、必読書や興味深い書物を五冊紹介しよう。

1. 内橋克人編『経済学は誰のためにあるのか - 市場原理至上主義批判』(岩波書店, 1997年)

98年度のノーベル経済学賞は、福祉を経済学と倫理学の両面から研究し、開発経済学の領域でも大きな足跡を残すインド人のアマーティア・センに贈られた。センは、経済学にとって学際的な交流と社会問題への積極的な対応がいかに重要で

あるかを特に強調している。センの書物を勉強するのも良いが、まず、センの問題提起の意味を考えるためにも本書を読んで欲しい。

9人の日本の経済学者と、経済ジャーナリストである編者との対話という形をとっているので読みやすい。扱われているのは、いずれも最もホットな日本と世界をめぐる経済問題ばかりである。今、日本と世界の経済の現実はどうなっているか、またそれを分析する道具である経済学の側には何が求められているか、この二つのテーマを、経済と公平、経済と公正という視点から同時に考察できるようになっている。

2. 宇沢弘文・高木郁朗編、『市場・公共・人間』(第一書林, 1992年)

本書では、社会における「公正」、「公平」、「正義」が、ロールズのように規範や倫理の理論としてでなく、環境権や納税者の権利や教育権等々という多様な型をとって展開していること、また新しい再分配のシステムや制度として具体化されなくてはならないということが論じられている。

本書の構成は、大きく理論編と歴史・現状編とから成り、後者では、自然環境、都市問題、農山村、福祉、交通、医療と教育、さらに廃棄物や政治・行政の問題などがとり上げられている。社会的インフラストラクチャーはいかなる形で形成されるべきかなど、「社会と正義」に関する多様で具体的な議論であり、本書の扱う興味のある領域から自由に読んでみるとよいだろう。きっと思考が広がるだろう。

3. 宇沢弘文・宮本憲一著『社会の現実と経済学』(岩波書店, 1994年)

著者たちをふくむ五人の経済学者が、書物と同じタイトルで行ったシンポジウムの記録である。

前書と同じように、「公正」や「公平」の原則を基盤とする「新しい社会経済システム」は一体どのようにしてつくられるかを、貧困、環境・資源、南北問題など今日のグローバルな経済問題を取り上げ乍ら考察している。

最初に述べたように、「社会と正義」というテーマは、二十一世紀へ続く現代最大の社会問題である。本書のような、現代社会に関する真摯な問い直しの作業を

共有し、一度著者たちの提起する問題を引き受け、一緒に考えてみることは、大変有益だと思われる。そのためにも、一読を薦めたい。

4. ジョン・フリードマン著『市民・政府・NGO “力の剥奪”からエンパワメントへ』(新評論, 1995)

「公平」、「公正」、「正義」の問題は、決して国内的、一国的な問題としてあるだけではない。むしろ、現在では、国際的な次元で、「公正」、「公平」をどう実現するかが大きな課題となっている。フリードマンのこの書物は、従来の開発路線において「社会的な弱者」とされてきた人々の社会的な「力の回復」(エンパワメント)の問題を論じている。豊富な事例を挙げながら、開発の政治経済的な諸側面を描き、適正な経済発展と社会的平等の重要性という問題を提起している。「社会と正義」の問題を、グローバルな、国際的な広がりの中で考えるのに恰好の書物だろう。

5. アマーティア・セン著、池本幸生他訳『不平等の再検討 - 潜在能力と自由 -』(岩波書店, 1999)

最初に紹介したアマーティア・センの待望の訳書である。センの書物は、いずれも難しく、必読書でありながら紹介するのをついたためらってしまう。しかし、この書物はセン自身が、一般の読者に読みやすく書いたとだけあって、決して易しくはないが初心者でも食いつける書物となっている。

ここでは、「平等」「不平等」「貧困」といった問題が、本来人間がもつべき「自由」とはいかなるものかという考察と関わらせて論じられる。また、「機能」とか「ケイパビリティ」というセンに独自の概念とともに、「自由」「平等」「福祉」という基礎概念がどのように新しく読み替えられるべきかが検討されている。アジア人であるセンの視点が感じられることも興味深い。しかし、何といても、「経済と倫理」という、アダム・スミスの経済学以来のテーマに、もっとも今日的な問題意識をもって取り組んでいるその内容は、「社会と正義」の問題を考えるには必読の書となっている。

(松川誠一)

ボランティアとNPO

1995年の阪神・淡路大震災では行政が機能不全に陥ったのに対して、ボランティアや民間のNPO(Not-for Profit Organization, 非営利組織)の機敏な行動が復旧に大きく貢献した。これをひとつの契機に、ボランティアやNPOということばが頻繁にマスコミに登場するようになった。こんにちボランティアやNPOは、福祉、教育、環境、まちづくり、芸術文化、人権擁護などさまざまな分野で発展著しく、市民生活に欠かせないものとなった。

ただしことばが急速に広まったせいか誤解も多くある。もちろんボランティアとNPOは、誰からも強制を受けないという自発性が原則である。ボランティアが無償性を原則に個人が活動単位となるのに対して、NPOは非営利性を基礎に組織が活動単位となる。ここで非営利性とは「収益を利害関係者に分配してはいけない」という意味であって、「収益を得てはならない」という意味ではない。わが国では、NPOは、NPO法人(特定非営利活動促進法により認証された特定非営利活動法人)や市民団体のみを指すことが多いが、国際的には財団や社団、学校法人、社会福祉法人等もNPOである。

1 入 門

本間正明・出口正之『ボランティア革命』東洋経済新報社、1996年 は、阪神・淡路大震災の復旧に尽力したボランティアの活躍を生き生きと描く。

田中尚輝『ボランティアの時代』岩波書店、1998年 は、ボランティアの意義と役割を簡潔に述べる。なお、ボランティアのすばらしさ等の体験談は

永六輔『「無償(ただ)」の仕事』講談社、2000年 等数多くの本がある。

金子郁容『ボランティア もうひとつの情報社会』岩波書店、1992年 は、ボランティアを人と人とのネットワークの根幹に位置づける。

山内直人『NPO入門』日経文庫、1999年、同『NPOの時代』大阪大学出版会、2002年 は、NPOの理論や存在意義などを学べる格好の入門書である。

山岡義典編『NPO基礎講座』『同2』『同3』ぎょうせい,1997・98・99年 は各分野の活動状況と資金調達などのマネジメント課題がまとめられている。

電通総研編『民間非営利組織NPOとは何か』日本経済新聞社,1996年 は,社会サービスの提供者としてNPOの役割を述べている。

雨宮孝子他編『ボランティア・NPO』中央法規出版,2002年 には,ボランティアの理念や歴史,法律,実際の活動方法などがまとめられている。

II 現 状

山内直人編『NPOデータブック』有斐閣,1999年 は,ボランティアやNPOの活動分野,寄付,法,税制などを国際比較も踏まえて詳細に,かつ見開きの図表入りで論じた便利なデータ集である(用語集,関連URLつき)。

中村陽一・日本NPOセンター編『日本のNPO2001』日本評論社,2001年 は,各分野のNPOの現状を明らかにする。

NPO法の制定過程やNPOと行政とのパートナーシップについては,山本啓他編『NPOと法・行政』ミネルヴァ書房,2001年 がある。

下河辺淳監修『ボランタリー経済学への招待』実業之日本社,2000年,下河辺淳監修『ボランタリー経済と企業』日本評論社,2002年,金子郁容他『ボランタリー経済の誕生:自発する経済とコミュニティ』実業之日本社,1998年 は,人々の自発的な活動が今後新たな経済社会を形作ると予測する。

白書・統計書として,経済企画庁(当時)『平成12年版国民生活白書:ボランティアが深める好縁』大蔵省印刷局,2000年,同『平成12年版国民生活選好度調査』同,2000年 は,人々のボランティアやNPOへの関心,活動の問題点を鮮やかにえぐり出す。経済企画庁『日本のNPOの経済規模』大蔵省印刷局,1998年,内閣府『市民活動レポート』財務省印刷局,2001年, は,NPOの雇用,収入・支出の現状をデータにより検証する。

(社)日本青年奉仕協会『ボランティア白書2001』は,ボランティアによる未来社会へのデザインを描く。内閣府『平成13年度 社会生活基本調査』は,男女別年齢別にどの分野でボランティアが行われているかがわかる。

III 国際比較

ボランティアとNPOの現状を探るとき国際的な観点が必要である。

L. サラモン他, 今田忠監訳『台頭する非営利セクター』ダイヤモンド社, 1996年 は, 1990年時点の12ヶ国の非営利セクターの現状と展望をまとめている。

95年時点の26ヶ国の状況は, 山内直人編『NPOデータブック』有斐閣にある。

山岸秀雄編『アメリカのNPO』第一書林, 2000年 は, アメリカ建国以前から存在したNPOの多様な姿を描き出すとともに, ボランティア・NPO教育の現状を示す。

NPOに相当することばはイギリスでは「チャリティ」といい, 大陸ヨーロッパではNPOと農協や共済, 協同組合等を合わせて「社会的経済」という。

J. ドゥフルニ他編, 富沢賢治他訳『社会的経済』日本経済評論社, 1995年 は各国の現状と問題点をまとめている。

IV さまざまな分野

まず, 福祉では,

さわやか福祉財団『NPOが描く福祉地図』ぎょうせい, 1998年

社会保障研究所編『社会福祉における市民参加』東京大学出版会, 1997年

朝倉美江『生活福祉と生活協同組合福祉: 福祉NPOの可能性』同時代社, 2002年 は, 市民主体による生活課題の解決方法を説く。

教育では,

日本社会教育学会『ボランティア・ネットワーク: 生涯学習と市民社会』東洋館出版社, 1997年

芸術文化では, 佐々木晃彦編著『文明と文化の視角』東海大学出版会, 1999年

まちづくりでは,

ハウジングアンドコミュニティ財団『NPO教書』風土社, 1997年

災害救援では, 伊永 勉『災害ボランティア読本』小学館, 1998年

政策形成については,

アーバンインスティテュート, 上野真城子訳『政策形成と日本型シンクタンク』東洋経済新報社, 1994年

下河辺淳『政策形成の創出：市民社会におけるシンクタンク』第一書林，1996年 などがある。

NGOについては，伊勢崎賢治『NGOとは何か』藤原書店，1997年

J.フリードマン，斎藤・雨森監訳『市民・政府・NGO』新評論，1995年

曹洞宗ボランティア会『アジア・共生・NGO』明石書店，1996年

国際協力NGOセンター『国際協力NGOダイレクトリー』2002年 等がある。

協同組合や労働組合の市民社会における新たな役割については，

富沢・川口編『非営利・協同セクターの理論と現実』日本経済評論社，1997年

林雄二郎，連合総合生活開発研究所編『新しい社会セクターの可能性：NPOと労働組合』第一書林，1997年 がある。

まちづくりや都市の再生で話題の社会的起業(企業)家については，町田洋次『社会起業家』PHP新書，2000年 がある。

エイミー・ドミニ，山本利明訳『社会的責任投資』木鐸社，2002年 は，世の中を変えながら資産形成をはかるといふ新しい考え方を紹介する。

地域の活性化で注目を集める地域通貨については，

加藤敏春『エコマネーの新世紀』勁草書房，2001年 が包括的である。

R.バットナム，河田潤一訳『哲学する民主主義』NTT出版，2001年 は，市民社会発展の鍵としてボランティアやNPO等を含むソーシャル・キャピタルの重要性を指摘する。

V メセナやフィランソロピー

企業の社会貢献活動としてのメセナ(芸術文化支援)やフィランソロピーについては，川添登・山岡義典編『日本の企業家と社会文化事業』東洋経済新報社，1987年 出口正之『フィランソロピー：企業と人の社会貢献』丸善，1993年

本間正明編著『フィランソロピーの社会経済学』東洋経済新報社，1993年

林雄二郎・加藤秀俊編『フィランソロピーの橋』TBSブリタニカ，2000年

林雄二郎・今田忠編『改訂版 フィランソロピーの思想：NPOとボランティア』日本経済評論社，2000年

企業メセナ協議会編『メセナ白書』ダイヤモンド社，2000年 などがある。

VI マネジメントと評価

ボランティアやNPOの活動が盛んになるとともに問題点も明らかになってきた。自発的な活動といえどもマネジメントや評価が欠かせない。

田中弥生『「NPO」幻想と現実』同友館，1999年 は，資源のミスマッチを軸に問題点を探り，

S・オズボーン編著，ニノミヤ・アキエ・H監訳『NPO マネージメント:ボランティア組織のマネージメント』中央法規出版，1999年

小島廣光『非営利組織の経営：日本のボランティア』北海道大学図書刊行会，1998年 は，企業経営とは異なるボランティア・マネジメントを詳述する。

最後に，非営利活動を専門に学びたい人には，

E. ジェイムズ他，田中敬文訳『非営利団体の経済分析』多賀出版，1993年

山内直人『ノンプロフィット・エコノミー』日本評論社，1997年

山内直人・塩澤修平編『NPO研究の課題と展望』日本評論社，2000年

がある。専門誌には，大阪ボランティア協会『月刊 ボランティア』，日本フィランソロピー協会『月刊 フィランソロピー』などがある。

専門学会には日本NPO学会 (<http://www.osipp.osaka-u.ac.jp/janpora>) や日本ボランティア学会，国際ボランティア学会などがある。英文 journal は略した。

(田中敬文)

総合学芸領域
文化系

近代文学と思想

近代文学と社会

まずは<ワクワクしながら読める名作>という観点から

松本清張 『砂の器』 谷崎潤一郎 『春琴抄』
夢野久作 『ドグラ・マグラ』 三島由紀夫 『金閣寺』
中里介山 『大菩薩峠』 倉田百三 『出家とその弟子』
尾崎紅葉 『金色夜叉』 シェークスピア 『マクベス』
大岡昇平 『野火』 ドストエフスキー 『カラマーゾフの兄弟』

(大井田義彰)

次にあくまでも参考として、学生本位に、日本文学の名作から10作品(10作家)を選んでみれば、次のような例があげられる。

樋口一葉 『たけくらべ』 泉鏡花 『眉かくしの霊』
夏目漱石 『吾輩は猫である』 幸田露伴 『幻談』
芥川龍之介 『歯車』 川端康成 『山の音』
庄野潤三 『夕べの雲』 古井由吉 『杳子』
中上健次 『枯木灘』 村上春樹 『風の歌を聴け』

(山田有策)

大家の名作は苦手だというヘソマガリには、短編・中編・長編に分けて、それぞれ5作品を中心に推薦しておく(15人の作家は重複を避けてある)。

(a) まず10分で、多くても20分以内で読める短編・コントから。

太宰治 『待つ』 井伏鱒二 『へんろう宿』
坂口安吾 『風博士』 開高健 『玉、砕ける』
森鷗外 『ぢいさんばあさん』

鷗外の『ぢいさんばあさん』は『安井夫人』とともに、取っ付きにくい・冷たい作家のイメージを変えてくれる名品である。掌編(コント)は生涯にわたって百編以上書き続けた、川端康成の得意としたところで、息の長いのを敬遠したい人には『掌の小説』など最適。もっとも、好き嫌いもあろうから、梶井基次郎では『Kの昇天』、龍之介では『ピアノ』を、掘り出し物として深沢七郎『南京小僧』をあげておく。これは上記5作を超えるほどの絶品。掌編作家では、他に『冥途』等の内田百閒に注目すべきであろう。中島敦なら『名人伝』、正宗白鳥では『リー兄さん』がスゴイ。

(b) 次に30～40分ほどで読める作品から。(ふつうはこれらも短編に入れるが。)

横光利一 『機械』 大江健三郎 『死者の奢り』
野坂昭如 『骨餓身峠死人葛』 安岡章太郎 『ガラスの靴』
古井由吉 『人形』

野坂は『エロ事師』たちの かるみ も味読してもらいたいが、求心力のある短い作品が読ませる。その 語り は一級品の味わいがある。志賀嫌いには『范の犯罪』や『剃刀』等、異常神経を素材にした作品を、太宰嫌いの人に『女生徒』や『駈込み訴へ』等、いわゆる中期の 語り の作品を勧めておく。余人の追隨を許さぬ迫力が受け付けられなければ、筋金入りの太宰嫌いである。他にこの長さのものでは、黒井千次にも興味深い作品が多い。

(c)長編といっても、文庫本の厚さで1 cm以下のもの。作品の傾向は少々選者本位のところがある。

梅崎春生 『幻化』 小島信夫 『抱擁家族』
深沢七郎 『檀山節考』 高見順 『故旧忘れ得べき』
川端康成 『眠れる美女』

高見順は『いやな感じ』もスゴイが、これは2 cm近い厚さ。『眠れる美女』は中編『片腕』とともに鬼気迫る傑作。ただし谷崎の『鍵』や『瘋癲老人日記』と同じく、老人の性を素材にしたスゴ腕のもの。『雪国』や『山の音』等々の 美しい日本の私 を描いた川端作品も素晴らしいが、日本 も 私 も 美 しくない

ことに気づき始めたら、これらの作品を試してみたらいかが。「老人」という言葉の付かない性をむさぼり読みたいムキには、『暗室』を頂点とする吉行淳之介がオススメ。

(関谷一郎)

日本美術の解釈

全ての学問がそうであるように、学問のはじまりは、物事や対象に対しての興味や関心・好奇心、そこから生まれる感銘や感動がなければ成立しない。とくに美術の解釈においては、これが顕著に現われる。美術の解釈は、作品やビジュアルな対象物をまず鑑賞して、これと何らかの関係をもつところからしか始まらない。ところが実際は、“この仏像は一体どこがよいのだろうか”とか、“どうしたら絵がわかるのか”といった、鑑賞以前の素朴な質問に悩まされることが随分と多い。質問者が作品を観て、本当はどのように感じているかが肝要なのだが、何でも即物的にわかろうとする今の風潮なのかもしれない。

とはいっても、何らかの契機がなければ、美術品と接する機会すらもてないというのも現状だろう。今の義務教育では、通り一ぺんに美術館を案内して美術鑑賞と称するのはまじなほうで、美術史の扱いは教科書の小さな図版写真へと押しやられ、感動をとまなうはずの美術の解釈は、単なる知識の羅列に過ぎないのが現状で、これが美術品に対し「食わず嫌い」にしている一因ともなっている。

しかし現代は、美術館や博物館、またデパートなどでも展覧会は盛んに開催されている。これらの案内は、例えば『芸術新潮』や『月刊文化財』などの雑誌にも掲載され、最近では新聞の催し物案内でも手軽に知ることができる。更に各地の社寺における、宝物や文化財の定期的な公開もあり、その気になれば、現代は美術品を観る機会に過剰なほど恵まれているといえよう。

本学における授業、日本美術の解釈も、本来なら作品に接しての実体験から出発すべきだが、実際の内容はこれと異なっている。実際の美術作品に代わるものとして、スライドや図版を多用し、さまざまな角度からの解釈を試みる。とくに本講義では、絵画史研究における新たな成果に基づき、詳細な作品の解釈を試みる。具体的には、平安時代から江戸時代に至るまでの作品を各授業ごとに一つ取り上げ、作品に施された仕掛や趣向を分析し、図像の象徴的な意味を読み解いて、創造の契機となった重層的なイメージについても考察する。更に作られた時代と

現場を想像しながら、作家の精神の遍歴をたどり、作品に対しての注文主（パトロン）や享受者の関係についても論ずる。

本講義に関連のある図書

『絵は語る』（全14巻・別巻1巻）

山水屏風／仏涅槃図／阿弥陀聖衆来迎図／源頼朝像／如拙筆・瓢鮎図／雪舟筆・天橋立図／雪村筆・呂洞賓図／狩野秀頼筆・高雄観楓図屏風／俵屋宗達筆・松島図屏風／彦根屏風／湯女図屏風／与謝蕪村筆・夜色楼台図／酒井抱一筆・夏秋草図屏風／葛飾北斎筆・凱風快晴

なお以下の図書も、日本の絵画史を学ぶ上でのいわゆる基本図書になっている。随時参考にするのが望ましい。

概説的なもの

『日本美術史』 山根有三監修 美術出版社

（日本美術を概説的にみるのに便利）

『岩波 日本美術の流れ』（全7冊）辻惟雄・高階秀爾監修 岩波書店

（同じ岩波の翻訳出版『ケンブリッジ・西洋美術の流れ』の日本版、世紀区分にしているのが特色）

『カラー版 日本美術史』 辻惟雄監修 美術出版社

（近年の研究成果も取り入れ、コンパクトながら図版も豊富）

年表

『日本美術史年表』 源豊宗編 座右宝刊行会

（一人の美術史家が編んだ労作）

『原色図典 日本美術史年表』 太田博太郎・他監修 集英社

（カラー図版を豊富に入れている）

ハンドブック的な図書

『日本の美術』 至文堂

（ジャンル別・作家別で、現在400号を越えて継続刊行中）

『新潮日本美術文庫』 新潮社

（雪舟から始まり近・現代に至るまでの作家別の文庫本、手軽に読めるのが特色）

全集（既刊されているもの）

『原色日本の美術』（全20巻）小学館

（本格的な日本美術全集の草分で、ジャンル別・作家別）

『水墨美術大系』（全15巻・別巻2巻）講談社

（中国絵画のはじまりから、日本の水墨画に至るまでの集大成）

『日本美術全集』（全25巻）学習研究社

（ジャンル別・作家別で、図版が綺麗なのが特色）

『日本美術絵画全集』（全25巻）集英社

（作家ごとに各巻独立している）

『日本美術全集』（全24巻・別巻1巻）講談社

（もっとも新しい研究論文と、外人研究家の論文が収録されている）

『日本の絵巻』（全20巻）『続日本の絵巻』（全27巻）小松茂美編 中央公論社

（他の絵巻物全集と比べ図版が大きく見やすいのが特色）

海外流出の美術品

『在外日本の至宝』（全10巻）毎日新聞社

（アメリカ所蔵のものが中心）

『秘蔵 日本美術大観』（全12巻）講談社

（東欧に流出した日本美術も含め、ヨーロッパが中心になっている）

上記の他、現在刊行中、あるいは予定の日本美術に関する単行本・全集は膨大な数量にのぼる。これらは高価なものも多く、上記全集本も含め絶版になっているものもある。そのため学生諸君は図書館や研究室を積極的に利用していただきたい。なお近年は、若い研究者による注目すべき論文も出版されてきている。これについては授業の過程で示していきたい。美術の解釈においては、すぐれた美術史の図書や論文を選択する眼を養うこともまた必要である。

（小川知二）

人生と思索 A

もしも人生を旅にたとえるなら、すべての人間は旅人であるといえる。この講義では、人間が賢明な旅人であるためには何を目指し、何をより所として歩いて行けばよいかを学ぶ。一言でこの講義の趣旨を言うなら、それは生きる知恵・旅する知恵を学ぼうとするものである。だから、受講者のための読書案内も、単なる学知（scientia）の書というよりは、知恵（sapientia）の書を挙げようと思う。

サン・ヴィクトルのフーゴーはその著書『読解論』Didascalicon（中世思想原典集成第9巻、平凡社）の中で、研究（studium）に必要なものは何かを論じて、こう言っている。

「三つのことがらが研究するものたち（studentes）に必要である。一つは素質（natura）であり、一つは修練（exercitium）であり、一つは学修（disciplina）である。「素質」という言葉において考えられていることは、耳にしたことがらの意味をたやすくつかむということであり、つかんだことがらをしっかりと保持するということである。「修練」という言葉において考えられていることは、うまずたゆまず、持って生まれた^{てんひん}天禀を耕しつくすということである。「学修」という言葉において考えられていることは、称賛に値するしかたで生きながら、日々の行ない（mores）を学知（scientia）と結合するということである。」

この講義では、このような意味での「学修」について取り上げようとする。

以下に、このような「学修」について論じた書、ないし、このような「学修」を生きた人についての書を挙げる。

稲垣良典 『恵みの時』 創文社

稲垣良典 『天使論序説』 講談社

ピエール・リシェ 『聖ベルナル小伝』 創文社

アウグスティヌス 『告白』 中央公論社

『アウグスティヌス著作集』 教文館

トマス・アクィナス 『神学大全』 創文社

『中世思想原典集成』 平凡社

紀元2世紀の古代キリスト教教父時代以来1500年にわたる中世思想のいとなみを原典からほとんど本邦初訳の形で提示した全20巻の叢書。2002年に完結。神学・哲学・神秘思想関連のテキストが収められている。

『キリスト教教父著作集』 教文館

325年のニケア公会議までの初期教父の原典の翻訳叢書。

『キリスト教神秘主義著作集』 教文館

ギリシア教父に始まり、ベルナルド、ボナヴェントゥラ、エックハルト、クザーヌスをへて、キエティスム、サン・マルタンにいたる神秘主義の系譜をたどる。

『キリスト教史』(平凡社ライブラリー) 平凡社

永井 隆 『ロザリオの鎖』(アルバ文庫) サンパウロ

永井誠一 『私のいのちと人生』(アルバ文庫) サンパウロ

荒井洋一 『アウグスティヌスの探求構造』 創文社

稲垣良典編 『教養の源泉をたずねて - 古典との対話』 創文社

山田 晶 『トマス・アクィナスのキリスト論』 創文社

池田晶子 『考える日々』 毎日新聞社

今道友信 『ダンテ『神曲』講義』 みすず書房

加藤信朗 『哲学の道』 創文社

(荒井洋一)

映像文化

映画はすでに100年の歴史を持つが、それが第7芸術としての地位をはっきり占めるようになったのは比較的最近のことであり、いまだ映画の歴史など定まったものとして存在するわけではない。当然ながら、本稿では筆者の独断と偏見で選考していることを予めお断りしておきたい。選択にあたって、現役か、ほぼ現役の監督に絞ることにした。映画はまず何よりも同時代性を尊ぶ芸術であると考えてのことである。しかしある程度映画を見るようになったら、過去の傑作もぜひ見て欲しい。

まずフランスでは、われわれになじみがいいのはヌーヴェル・ヴァーグ期の監督からだろう。まずジャン＝リュック・ゴダールがいて、この人で初めて見るべきは『勝手にしやがれ』と『気狂いピエロ』だろう。次いで、いつもひたすら愛情のことを考えていたフランソワ・トリュフォーがいる。この人はどれもいいが、強いてあげると、『突然炎のごとく』と『ピアニストを撃て』かな。またルイ・マルは、少年時代の魅力を描いたり(『好奇心』)、あるいは人間の暗い面を描いた作品(『ルシアン青春』)が多い。また比較的最近注目されてきた監督エリック・ロメールは、若い娘の生態を撮ることを主眼としているが(『友だちの恋人』、『冬物語』)、しかし彼の作品はフランス文化の深い古典的教養に裏付けられていて、油断できない。

またこれとは別にジャック・ドゥミがいて、深い抒情味をたたえた作品を撮り、これが泣ける(代表作は『シェルブールの雨傘』)。

ヌーヴェル・ヴァーグ以降の現役監督としてはジャン＝ジャック・ベネクスがいる。彼女の処女作『ディーヴァ』は万引き少女、おたく少年、変なおジサンなどが絡み合って不思議なメルヘンの世界を作り上げている。彼のもう一つの『ベティーブルー』は現代最高のラブ・ストーリー。私小説ならぬ私映画をとり続けるのはレオス・カラックスで、彼の『ボーイ・ミーツ・ガール』、『汚れた血』、『ポンヌフの恋人』はいずれも「青春」していい。そのほかフランスのティーンエ

イジャーに一番支持されているリュック・ベッソンには、すっきりさわやか映画『グラン・ブルー』、変なのがいっぱい出てきて凄くおもしろい『サブウェイ』がある。

ヨーロッパではまずせないところとしては、イタリアにルキノ・ヴィスコンティがいて、最高に豪華で、最高に内面的な映画を撮った(『ヴェニスに死す』、『ロードヴィッヒ』)。またフェデリコ・フェリーニにはジャーナリストの精神的彷徨をたどった『8 1/2』がある。さらにはベルナルド・ベルトルッチは『暗殺の森』を撮ったが、これは人生の愉悦と卑怯な人間性が絡み合った不思議な魅力のある作品である。そしてタビアーニ兄弟は主としてイタリアの地方色豊かな風景を背景にしながら、素朴な味わいのある物語をいくつも撮っている(『カオス・シチリア物語』、『太陽は夜も輝く』)。

またスペインではヴィクトル・エリセが『ミツバチのささやき』、『エル・スール』といった幼年時代の世界を舞台にした作品を撮っている。また、ペドロ・アルモドバルはキッチュな画面を駆使しながら、親子、恋人の間の強い愛情と葛藤を見事に描き出している。

スウェーデンにはイングマール・ベルイマンがいて、非常に手堅い作品構成をとりながらも神の沈黙をめぐる深い内容の作品を撮った(『第7の封印』、『野いちご』)。

また同じ北欧にはアキ・カウリスマキがいて、『ラ・ヴィ・ドボエーム』、『コトラクト・キラ』など、とぼけた味わいの佳作を作り続けている。

またロシアではアレクサンドル・タルコフスキーが人間の心の一番奥底にあるものを暴露するとどうなるか、というテーマで何本もすばらしい作品を撮った。おそろしく難解だが、わかると感動的(『惑星ソラリス』、『ノスタルジア』)。

現在世界の映画界では第3世界の進出が目立っているが、めぼしいところでは台湾にホウ・シャオシェンがいて、『恋々風塵』、『非情城市』などを撮っている。またイランではアッバス・キアロスタミが『友だちのうちはどこ』、『そして人生は続く』などで何ということのない日常を追いながら、素晴らしい色彩の画面と詩情を作り出すことに成功している。

日本で見るとすべきは、まず小津安二郎である。彼は日常生活のなかの何気ない所

作にひそんでいる強い感情の描出に成功して、現在でも世界の映画界に大きな影響を与えている（『東京物語』、『晩春』）。また溝口健二も忘れられない（『雨月物語』）。そして黒沢明はその骨太な人間観で世界中の観客を魅了した（『7人の侍』、『羅生門』）。

アメリカはハリウッドを拠点として世界最大の映画産業を擁している国であり、一般向きに優れた作品も多い。しかしそうした作品については改めて説明する必要もないので、ここでは独立系の監督の名前だけを挙げておきたい。まず、ドイツ人だがアメリカでも活動しているヴィム・ベンダースがいる。彼は普通の意味での男女の愛情には興味がなくて、大人と子供との愛情（『パリ・テキサス』、『都会のアリス』）とか天使の憐憫的な愛情（『ベルリン・天使の詩』）などをテーマにしている。ついでジム・ジャームッシュは非常にクールでおかしい映像をとる（『ダウン・バイ・ロー』、『ナイト・オン・ザ・プラネット』）。またデヴィッド・リンチは家庭的な暖かい愛情と変態的な愛情が共存している感動的な世界を表現している（『ブルー・ベルベット』、『ツイン・ピークス』）。また黒人監督スパイク・リーの愉悦感に満ちた社会問題映画『ドゥ・ザ・ライト・シング』、『ジャングル・フィーヴァー』なども忘れられない。最後にごく最近現れた才能として、監督とシナリオライターをつとめるクエンティン・タランティーノは特筆に値する。彼の作る映画はこれまでの映画の文法をこわしながら、なにかわけのわからないオモシロサに満ちている、と言ったらいいか（『パルプ・フィクション』、『トゥルー・ロマンス』）。

（石木隆治）

文学と社会

「古典文学には興味があるけれども難しい。文法も苦手だし……。」「古典文学は現代語訳を読めば内容はわかるのでは？」「マンガで読んだ方が面白い！」と思う人は多いことでしょう。

けれども現代語訳,あるいはマンガで読んでも,何となく,作品が他人のもので,ちっとも自分の内側まで届かない,というもどかしさを感じた人もいないのでしょうか。古典文学の現代語訳,あるいはマンガはそれとして一つの立派な作品です。それは現代語やマンガという表現方法を使った古典文学の翻訳書であり,新たな創造でもあるからです。しかし,読み手はあくまでも仲介者を通して古典文学作品の作者と交信しているため,直接作者の声を聞くことができないわけです。

そこで古典文学作品と自分自身がじかに向き合ってみたい,作者の声を直接聞きたいという人は藤井貞和著『古典の読み方』(講談社学術文庫)を是非読んで下さい。なお「古典文学に興味はあるけれども,とっつきにくいし,何からどうしてよいのか分からない」という人は,田中貴子著『日本古典への招待ー古典を楽しむ九つの方法』(ちくま新書)が参考になるかもしれません。

ところで,私たちは「古典文学」と言いますが,過去に書かれた文学を「古典」として多くの人たちが意識し始めたのはいつごろからでしょうか。いろいろな考え方がありますが,一つの考え方として江戸時代がそれに当たると思います。鈴木健一著『伊勢物語の江戸ー古典イメージの受容と創造ー』(森話社)は,『伊勢物語』が江戸時代の文学の中でどのように享受され,展開していったのかを分かりやすく示してくれます。過去に生み出された文学が,その時代の文学や文化の中で再生し,さまざまな形で人々の中に生き続けていること。これこそが古典文学と人々とのつきあい方であったのです。

さて現在,「古典文学」として江戸時代の文学に触れる機会は,多くはないでしょう。けれども教育が普及し始め,識字率が上昇して,本を読む楽しみを獲得

した読者層が広がって来たのはこの時代でした。そうした新しい時代の中で、読者の存在を念頭に置きながら作られた作品が多く生まれ、やがて時代の経過の中で古典文学として認められていった作品も多くあります。

近世詩歌の一つである俳諧は松尾芭蕉が最も有名ですが、芭蕉の作品世界を明らかに示してくれるものとして尾形竹著『芭蕉の世界』(講談社学術文庫)があります。また近世の小説として最もよく知られる作者は井原西鶴です。その作品のおもしろさを分かりやすく解明しているものに江本裕・谷脇理史著『西鶴のおもしろさ―一篇を読む』があります。西鶴はどんな作品を書いたのか。当時の社会やその中で生きた人々の生き様、人間模様を知る上で良き入門書となってくれるでしょう。

西鶴と並んで良く知られているのは近松門左衛門でしょう。近松は人形浄瑠璃の作者ですが、人形浄瑠璃は文学と演劇の両方の性格を併せ持つものとして位置づけられます。近松の人生や作品について知るためには松平進著『近松に親しむ』(和泉書院)をお薦めします。さらに詳しく知りたい人は鳥越文蔵・信多純一・内山美樹子・井口洋著『近松への招待』(岩波セミナーブックス 31)を読んでみてください。

近世文学の作品の中で古典文学として現代まで受け継がれているものは、種々ありますが、赤穂浪士事件をあつかった『仮名手本忠臣蔵』は良く知られているものの一つです。もととなった実際の事件については現代も時代小説や映画、テレビドラマ等で毎年必ず取り上げられています。こうした現象の原点となっているのが『仮名手本忠臣蔵』です。この作品については渡辺保著『忠臣蔵―もう一つの歴史感覚』(中公文庫)が、歴史事実と近世文学や近世演劇によって作られた虚構の双方を見据えて論じており、魅力的です。

さてこの『仮名手本忠臣蔵』は元来人形浄瑠璃のために作られた作品でした。それが歌舞伎という近世演劇が取り上げることにより、一層の人気を博し、繰り返し上演されて現代にまで至っています。歌舞伎は文学を吸収し、人間の肉体を通して表現することで、書かれた作品世界をより具体的に重層的な世界として立体的に立ち上げていきました。書かれたものが、音声を伴い、視覚的なものとして創造されていくのもこの時代の特色です。そして歌舞伎も現代まで生き続ける古

典となりました。その歌舞伎について知りたい人は、今尾哲也著『歌舞伎の歴史』（岩波新書）。特に現代の文化との関係性に注目して、歌舞伎用語を取りあげながら述べたものとして服部幸雄著『歌舞伎のキーワード』『歌舞伎ことば帖』（どちらも岩波新書）があります。

（黒石陽子）

現代文化

21世紀の人間文化はどのような変貌を遂げていくのだろうか？近代以降、自然科学が独自の路線を確立して、めざましい成果を上げてきた。こうした成果の集積は、世界観と人間観を大きく変えてきたと言ってよい。とりわけ、20世紀からは科学上の成果が技術と一体化して、科学技術が我々の社会の隅々まで覆うようになった。今や人間生活は科学技術の恩恵を浴して、以前では考えられないほど便利で快適なものとなっている。そして、人間の知識と活動の範囲は、物質や生命のミクロレベルの構造から、はては地球外の宇宙空間にまで及んでいる。

しかしながら、その一方で、ひたすら邁進してきた我々の文化・文明が大きな諸問題に遭遇しているのも、周知の事実である。地球を覆う大気には異変が起こり、地球温暖化ということが言われて久しい。また地上では、化学物質による生態系の攪乱が進行している。生物兵器や核問題は相変わらず未解決であり、まかり間違えば人類は絶滅しかねない。それに人間社会の動揺も激しい。教育と道德、政治経済、結婚観や家族のあり方など、様々な面で動揺し続けている。さらに近年に至っては、生命工学や医療技術の劇的進歩により、人間の生死も人為的な操作の対象となり、死生観まで揺らいでいる。

こうした状況下で求められるのは、一度立ち止まって従来の知のあり方を見つめ直し、人間と世界について新たな展望を切り拓いていくことだろう。もちろん、一口に「現代文化」と言っても極めて幅広く、様々な角度から考察が可能だろう。この科目では、哲学と倫理学の見地から、人間と科学に関する考察を行う。そのために、主として20世紀の有力な思想家を取り上げ、彼らが自分達にとっての「現代」にどんな問題意識を持ち、何を解決しようと考えたのか、多少なりとも辿ってみたい。その追体験によって、現在の我々にも問題への手掛かりが見えてくるのではないだろうか。以下では、現代文化の多様性を鑑みて、哲学と倫理学のできるだけ幅広い分野から文献を紹介してみたい。

文 献

A．時代と人間

- ・キルケゴール『現代の批判』岩波文庫

キルケゴールは19世紀に活躍したデンマークの思想家だが、その「現代批判」は今なお価値を失っていない。「人類の平等」という理念はまやかしではないかとか、マスコミによる暴力といった話題が登場する。

- ・ニーチェ『善悪の彼岸』岩波文庫

学生時代に一度は、価値の破壊と新たな創造を説くニーチェの強烈な個性に触れてもよいだろう。

- ・シェーラー『宇宙における人間の地位』白水社（シェーラー著作集 第13巻）

この講演録は、最も魅惑的な問い「人間とは何であり、また、存在のうちに占める人間の地位はいかなるものか」に真正面から答えようとするもの。シェーラーによれば、人間観には、ユダヤ・キリスト教的思想圏、ギリシア思想圏、近代科学と心理学の思想圏という三つの伝統がある。たしかに、それぞれの伝統は何らかの人間観を与えてくれるが、しかしその間には統一が見られず、むしろ分裂してしまっている。そのため、「人間が現代におけるほど問題のとなつたことはかつてなかった」と始まる。

- ・ハイデガー『存在と時間』世界の名著62 中央公論社

ハイデガーは20世紀最大の哲学者とも言われる。この書は1927年に刊行されると、「まるで稲妻のように閃いて、見る間にドイツ思想界の形勢を変えた」と伝えられている。人間を「現存在」と呼んで、その精緻な分析を展開していく過程は圧巻だ。

B．論理・数学・科学の哲学

まずは、論理学の哲学から文献を紹介しよう。『不思議の国のアリス』を書いたキャロルは、

- ・L．キャロル『不思議の国の論理学』朝日出版社

に収められている「亀がアキレスに言ったこと」の中で、興味深い問題を提起

した。それは、論理的真理や演繹の推論がどうしても必然的なのかという問題だ。例えば、「Aと同時にAでないということはない」(矛盾律)は、必ず真であるように思えるが、それはなぜなのか。あるいは、「A」と「AならばB」から、どうして「B」が必ず導けるのか。20世紀は論理についても深く考察した時代である。科学時代の哲学を標榜した論理実証主義は、規約(言葉の使い方に関する約束事)という着想を用いて、この問題に対して十分な解決を与えたと思われた。しかしその後、規約による解決という考えは瓦解していく。こうした問題を考えてみるには、次の書物を見るとよいだろう。

- ・ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』、『哲学探究』大修館書店
- ・クワイン『論理的観点から』劉草書房

また、論理学自体の教科書としては、例えば次の二つが親切な本である。記号が嫌いという人は、後者を読んでみよう。

- ・小野寛晰『情報科学における論理』日本評論社
- ・戸田山和久『論理学をつくる』名古屋大学出版局

次に、数学の哲学からいくつか文献を紹介する。数学は古来から哲学者の関心をひきつけてきたが、少し考えてみただけで、数学には不思議なところがありに多いことに気づくだろう。数や集合は時空上に位置を占めるものとは考えられない。例えば、3はいつから存在するのかとか、どこに存在するのかといった問いは、無意味であるように思われる。数学的対象を自然界に位置づけるのは難しい。だとしたら、数学が扱っている対象をどう考えたらよいのか。また、数学的命題を実験や観察によって確かめたり、反証するというのも考えにくいだろう。科学教育の核をなすと言われる数学だが、皮肉なことに、数学的対象や数学的認識を満足の行くように説明することは、極めて困難なのである。

- ・飯田隆編『リーディングス：数学の哲学(ゲーデル以後)』劉草書房

この分野の代表的な論文を集めたものである。古典としては、

- ・フレーゲ『算術の基礎』勁草書房
- ・ラッセルとホワイトヘッド『プリンキピア・マテマティカ序論』哲学書房
- ・ウィトゲンシュタイン『数学の基礎』大修館書店
- ・ゲーデル『未刊哲学論稿』青土社

最後に、言語哲学と科学哲学からいくつか文献を挙げておく。言語哲学の分野を見渡すには、

- ・野本和幸『現代の論理的意味論』岩波書店
- ・飯田隆『言語哲学大全』全4巻 勁草書房
- ・野本、山田編『言語哲学を学ぶ人のために』世界思想社
が便利だろう。科学哲学を知りたいと思ったら、例えば、
- ・H. ブラウン『科学論序説』培風館
- ・村上陽一郎編『現代科学論の名著』中公新書
をのぞいて、ポパー、クーン、ファイヤアーベントなどの著作を読んでみよう。

C. 応用倫理：生命倫理と環境倫理

生命と環境に関する倫理学の側からの発言としては、

・ヨナス『責任という原理 科学技術文明のための倫理学の試み』東信堂
がある。これは、将来の世代に対する責任の倫理を説いた名著と言われていたが、2000年に翻訳された。シンガーの一連の精力的な仕事も注目に値する。

- ・『実践の倫理』昭和堂
- ・『私たちはどう生きるべきか』法律文化社
- ・『生と死の倫理』昭和堂
を挙げておく。他にも多数の翻訳がある。

生命倫理は、特に1970年代のアメリカで確立されてきた分野である。その「古典」としては、

・エンゲルハート『バイオエシックスの基礎づけ』朝日出版社
・エンゲルハート、ヨナス他『バイオエシックスの基礎 欧米の「生命倫理」論』東海大学出版会

がある。また、

- ・今井道夫『生命倫理学入門』産業図書

は大学の教科書として書かれており、問題がわかりやすく叙述されている。

次に、環境倫理では、

- ・加藤尚武『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー

がある。これは新書版なので安く手に入る。

・伊藤俊太郎編『環境倫理と環境教育』朝倉書店
は、環境教育にも注目した総合的な書物である。また、

・ナッシュ『自然の権利』TBSブリタニカ

ナッシュはもともと歴史家で、ここで環境倫理史を展開している。「自然の権利」という考え方、すなわち、自然を人間の支配から解放していくという思想がどの時点にまで遡り、現代までどう発展してきたかを分析している。最後に、生命や環境の応用倫理を学ぶ上で、この「読書案内」の当該分野で推薦されている文献が大変参考になることを付言しておく。

(三平正明)

ピアノ音楽文化史

私達の回りに溢れる音楽の多くは、西洋音楽から端を発しているといつて良いであろう。ある地域の特定の時代の産物であるクラシック音楽は、今も世界中に溢れ多くの人に愛され、新たな感動を私たちに与え、エネルギーに人々に働き掛ける。

天才とよばれている大作曲家達の生き様は大変個性的で、また圧倒的なエネルギーを以て私達にアピールし続け、時空を超えてますますその作品の意義、大きさ、力強さは増してきているようだ。

本講義では、作曲家の人物像を徹底調査しながら、同時に社会的・時代的背景を考察したいと考えている。

参考文献

- W. アーペル 『ピアノ音楽史』 音楽之友社
大宮真琴 『ピアノの歴史』 音楽之友社・音楽選書
H.C. ショーンバーグ 『大作曲家の生涯』(上・下) 共同通信社
D.G. テュルク 『クラヴィーア教本』 春秋社
ポール・デュ=ブーシェ 『バッハ』 創元社
柴田治三郎 『モーツァルトの手紙』(上・下) 岩波文庫
H.C. ロピンズ・ランドン 『モーツァルト』 中公新書
児島新 『ベートーヴェン研究』 春秋社
石井誠士 『シューベルト・痛みと愛』 春秋社
前田昭雄 『シューマニアーナ』 春秋社
R. シューマン 『音楽と音楽家』 岩波文庫
M. ロン 『ドビュッシーとピアノ曲』 音楽之友社
熊倉洋介ほか 『西洋建築様式史』 美術出版社

(椎野伸一)

英米文学の世界

「英米文学の世界」というタイトルを借りて、今年度は、むしろ文学の周辺に位置する大衆文化の領域にスポットを当ててみたい。

ひとくちに大衆文化といっても、たいへん間口が広く、そのすべての分野を網羅した参考図書目録は膨大な量に及ぶだろう。従って、ここでは20世紀のアメリカの大衆文化に範囲を限り、その中でも特に、最も世界的な影響力をふるったハリウッド映画とポピュラー音楽の2つの文化に注目して、以下の、最も基本的な図書を紹介してみたい。

1 アメリカの大衆文化全般

まず、アメリカの大衆文化の全体像を把握しておくために、次の6冊の中から少なくとも1冊は読んでおくことが望ましい。

『サーカスが来た!』 亀井俊介著 東京大学出版会

『アメリカン・ヒーローの系譜』 亀井俊介著 研究社

『アメリカ大衆芸術物語 全3巻』 ラッセル・ナイ著 亀井俊介・平田純・吉田和夫訳 研究社

『アメリカの大衆文化』 清水知久著 明石書店

『アメリカの大衆文化』 本間長世・亀井俊介編 研究社

『アメリカの文化』 亀井俊介編 弘文堂

また、アメリカの大衆文化を研究する際、アメリカに関する様々な「雑学」が必要になるが、それについては次の事典がたいへん役に立つ。

『アメリカを知る事典』 斎藤真・金関寿夫・亀井俊介・岡田泰男監修 平凡社

2 ハリウッド映画関係

ハリウッド映画の研究はいまアメリカで全盛期を迎えつつあり、日本でも数多くの図書が出版されているが、大部の『アメリカ映画史』をいきなり読みはじめの必要はない。手軽に読める入門書として、次の1冊をぜひ推薦したい。

『ハリウッド映画史講義』 蓮實重彦著 筑摩書房

さらに、ハリウッド映画の歴史を様々な角度から眺める視点を与えてくれるのが、次の5冊である。

『アメリカ映画の文化史』 R・スクラー著 鈴木主税訳 講談社学術文庫

『スターダム』 アレグザンダー・ウォーカー著 渡辺武信・渡辺葉子訳
フィルムアート社

『ハリウッド・バビロン I, II』 ケネス・アンガー著 海野弘監修
明石三世訳 リプロポート

『スキャンダルの祝祭』 ポーリーン・ケール著 小池美佐子訳 新書館

『ハリウッド帝国の興亡』 オットー・フリードリック著 柴田京子訳
文藝春秋

映画をめぐる様々な用語、人名、また映画作品のタイトル等を調べる際、十分に役に立つ事典類が、残念ながら日本ではまだあまり出版されていない。英語の出版物では、オックスフォードから出ている『コンパニオン』が最もしっかりとした内容をもっている。

『The Oxford Companion to Film』 Liz-Anne Bawden, Oxford University Press.

3 ポピュラー音楽関係

20世紀前半のポピュラー音楽は俗にティン・パン・アライと呼ばれるが、この時期のポピュラー・ソングの歌詞が最近非常に注目されており、様々な作詞家の歌詞が集大成されはじめている。日本では、現在刊行中の次のシリーズによって、こういった歌詞の世界に触れることができる。

『ジャズ詩大全』 村尾睦男著 中央アート出版社

20世紀後半のポピュラー音楽は「ロック」として知られるレコード産業を形成しているが、この時期の音楽表現をアメリカ的文化の独自の開花として論じた野心的な批評が数多く発表されている。次の2冊で、その一端に触れることができるだろう。

『ミステリー・トレイン ロック音楽にみるアメリカ像』

グリール・マーカス著 三井徹訳 第三文明社

『ポピュラー音楽の研究』 三井徹編訳 音楽之友社

また、ポピュラー音楽全般にわたる事典として、やはりオックスフォードの『コンパニオン』を挙げておく。

『The Oxford Companion to Popular Music』 Peter Gammond, Oxford University Press.

(畑中佳樹)

インド哲学入門

これからインド哲学を学ぼうとする人に入門書として以下の書物を紹介します。

1．インド哲学及びインド思想全般に関する概説書

金倉円照 『インド哲学史』(平楽寺書店)

中村元 『インド思想史』(岩波全書)

早島鏡正・高崎直道・原実・前田専学 『インド思想史』(東京大学出版会)

立川武蔵 『はじめてのインド哲学』(講談社現代新書)

2．インドの仏教思想に関する概説書

長尾雅人 『仏教の源流 - インド - 』(大阪書籍)

水野弘元 『仏教要語の基礎知識』(春秋社)

『仏教の思想』 第1～4巻(角川文庫ソフィア)

3．インド哲学の各学派や特定のトピックについてさらに理解を深めるために

『岩波講座 東洋思想』 第5～10巻(岩波書店)

『講座 大乘仏教』 全10巻(春秋社)

4．インド哲学の代表的な作品の翻訳

『バラモン教典 原始仏典』(中央公論社 世界の名著1)

『大乘仏典』(中央公論社 世界の名著2)

5 . その他、インド哲学に関する一般向けの書物

辻直四郎 『インド文明の曙』(岩波新書)

服部正明 『古代インドの神秘思想』(講談社現代新書)

梶山雄一 『「さとり」と「廻向」』(人文書院)

(稲見正浩)

ヨーロッパの文学

(ドイツ文学)

その深みにいかなる魔物や妖女が棲んでいるのかわからない青く冴えざえとした水面に、ドイツ文学を喩えることができるかもしれません。そこには、はじめ水しぶきをあげて見知らぬ姿が浮び上がるのですが、しばらくして、どこからか吹いてきた風にさざ波がたち、その見知らぬ姿がともに映っている樹々や雲の影とまざり合うと、突如あたりは闇につつまれ、囁く声だけが聞こえてきます。わたしはあなたの本当の姿です、と囁きかけてくるのです。すると、水面だと思っていたものが、じつは私たち自身の皮膚であったことに、不意に気づくのです。そのような目くるめく体験 私たちの心の奥底にあることばに表しがたいものが、ふしぎな生き物や人間となって現われ、世界の思いがけない真実の姿を見たと思う、そのような体験がドイツ文学の魅力です。外部と思われていたものが内部となり、内部と思われていたものが外部となり、私たちと世界とが同じ糸で編まれているのではないかと、敏感にふるえ感じとる体験です。

ドイツで生まれた教養小説と呼ばれるものも、そのような内部と外部との交感、あるいは結びつきを前提に生まれました。あたたかい心をもつ少年が、いろいろな人々と出会い、恋愛、友人の裏切りなどを経て、いかに生きるべきかを考えながら社会に有用な人物へと成長していくストーリーをもつ小説のタイプを教養小説というのですが、たとえその行路が苦い挫折に終わるとしても、それは内部と外部とをつなぐ糸を追いもとめる旅なのです。そう、旅、あるいは夢の旅ということばこそ、じぶんの心の声に従って生きていく者を主人公とする小説にふさわしいかもしれません。現実と呼ばれるものが、自動車やナイフやコンピューターといった固い物質からだけでなく、きらきら光る、細やかな夢の糸で結ばれてい

ることを、それらの小説は教えてくれるのです。

ところで、その行路がハッピーエンドでなく、悲しい結末に終わるとすれば、そこにはその少年に対するだけでなく、少年の周りの人びとや社会に対する批判もこめられているのです。社会や政治の現実への仮借ない批判は、ハインリヒ・ハイネや『三文オペラ』で有名なベルトルト・ブレヒトの作品に如実にあらわれています。ハイネは愛の詩人として知られていますが、単なる愛の詩人ではありません。ナチスの蛮行と悲惨ののち、作家たちの多く、たとえばハインリヒ・ベルヤ『ブリキの太鼓』のギュンター・グラスは、積極的に政治にコミットすることを潔しとしました。思えば、あのカフカにしても、「きみと世界との闘いにおいて、世界を支援せよ」とノートに書きつけました。文学とはたんに「きみ」の夢を織るだけの作業ではありません。「世界」の側から「きみ」自身を見つめる眼をも引き受け、その眼を「支援」し続けるからこそ、夢もまた夢としてよりリアルになっていくのです。

みなさんがすでに知っているドイツの文学といえば、『グリム童話』やミヒアエル・エンデの『モモ』『はてしない物語』、ヴァーグナーがオペラ化した『トリスタンとイゾルデ』『パルチファル』、あるいはシューマンやシューベルトが曲をつけたドイツ・ロマン派の詩などでしょう。三島由紀夫や辻邦夫といった小説家の眼には、『ブッテンブローク家の人々』などを書いたトーマス・マンが文学者のモデルとして映っていたようです。森鷗外がシュニツラーの『みれん』『恋愛三昧』やゲーテの『ファウスト』を翻訳したことは知っていますか。ドイツで一番愛されている作家は『群盗』のシラーのようです。これから少し系統立ててドイツの小説を紹介しましょう。

(a) 教養小説のタイプ

日本の教養小説といえば、夏目漱石の『三四郎』『それから』『門』の三部作や、志賀直哉の『暗夜行路』、山本有三の『路傍の石』などが挙げられます。フランスではロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』、イギリスではディケンズの『デイヴィッド・コッパフィールド』などですが、このタイプの元祖とされるのが、ゲーテの『ウィルヘルム・マイスターの徒弟時代』です。このタイプの小説を羅列し

てみますと(文庫で入手できるものには*印をつけます。*岩波**新潮***
角川),

ゲーテ 『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』*
ヘルダーリン 『ヒュペーリオン』
ノヴァーリス 『青い花』*
ティーク 『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』
ケラー 『緑のハインリヒ』*
シュティフター 『晩夏』
トーマス・マン 『トニオ・クレーガー』*** 『魔の山』*
ホーフマンスタール 『アンドレーアス』
ヘルマン・ヘッセ 『デミアン』*** 『ガラス玉遊戯』

(b) 幻想小説のタイプ

顕微鏡を覗くと、裸眼では見えないふしぎな世界が見えてきますが、そのように日常の習慣化された眼には見えない世界を日常の世界よりもリアルな世界としてさし出すのが、このタイプの小説です。みなさんの中にも、これらの作品の中のどれかを夢中になって読みふけた人はいませんか。

E.T.A. ホフマン 『砂男』『黄金の壺』* 『ホフマン短篇集』*
クライスト 『アムフィトリオン』『ロカルノの女乞食』
シャミツソー 『影をなくした男』*
ティーク 『金髪のエックベルト』
フーケー 『ウンディーネ(水妖記)』*
クービン 『裏面』
マイリンク 『ゴーレム』

(c) 二十世紀の小説のタイプ

二十世紀は新しい文学の舞台となりました。科学が人間の生活を良くしていく

のではないかという期待への信頼が失われていく一方で、私たちが日常使っている言葉や、個人とか自我とか呼ばれるものが、ほんとうに堅固で安定したものであるかどうか疑わしくなったことに原因します。たとえばフロイトは、ヒステリー患者の症状や夢について研究していくうちに、私たちの内部に私たち自身を超えたエネルギー（リビドー）を発見しましたが、そのように世界や自己についての認識が深まるとともに、文学のありようも変革を迫られたのです。そして、従来の形式や約束事からは考えられないような新しい作品が書かれました。

リルケ 『マルテの手記』 *

ホフマンスタール 『バッソソピエール元帥の体験』 *

トーマス・マン 『ファウスト博士』 * 『ヨゼフとその兄弟たち』

カフカ 『変身』 * * * * 『審判』 * * * * 『城』 * * * *

ムシル(ムージル) 『愛の完成』 * 『黒つぐみ』 * 『特性のない男』

ブレヒト 『三文オペラ』

ヘルマン・ブロッホ 『ヴェルギリウスの死』

ここに名前をあげた作家と作品は、豊かなドイツ文学のなかのほんの一部にすぎません。詩と戯曲については殆ど触れませんでしたし、『賢人ナータン』のレッシングやロマン派の巨匠ジャン・パウル、あるいは『ヴォイツェク』や『レンツ』で知られる天才劇作家ビュヒナーや詩のような散文の名手シュトルムにも触れていません。現代詩の極北に立つパウル・ツェランもいます。まずはどの作品でもいい、1冊の本を手にとることから、このドイツ文学の世界へ足を踏みいれてくれればと思います。あなた自身の思考と感性が、あなたにとって最も確かな、そして一生の間あなたを励ましてくれる道案内です。かつてデルフォイのアポロン神殿に「汝自身を知れ」と刻まれていたそうですが、あなた自身の世界をひらいていくのに、このドイツ文学の世界がきっと役立つにちがいありません。

(赤司英一郎)

(フランス文学)

以下、現在文庫本などで入手しやすい作品にしぼり、フランス文学のエッセンス中のエッセンスを時代別に紹介する。

まず中世。なんといっても中世文学の傑作で読みやすいものといえば『トリスタン・イゾルデ』(岩波文庫)だろう。これはワーグナーのオペラ『トリスタンとイゾルデ』の原作となったもので、二人の男女が誤って飲んだ愛の媚薬のために終生解けない絆で結ばれてしまうが、二人はそうってはならない関係だったという悲恋物語。二人の自発的な意志でなく、魔法の薬によって愛のとりこになるというストーリーによって、中世の人々が恋愛を神秘的に、運命的な現象と見ていたことがわかる。

16世紀はルネサンスと宗教改革の時代だ。ルネサンスも後期に入ると人間能力の異常な拡張が行われるようになったが、そういう時代思潮に呼応してフランスでも身長、能力共に怪物的にスケールのでかい登場人物が現れる。猥雑な冗談に満ちた『ガルガンチュア・パンタグリユエル』(岩波文庫)の物語を書いたのはフランソワ・ラブレー。またこの時代には新教徒、旧教徒の血なまぐさい抗争に与せず、寛容を説いたユマニストの一群がいたが、その流れを汲むのがモンテーニュで、彼は温和な懐疑精神によって地上のあらゆるドグマ、権威に対して穏やかな批判を浴びせた(『エッセ』岩波文庫)。こうした懐疑精神は次の世紀のデカルトによっていっそう徹底的なものとなるだろう。

17世紀はルネサンス期への反動として均整の美を尊ぶ古典主義の時代だが、この時期はヴェルサイユの宮廷で行われた芝居が文芸の中心だった。まず厳格な構成、端正な表現で愛欲のもたらす悲劇を描いたラシーヌ、コルネイユがいるが、岩波文庫に入っていて近づきやすいのは、モリエールの『タルチュフ』、『ドンジュアン』といった喜劇である。こうした芝居はけっこうドタバタ調でおかしいのだけれど、そこでは守銭奴、色情狂、人間嫌いなどの典型的な性格が深く、強くえ

ぐり出されていて、笑いが途中でひきつるようなところもある。

18世紀は啓蒙と大革命の世紀で、この流れに位置する最大の人物は言うまでもなくルソーだ。彼は教育学部生の必読書『エミール』(岩波文庫)の作者として知られるが、同時に『告白』(岩波文庫)の著者であり、自分の生涯を、愛情生活をも含めて赤裸々に記憶していて、大変魅力のある本となっている。一方18世紀は風俗が大いに乱れた時代で、そういうなげかわしい風潮を見せてくれる作品としてふさわしいのが、ラクロの『危険な関係』(岩波文庫)です。また、これはどちらかというとな純愛物語だが、浮気な美少女に翻弄されて罪を犯し、終には植民地アメリカにまで引っ張っていかれるデグリューの哀れな人生を描いたアベ・プレヴォーの『マノン・レスコー』(新潮文庫他)がある。

19世紀はフランス文芸の絶頂期であり、わが国の文学青年に強い影響を与えた詩人ランボー(『地獄の季節』『イリュミナシオン』)とボードレール(『悪の華』岩波文庫他)がいるが、小説のほうも傑作がそろっている。まずわれわれになじみの深いスタンダールは、高慢な美少女マチルドをオトすために冷たい無関心を装って見せる大戦術家ジュリアン・ソレルの物語『赤と黒』(岩波文庫)を書いた。彼は『恋愛論』(岩波文庫)の著者だけあって、恋愛心理の解剖には全くスルドイところがあり、わが国で出版されている凡百の恋愛論、ハウツーものよりずっと深い知識をもたらしてくれます。次いで小説集『人間喜劇』の著者バルザックは情熱(愛欲、金銭欲、発明欲、etc)にあふれ過ぎて、終には破滅していく人物たちを描いていて非常にエキサイティングな作家だが、一方彼が社会を観察する眼は極めて正確で、ペンキョーになる。『ゴリオ爺さん』(父性愛)と『谷間の百合』(純愛)を新潮文庫で読むことができる。三人目の大作家はフローベール。『ボヴァリー夫人』(岩波文庫他)はうだつのあがらない医者と結婚してしまっただが、華やかな生活、すてきな愛人に憧れ続けたあげく破滅する女の物語。

20世紀の傑作は、ジョイス、カフカと並んで今世紀最大の小説家ブルーストの『失われた時を求めて』は筑摩文庫で読むことができる。これは親子、恋人の間の愛情を鋭い感受性で綴った大長編で、グロテスクなページも少々、すごくおかしきページもたくさんあり、2～3ページ読むだけで愉悦と詩情に満ちた独特の魅力のある世界に引き込まれる。この作品がどちらかというとな幸福感を基調として

いるのに対して、セリーヌの『夜の果てへの旅』(中公文庫)は第一次大戦からナチスに至る悲劇的時代のみじめさを、はじけるような文体で描いている。また二次大戦前後の不条理感を背景として書かれたサルトルの『嘔吐』(人文書院)、カミュの『異邦人』(新潮文庫)も忘れられない。

フランス文学の特質を簡単に述べるならば、ひとつには古典主義の影響力が非常に強く、オカルト的なロマン主義はあまり発達しなかった。そうして二つには人間というものを観念的に考えるのではなく、実社会での具体的な存在の仕方を研究していて、特に恋愛における心理の分析に秀でたと言えることができる。しかしそういう一般的な概括では収まらない作品も多々ある。ここに挙げた作品はすでにわが国の文学の一部となっているようなものばかりであり、そうした気持ちで読んで欲しい。

(石木隆治)

《第9》を奏でる

この授業は、ベートーヴェンの《交響曲第9番 二短調 op.125》第4楽章のオーケストラ部分を受講生の皆さんで編成したオーケストラで練習を重ね、最後に独唱および合唱部分と合同で演奏し発表するというものです。

講義ではなくオーケストラ演習という形式で授業を進めてゆくため、特に必読書というものはありませんが、《第9》を含めてベートーヴェンの交響曲について書かれているもの及びベートーヴェンの生涯に関するものを何冊か挙げておきます。

参考図書

[《第9》に関するもの]

『こだわり派のための名曲徹底分析 ベートーヴェンの 第9』 金子建志著
音楽之友社

[ベートーヴェンの交響曲全般に関するもの]

『朝比奈隆 交響楽の世界』 朝比奈隆著，金子建志編／解説 早稲田出版

『朝比奈隆 ベートーヴェンの交響曲を語る』 朝比奈隆著，東条硯夫編 音楽之友社

[ベートーヴェンの生涯に関するもの]

『ベートーヴェン』 平野昭著 新潮文庫（カラー版作曲家の生涯）

『ベートーヴェン音楽散歩』 稲生永写真・文 音楽之友社

『ベートーヴェンへの旅』 木之下晃，堀内修著 新潮社

（山本訓久）

総合学芸領域
教育系

人権教育

1776年バージニア権利章典において「すべての人は生来ひとしく自由かつ独立しており、一定の生来の権利を有する」と宣言された基本的人権の思想は、社会正義の第一の基本として位置づけられよう。にもかかわらず、我々の社会はその成長を急ぐあまりに、社会的な弱者をつくり出し、彼らの権利や人格を無意識に、あるいは意識的に傷つけてきた。しかし、人はそれが誰であっても、どのような立場にあっても、人として生まれたというそのことのみで、その人格が独立のものとして尊重されなければならないはずである。今、ようやくこの基本的な正義が様々な場面で検証されはじめている。

このような視点から人権の問題を個別的に紹介する文献としては川人博編著『テキストブック現代の人権』（日本評論社1993）がある。この本では、労働者の人権、外国人の人権、患者の人権、女性、子供の人権など8つの分野からいわゆる社会的弱者に焦点を当てながら、最近の資料を取り入れて、平易な文章で問題点を指摘している。もとよりこれらの分野においては、この本に取り上げられている以外に様々な問題点があり、その意味では各分野において包括的な、総合的な議論がなされているわけではないが、個別分野の個別問題についてわかりやすく、入門的な本であろう。また、各章毎に文献紹介がなされており、続く学習にも便利である。

人が自律的な人格者として尊重されるという意味では自己決定権について法がいかなる評価を下しているかも興味深い。特にアメリカではこの種の議論が盛んであり、我が国の人権を語る上でも参考となろう。この点で山田卓生著『私事と自己決定』（日本評論社1987）は格好の文献であろう。同書は第一部でライフスタイルとして長髪、髭、制服（わが国の校則問題ともつながろうか...）ホモセクシュアル、結婚と離婚などにおける自己決定の問題を取り上げ、第二部においては、危険行為として、ヘルメットやシートベルトの装着の自由、喫煙、登山の自由を取り上げる。また、第三部においては、生と死の自己決定の奥深い問題にもふれて

いる。アメリカの判決例が非常に流動的である点ではこの本はもはや時代遅れの感があるかもしれないが、問題点を提起するという意味では尚日本社会に対しては衝撃的ではないだろうか。この本の弱点を補うものとしては、早川武夫著『アメリカ法の最前線』（日本評論社 1989）、『続アメリカ法の最前線』（日本評論社 1993）がよいであろう。この本は必ずしも人権問題に焦点を当てているわけではないが、アメリカの法的関心の所在がわが国と異なっている点や新しい判決例の動きが新鮮である。ライフスタイルに関するものや裁判制度、生殖の自己決定、胎児の権利等様々な素材がコンパクトに、雑誌のコラムのごとくまとめられ、楽しい本といえる。

女性の人権をめぐるのはわが国だけでなく、外国においても様々な議論と政策が展開されている。わが国でも男女の実質的平等を念願に、民法の親族、相続の分野（家族編）が改正されようとしている。このような女性の人権保障について女権先進国フランスとの比較を紹介する林瑞枝編著『いま女の権利は』（学陽書房 1989）がこれからの社会を考える上で興味深い。女性の性の自由や経済的自立がいかにかの国において取り組まれているかが参考となろう。またわが国の問題としては角田有紀子『性の法律学』（有斐閣選書 1991）が女性や未成年者をめぐる日本の法曹界の評価を紹介し批判している。生殖の自由や売買春の問題だけでなく、未成年者の性的自由などをわかりやすく説きおこす。また巻末に参考文献が載せられているのも有用であろう。女性の生殖の自由については、わが国と外国との間に法制度や行政システムの相違が大きい。しかし直面している問題は同じである。その意味では、ドイツの事例を扱った E.ベック＝ゲルンスハイム著『出生率はなぜ下ったか』（勁草書房（1992））は有用だ。

最後に、わが国の裁判のあり方を厳しく問うものとして毎日新聞社会部『検証・最高裁判所 法服の向こうで』（毎日新聞社 1991）を挙げたい。最高裁が扱った判決の形成過程を事件背景とともにおう同本は人権の砦としてのあり方を糾弾する法律家によらぬものとして勧めたい。

（服部篤美）

障害児・者の教育

障害児・者の教育は、個々の子どもの生涯や発達の状態に最も適した教育内容や教育方法が要求されるという点で、教育の原点とさえ言われるものである。また、今日声高に叫ばれているノーマライゼーションを推進するためにも、より多くの人々が障害を有する人々を理解し、適切な接し方を身につけていくことが大切である。そのために必要な基本的な図書を紹介する。

1．障害児・者の理解

障害とは何か、障害児・者とはどのような人々をいうのか、ということに関する基本的理解を得るためには以下の図書が参考になる。

茂木俊彦編 『障害と私たちの社会』 大月書店

加藤直樹・茂木俊彦編 『障害児の心理学』 青木書店

高野 武・堅田明義編著 『障害児理解の方法』（中野善達監修 講座障害児教育
5） 福村出版

2．障害児・者教育の概要

障害児・者教育の歴史、制度、基本的理念などについて概観したもののうち、基本的な図書を挙げる。

茂木俊彦編 『障害児を支える人びと』 大月書店

五十嵐信敬 他編著 『教職教養 障害児教育』 コレール社

菅田洋一郎・清水 寛編著 『障害児教育の基本問題』（中野善達監修 講座障害児教育1） 福村出版

石部元雄編著 『現代心身障害学入門（改訂版）』 福村出版

3. 障害児・者の教育権

渡部昭男著 『障害児の就学・進学ガイドブック』(青木書店)は、親向けに書かれたものだが、障害児の権利を保障した法律なども豊富に紹介されている。

4. 障害児・者の教育方法

講義でとりあげる障害とその教育方法に関する参考図書を以下紹介する。

1) 聴覚障害

藤井克美編 『耳の不自由な子どもたち』 大月書店

小川 仁他編 『聴覚障害の診断と指導』(講座言語障害の診断と指導 第4巻) 学苑社

他に、甘利俊一監修、ニューロサイエンス&テクノロジーシリーズ、『音声・聴覚と神経回路網モデル』(オーム社)は、工学的立場から人間の音声・情報処理についての新旧の知見がわかりやすく紹介されている。

2) ダウン症候群

ダウン症に関する基礎知識を得るための図書としては、

池田由紀江編 『ダウン症の子どもたち』(大月書店)

池田由紀江編著 『ダウン症児の発達と教育』(明治図書)

池田由紀江・菅野敦編著 『ダウン症児のこぼれを育てる - 0歳から生活の中で』(福村出版)

菅野敦・池田由紀江編著 『ダウン症者の豊かな生活 - 成人期の理解と支援のために - 』(福村出版)

3) 自閉症

太田昌孝編 『自閉症の子どもたち』(大月書店)

野村東助・伊藤英夫・伊藤良子編 『自閉症児の言語指導』(講座言語障害児の診断と指導 第5巻)(学苑社)

野村東助 他編著『自閉症児の指導法』(講座自閉症児の診断と指導 第2巻)(学苑社)

4) 言語障害

子どもの言語・コミュニケーション障害全般の入門書としては、

西村辨作編 『ことばの障害入門』(入門コース・ことばの発達と障害 第2巻)(大修館書店)

笹沼澄子監修,大石敬子編 『子どものコミュニケーション障害』(入門講座・コミュニケーションの障害とその回復 第1巻)(大修館書店)

中川信子編 『ことばの不自由な子どもたち』 大月書店

成人については,

笹沼澄子監修,伊藤元信編 『成人のコミュニケーション障害』(入門講座・コミュニケーションの障害とその回復 第2巻)(大修館書店)

障害領域別については以下のような図書がある。

飯高京子・若葉陽子・長崎勤編 『構音障害の診断と指導』(講座言語障害児の診断と指導 第1巻)

同講座シリーズ第2巻 『ことばの発達の障害とその指導』

同講座シリーズ第3巻 『吃音の診断と指導』(いずれも学苑社)

大熊喜代松著 『どもりの子の母親教室』(日本放送出版協会)

5) 病弱・重度心身障害児教育

三宅編 『てんかんのある子どもたち』 大月書店

藤井建一・中村尚子編 『からだの不自由な子どもたち』 大月書店

御子柴昭治,渡辺美佐子編著 『ひろがれ病院内学級』 桐書房

『重症心身障害ハンドブック 改訂版』 社会保険出版社

小林芳文・上原則子編著 『講座 重度重複障害児(者)の感覚運動指導 (1)基礎・応用編』 コレール社

(大伴 潔)

幼児の遊びと生活

現代の子どもたちは物質的に豊かな社会状況の中で充実した毎日を送っているのだろうか。この豊かさの中で幼児期からの子どもの望ましい発達は保障されているのだろうか。この授業では、現代における子ども達の遊びと生活の姿を幼児期を中心に、その実態や問題点などを検討することを目的とする。

乳幼児期の生活実態調査から、現代における乳幼児の遊びの実態についてみた後、発達心理学における遊びの発達理論について概要する。そして、乳幼児期に豊かに展開される「ふり遊び」について心理学的考察を行う。

文 献

高橋たまき・中沢和子・森上史朗 共編 1996 『遊びの発達学 基礎編，
展開編』 培風館

『子どものふり遊びの世界 ～現実世界と想像世界の発達～』 1993
ブレーン出版

新・児童心理学講座 無藤隆編 1991 『子どもの遊びと生活』 金子書房

(岩立京子)

私の担当する部分では、子どもの遊びの中に、音や音楽を素材として楽しまれている伝承された表現があることを探っていきたくと思います。また、逆に遊びのなかに、それと意識されずに内在している音楽的な要素を取り出してみたいと思います。さらに幼稚園の教育の基本的な考え方との共通性を考え、実際の保育の中での幼児の姿を見て考察できるようにしたいと考えています。

文 献

『子どもと音楽』 全10巻 同朋舎

幼児に関する項目が多く含まれています。

『ピアノ遊び ねこふんじゃった』 音楽之友社 永田栄一・桶谷弘美

『幼児の音楽教育』 音楽教育研究協会編 企画・構成 井口太

(井口太)

「幼児の遊びと生活」の中でこの授業では、遊びの中でも「運動遊び」というテーマに絞って考えていきます。昨今、「Jリーグやイチローブームの中、幼児期の運動に関していろいろな取組が「おとな」たちの目で行われてきています。このことに関して、本来幼児期の運動とは何か、幼児の運動にとって何が重要なことなのかという点に関して運動心理学的な観点から議論していきたいと考えています。その中で幼稚園、保育園で見かける幼児の運動遊びのもつ意味に関して議論を深めたいと考えています。

幼児の運動遊びと心の関連に関してまとめられています。

『幼児の運動と心の育ち』 近藤充夫 世界文化社 1994年

『幼児のこころと運動』 近藤充夫 教育出版 1995年

『講座 幼児の生活と教育2 生活と文化』 岩波書店 1994年

(森司朗)

現代心理学の課題

心理学とは、人間の心の仕組みや特徴について、実験や観察、調査といった科学的な方法により検討する学問です。心理学は、非常に幅広い分野からなっていますが、ここでは主に授業でとりあげる知覚、記憶、言語、思考といった研究領域の入門書を紹介します。それぞれの領域について体系的な知識が得られるものよりも、むしろみなさんの知的好奇心を刺激するような本を選んだつもりです。これらを読んで、心理学という学問にもっと興味も持っていたいただければ幸いです。

《知覚》

『視覚の冒険 イリュージョンから認知科学へ』, 下條伸輔 (著), 産業図書

ランダムドットステレオグラム等 視知覚に関する様々な現象を紹介する中で、視知覚のメカニズムの精巧さ、不思議さについて説明した一冊です。

『アフォーダンス 新しい認知の理論』, 佐々木正人 (著), 岩波科学ライブラリー

上の本とはまた違った視点から知覚のメカニズムについて考えた本。「情報が環境から直接与えられる」というJ. J. ギブソンの思想を分かりやすく解説しています。

《記憶》

『記憶研究の最前線』, 太田信夫・多鹿秀継 (編著), 北大路書房

記憶に関する心理学の研究を各分野の専門家が解説した本です。専門書なので、少し難しいかもしれませんが、「記憶」というテーマについて、どのような研究が行われており、どのようなことが分かっているのかを勉強するのに最適な本です。

『抑圧された記憶の神話 偽りの性的虐待の記憶をめぐる』, E. F. ロフトス・K. ケッチャム (著), 仲真紀子 (訳), 誠信書房

目撃証言の研究で有名な第一著者が「偽りの記憶」というテーマから、記憶の不思議さ、それを過信することの恐ろしさについて記したノンフィクション。

『記憶力を強くする 最新脳科学が語る記憶のしくみと鍛え方』, 池谷裕二, 講談社ブルーバックス

人間の記憶を支える神経メカニズムについて説明した本。最先端で高度な話題を扱いながらも、非常に分かりやすく書かれた格好の入門書です。

《思考》

『考えることの科学 推論の認知心理学への招待』, 市川伸一(著), 中公新書

『人間この信じやすきもの 迷信・誤信はどうして生まれるか』, T. ギロピッチ(著), 守一雄・守秀子(訳), 新曜社

ともに日常的場面における思考のまちがいを通じて、人間の思考の仕組みと特徴について論じた本です。前者は認知心理学の立場から、後者はそれに社会心理学的な視点も加えて、豊富な事例とともに分かりやすい説明を行っています。

《言語》

『人間の言語情報処理 言語理解の認知科学』, 阿部純一・他(著), サイエンス社
言語に関する心理学的研究を体系的にまとめた数少ない本の1つ。内容は専門的で難しいのですが、この分野について勉強したい人は読んで損のない本でしょう。

『文章理解の心理学 認知, 発達, 教育の広がりの中で』, 大村彰道(監修), 北大路書房

文章理解に関する心理学の研究を、その基礎理論のみならず教育への応用まで含めて紹介した一冊。比較的平易な内容なので、教育に関心のある人にはぜひ読んでもらいたい。

『言語を生み出す本能(上・下)』, S. ピンカー(著), 椋田直子(訳), NHKブックス

現代の言語学会を代表する著者が、N. チョムスキーの普遍文法理論に基づき言語の生得性について論じたベストセラー。心理学とは少し離れてしまいましたが、知的好奇心を大いにくすぐる一冊です。

《その他，一般》

『おもしろ記憶のラボラトリー』，森敏昭（編著），北大路書房

『おもしろ言語のラボラトリー』，森敏昭（編著），北大路書房

『おもしろ思考のラボラトリー』，森敏昭（編著），北大路書房

上にあげた記憶，言語，思考といった研究テーマについてわが国における気鋭の研究者たちがやさしく，おもしろく解説した本です。

『心理学のなかの論争 認知心理学における論争』，丸野俊一（編著），ナカニシヤ出版

心理学では，その黎明期から現在にいたるまでたえず様々な論争が行われてきました。本書では，そうした論争の中で比較的最近のものについて紹介しています。多少内容が難しいかもしれませんが，現在心理学でどういったことが問題になっているのかを知るのに丁度いい本でしょう。

『脳から心へ 高次機能の解明に挑む』，宮下保司・下條伸輔（編），岩波書店

人間の心が脳を物質的基盤としている以上，脳科学と心理学は切っても切れない関係にあります。本書では，わが国を代表する脳研究者，心理学者が注意，記憶など共通のテーマで最新の研究成果を紹介しています。内容は専門的ですが 非常に興味深い論文がたくさん収められています。

（関口貴裕）

総合学芸領域
環境系

野外教育法

野外教育とは、野外での様々な活動を教育的観点でとらえ、野外での活動を人間の心身の健全な発展に資するための検討を行う学問分野と位置付けることができよう。野外教育は、生物学、地質学、地理学、農学、芸術、スポーツ科学、社会科教育学、理科教育学、など幅広い学問分野に支えられている。野外における様々な活動とは、キャンプ活動に代表されるスポーツ・体育分野、自然研究・自然体験学習、地域調査・研究、農林業教育、レクリエーション活動などをその守備範囲としている。最近では、環境教育との関連も強まってきている。

本講義では、主に野外教育の理念と方法について、とくに講義に合間に簡単な実習を通じて野外の諸活動の手法を学習する点に特徴がある。

講義の内容は以下のようになっている。

- 1 . 野外教育が目指すものとそのアウトライン
- 2 . 野外教育の現代的意義
- 3 . 野外教育の歴史
- 4 . 野外活動プログラムと野外活動の安全
- 5 . 野外自然観察の方法と実際Ⅰ
- 6 . 野外自然観察の方法と実際Ⅱ
- 7 . 地形や地史を活用した野外教育の方法
- 8 . 野外自然を活用した遊び
- 9 . 農業体験学習Ⅰ
- 10 . 農業体験学習Ⅱ
- 11 . 伝統的生活文化の学習の方法
- 12 . 学校教育における環境教育
- 13 . 社会教育における環境教育

以上の講義には室内の授業と野外実習も準備されている。野外実習については、天候や受講学生数の制限もあり、全ての分野の野外実習を行うことは困難な場合もあるが、可能なかぎり野外での体験学習を実施している。

参考図書

- 1) 『新しい野外教育』(J . W . スミス他著 , 不昧堂出版)

本書は原著 Outdoor Education の訳本である。野外教育の思想とその発展 , 学校における野外教育の実態と方法 , 野外教育のフィールド , 指導者養成について述べてある。キャンプ活動など野外活動を初めとして , 自然環境保全 , 学校農園 , など広い範囲にわたって概説してあり野外教育の概念を理解する上で役立ち , またアメリカの野外教育の発展経過を学習するにも貴重な書物である。

- 2) 『野外教育の理論と実際』(江橋慎四郎編著 , 杏林書院)

海外の野外教育の実態に触れながら , 野外教育の概念 , これからの野外教育の在り方などを概説してあり , 野外活動のプログラム事例 , 野外活動における自然環境保護なども記述されている。

- 3) 『自然観察ハンドブック』(日本自然保護協会編 , 思索社)

野外での自然観察の方法を体系的に述べてある。自然観察の意義 , 基本的技術と方法 , テーマごと (森 , 田畑 , 川 , 海 , 雨 , 冬 , 地形 , など) の課題の取り上げ方や展開の方法が述べられている。

- 4) 『ネイチャーゲーム』(ジョセフ・コーネル , 柏書房)

ジョセフ・コーネルの書物 “ Sharing Nature with Children ” をネイチャーゲームと訳して出版された本である。自然に体験的に接し , 自然に対する感受性を高め , 自然と共生する楽しみを引き出す教育方法が収録されている。

- 5) 『遊び図鑑』(奥成達著 , ながたはるみ絵 , 福音館書店)

野外教育において , 草花遊び , 伝承遊びなど野外での遊びは大切な分野である。本書は , 主にはそうした野外での遊びの具体的な方法を豊富に収録しており , 学校教育の現場に大変役立つ書物である。

- 6) 『草花あそび』(熊谷清司著 , 伊藤昭画 , 文化書房博文社)

四季に対応した草花遊びの方法をイラスト入りで解説している。

- 7) 『現代野外教育概論』(石田裕一郎, 斎藤保夫編, 関東出版社)
主に野外活動の概念や方法について述べられている。組織キャンプの運営, プログラム, 安全, 指導者の役割などキャンプ指導において不可欠な事柄が概説されている。
- 8) 『野外教育』(斎藤仲次著, 明治図書)
キャンプ活動の意義, 方法, 装備, 保健と安全, について概説されており, キャンプ活動にとって必要な内容が概説してある。
- 9) 『アウトドア・クラスルーム』(英国教育・科学省編, 公害対策技術同友会)
野外教育の視点で学校の校庭を活用する方法, また校庭の自然度を高める手法が収録されている。
- 10) 『インタープリテーション入門』(キャサリン・レニエ/マイケル・グロス/ロン・ジーマン, 小学館)
自然を解説する方法が収録されている。特に自然解説の基本的姿勢とプログラム開発の基本方針は学ぶ点が多い。
- 11) 『自然との共生をめざす環境学習』(北野日出男, 樋口利彦編, 玉川大学出版)
自然観察や自然調査の方法とその理念が記されている。

(樋口利彦)

健康と環境

WHOは1949年に「健康とは単に病気にかかりにくいというだけでなく、肉体的にも精神的にも社会的にも完全に良好な状態」と明示した。つまり健康に及ぼす環境因子として肉体、精神、社会の3つの面から考えなくてはならないということである。肉体的には食物や、加齢、運動、休息などの、精神的にはストレスや精神疾患などの、社会的には衛生行政や社会保障制度などの様々な因子が考えられる。しかもそれぞれが単独でなく複雑に絡み合っているのが現代人の健康を損なっていると考えられている。以下「健康と環境」の授業に参考となる本を紹介する。

I. 総論

環境に影響を与える因子として生活の中でどのようなものがあるかを上げたのが、『生活環境論』木村哲彦監修（医歯薬出版）である。

水俣病に長く関わってきた医師が食品公害を軸に大気汚染や放射線、電磁波などが体にどのような影響を及ぼすかについて書いた『環境と人体』原田正純著（世界書院）も生活の中にある健康に影響を与える因子を取り上げている。

医学の見知からは『公衆衛生学』真野喜洋編（文光堂）その他各社から出ている公衆衛生学の本が母子保健、成人保健、老年保健、精神保健、社会保障制度、衛生行政、環境保健など、肉体・精神・社会の面からの私たちを取り巻く環境が健康にどのように影響を与えているかについて述べている。

II. 各論

環境因子の中で健康に与える影響の大きな食物の体内での代謝を示し、その過不足でどのように健康が損なわれるかを記した栄養学の本として現代栄養科学シリーズ『栄養学総論』藤田美明・奥恒行編（朝倉書店）、『栄養学総論』杉本悦郎編著（光生館）、『最新栄養学 第8版』木村修一、小林修平翻訳・監修（健帛社）

その他各出版社から出ている栄養学総論があげられる。

また、人間の成長や加齢による健康上の問題点を上げ、各ライフステージでどのように対処したらよいか示したものに『標準栄養学各論』島園順雄・八杉悦子著（医歯薬出版）、『栄養学各論』岩崎良文・戸谷誠之編（南江堂）など各出版社から出ている栄養学各論の本がある。

現代栄養科学シリーズ『公衆栄養学』二見大介・梶本雅俊編（朝倉書店）は、国民栄養の現状や栄養上の諸問題、食糧問題を取り上げている。

『管理栄養士のための症例から学ぶ病態栄養学』渡辺明治編（メディカルレビュー社）、『患者指導のための病気と栄養』糸川嘉則編（南山堂）、は病気と食事の関係を示したものである。

病気になる前の予防的な意味合いを生活習慣と健康増進、ガンの予防、健康の指標などの観点から書いた『病気の予防と健康』志渡晃一・小橋元著（三共出版）がある。

同じく病気の予防の観点を分子的なレベルから記述したものに『分子予防医学』松島綱治編（医学書院）がある。

健康を維持するための休息や運動や生活習慣を生活環境に準拠して考えたのが『健康管理概論』郡司篤晃編（朝倉書店）、その他各社から出ている健康管理学概論の本である。

『病気の成立ちとからだⅠ、Ⅱ』第2版 中野昭一編（医歯薬出版）は一般的な病気とその成り立ちの機構を示している。

体に異物が侵入したときに起こる免疫反応に関してはPNEモノグラフ『免疫系の遺伝子戦略』山岸秀夫著（共立出版）、バイオテクノロジー教科書シリーズ『免疫学概論』野本亀久雄著（コロナ社）、新化学実験講座『分子免疫学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』（東京化学同人）に詳しいメカニズムが記してある。

現在の日本で死亡原因の一位を占めている悪性新生物（ガン）の成因はほとんどが環境因子が原因であることがわかっている。『がんの細胞生物学』阿部達生・三沢信一訳（医学書院）、『発ガン物質のはなし』酒井弥著（技報堂出版）はそれら環境物質の中の発がん物質とその発ガンメカニズムについて示している。

（南道子）

環境とデザイン

室内環境・住宅・道・まち・空間などの環境がどのようなデザイン視座で生まれてきたか、担当者のデザイン姿勢などを交えながら、事例を通じて読み解く講義。環境やデザインは、住宅、道、建物などのハード・デザインのみで成り立ってはいない、人が暮らし・システムなどソフト・デザインが共に成り立って、はじめて生き生きと輝きを増すものである。

講義は、身近な環境を読み解くことから始まり、様々な日常の環境にあるデザインの力・魅力を再認識し、さらには、国内外のデザインの先進事例を考察する。今回は、デザイン関連書のなかでもわかりやすさを主に選んだ。

ヴィクター・パパネック『生きのびるためのデザイン』晶文社

東孝光『日本人の建築空間』彰国社

吉田桂二『暮らしから描く健康な住まいの作り方』彰国社

オルギヴァンナ・Ｌ・ライト『ライトの生涯』彰国社

山本学治『素材と造形の歴史』鹿島出版会

吉村順三『小さな森の家』建築資料研究社

鈴木博之『都市へ』日本の近代10 中央公論新社

田村明『都市ヨコハマをつくる』中公新書678 中央公論新社

原武史『「民都」大阪 対「帝都」東京』講談社

海野弘『現代デザイン』新曜社

河邑厚徳・グループ現代『エンデの遺言』NHK出版

武者利光 著『ゆらぎの発想』NHK出版

秋岡芳夫『暮らしのためのデザイン』新潮文庫

秋岡芳夫『デザインとは何か』講談社現代新書346

長谷川堯『建築有情』中央公論社

(鉄矢悦朗)

環境教育

20世紀に人類は多くの環境問題を生じさせた。その反省に立って、21世紀の社会は「持続可能な発展」を目指さなければならないと人々は考えるようになっていく。環境教育は、社会の「持続可能な発展」に欠かせないものである。環境教育とはなにか？そのねらいはどのようなものか？環境教育にはどのような方法があるか？学校教育や社会教育で環境教育はどのように行われているか？本授業ではこのような問いに答えながら環境教育について授業を進めとともに、環境教育の実践に役立つ情報を提供する。

以下に、本講義を聴講する上で参考になる図書を概説する。

A．環境教育の基礎となるもの

『沈黙の春』レイチェル・カーソン著（新潮文庫）、『センス・オブ・ワンダー』レイチェル・カーソン著（新潮社）

環境教育の原点ともいえる本。

『苦海浄土』石牟礼道子著（講談社文庫）、『蝉和郎』石牟礼道子著（葦書房）

環境の問題の深みと、人間の生命の輝きへと目を開かせてくれる作品である。

『共生の生態学』栗原 康著（岩波新書）

閉鎖生態系についてやさしく解説した名著『有限の生態学』（岩波同時代ライブラリー）の著者がその後の研究成果も加味して書き上げた、ヒトと自然の共生の可能性を探る本。

『自然への共鳴（全3巻）』黒坂三和子編（思索社） 1巻「子供の想像力と創造性を育む」、2巻「日本の人と環境とのつながり」、3巻「地球規模の創造的なかわり」。

私たち一人一人が、自分、人間、自然とどのように関わっていけばよいかという問いに、学際的にアプローチしている。

『環境科学への扉』日本環境学会編（有斐閣）

環境に関する諸問題の入門書である。公害および地域環境に関する諸問題を把握するのに役立つ。

『地球の破産 人口・環境・資源をめぐる21世紀のシナリオ』小西誠一著（講談社ブルーバックス）

20世紀の地球でどのようなことが起こったのかを見つめ直し、21世紀の地球と人類の行く末を論じている。

『地球環境問題とは何か』米本昌平著（岩波新書）

主として地球温暖化に焦点を絞る、その原因と解決策をさぐる。政治や経済的な視点を盛り込んだ議論を展開。

『茶の間で語りあう地球環境問題』安齋育郎著（かもがわブックレット）

さまざまな地球環境問題を取り上げ、その現状と原因および解決策をやさしく解説。

B．環境教育全般について

『環境教育概論』北野日出男、木俣美樹男編（培風館）

本学の教官と元教官10名によって、一昨年まで共通科目として開設されていた「環境教育」と「野外教育法」のために書かれたもの。

『地球環境と教育：未来をひらく緑のヴィジョン』西村俊一、木俣美樹男編（創友社）

地球環境の危機を視野に入れて、日本エコロジズムの伝統と業績を再検証しながら環境教育課程を編成する理念と方法を提示。

『環境教育の理論と実践』福島要一編（あゆみ出版）

『環境教育の成立と発展』福島達夫著（国土社）

これらの書は、環境教育の発生と成立過程を詳細に記述している。環境教育史を学習する上で貴重な書籍。

『地球環境と教育』梶山正弘・田中俊雄編（ミネルヴァ書房）

人間の環境と教育の問題を教育学の立場から解明している。子どもの発達を基本に据えた環境教育論を展開。

『環境教育入門』S．グレイグほか著、阿部 治監修、(財)世界自然保護基金日本

委員会訳（明石書店）

21世紀のキーコンセプト「持続可能な発展」を実現するための環境教育のねらいと進め方をやさしく説いた本。

『環境生物科学 - 人の生活を中心とした - 』松原 聡（裳華房）

環境問題のいくつかを生物学的な立場から取り上げた，環境教育の教科書。

C . 学校における環境教育

『新学校教育全集5 環境教育』水越敏行，熱海則夫編（ぎょうせい）

『感性と認識を育てる環境教育』佐島群巳（教育出版）

『新しい環境教育を創造する：子どもがきずく環境へのかけ橋』水越敏行，木原俊行編（ミネルヴァ書房）

これらの書は，学校教育における環境教育の理論と方法，ならびに実践事例を詳細に記述している。

『環境教育指導資料 [小学校編]』文部省編（大蔵省印刷局）

『環境教育指導資料 [中学校・高等学校編]』文部省編（大蔵省印刷局）

『環境教育ガイドブック [小学校]』奥井智久・佐島群巳編（教育出版）

『環境教育ガイドブック [中学校]』奥井智久・佐島群巳編（教育出版）

『環境教育ハンドブック』全国小中学校環境教育研究会編（日本教育新聞社）

『小学校道徳で進める環境教育』『小学校特別活動で進める環境教育』『小学校家庭科で進める環境教育』『中学校道徳・特別活動で進める環境教育』『中学校理科で進める環境教育』『中学校技術家庭科で進める環境教育』（明治図書）

これらの書では，文部省学習指導要領に対応した形で環境教育の理念と方法を示し，各教科における実践事例をあげてい。

D . さまざまなレベルでの環境教育

『地球化時代の環境教育（全4巻）』沼田真監修（国土社）第1巻「環境問題と環境教育」，第2巻「学校の中での環境教育」，第3巻「生涯学習としての環境教育」，第4巻「世界の環境教育」。

『環境教育シリーズ（全5巻）』大来佐武郎・松前達郎監修（東海大学出版）第1

巻「子どもと環境教育」, 第2巻「学校と環境教育」, 第3巻「社会と環境教育」,
第4巻「地球と環境教育」, 第5巻「科学と環境教育」。

前書とともに, 環境教育の理念・方法および実践事例が多数の執筆者によって
紹介されている。

『生涯学習としての環境教育実践ハンドブック』環境教育推進研究会編(第一法規)

『日本型環境教育の「提案」』清里環境教育フォーラム編(小学館)

社会教育における環境教育の方法と実践事例。

E. 環境教育の辞典

『環境教育指導事典』佐島群已ほか編(国土社)

『環境教育辞典』東京学芸大学野外教育実習施設編(東京堂出版)

『環境教育事典』環境教育事典編集委員会編(労働旬報社)

『国際理解教育事典』石坂和夫ほか編(倉友社)

(片山舒康・原子栄一郎・樋口利彦)

人類史と環境

人類は自然の影響を受けながら、逆に自然に働きかけ、自然を改変してきた。その過程は人類史そのものであり、人類の歴史は自然の改変の歴史ともいえる。というならば、現在進んでいる自然や地球の改変・破壊も人類の歴史であり、歴史の必然とも考えることができる。しかし、問題は改変や破壊の速度が著しく早いことと、本当の意味で人類はそのことに気が付いているかどうかである。知らないうちに事は進み、気が付いたときは手遅れでは遅いのである。これからの地球人は一人一人が自分の生き方を考え、地球や都市や住み方のあるべき姿を考える必要がある。そのための参考図書として、以下に手に入りやすいものを中心に紹介する。

『開拓の歴史』 宮本常一 未来社

『山に生きる人びと』 宮本常一 未来社

『塩の道』 宮本常一 講談社学術文庫

上の3冊は民俗学の本だが、日本人がいかに自然と関わりあいながら生活してきたかを知る上で参考になる。

『日本環境報告』 本多勝一 朝日文庫

『地球環境問題とは何か』 米本昌平 岩波新書

前書はわが国の自然破壊の知られざる側面を紹介、後書は冷戦後というよりも冷戦を突き崩したともいえる地球環境問題とはどういう種類の問題かを現代自然科学と政治との連関で解き明かしている。

『水道の文化』 鯖田豊之 新潮選書

『川は生きている』 富山和子 講談社（青い鳥文庫）

人間の生活と水・緑・土との関わりを描いた名著。小学生向きにかけられているが、大学生にこそ読んでもらいたいと思う。同じ著者の本に

『水と緑と土』 中公新書

『水の文化史』 文芸春秋

の2冊がある。これも勧めたい。

『森林の思考・砂漠の思考』 鈴木秀夫 日本放送出版協会

『風土の構造』 鈴木秀夫 大明堂

氷河時代以来の気候の変化に重点をおきながらも、それと宗教の発生、思考法の変化、歴史などとの関連を論じた、異色の書。読んでおもしろい。

『再考 日本の森林文化』 市川健夫・斉藤 功 日本放送出版協会

本書は森林に日本人の文化のルーツを探ったユニークな著作である。第二次大戦後の高度成長により、日本人が古くから培ってきた、風土に根ざした生活文化は、次々に失なわれてきた。本書を読んで文化というものをもう一度考えてみてほしい。なお、本書の次にはやや程度が高いが、

『ブナ帯文化』 梅原 猛ほか 思索社

をお勧めしたい。

『熱くなる大都市』 尾島敏雄 NHK ブックス

『熱汚染』 西沢利栄 三省堂選書

人間活動が与える影響について、前者工学、後者は理学の立場から追及したもので、両書を読み比べるとその違いが良く理解できる。地球の温暖化の先行現象として都市の温暖化を考える好書。

『成層圏オゾン 第2版』 島崎達夫 東大出版会

いわゆるオゾン層破壊などを考えるのに必要な、成層圏オゾンに関する近年の地球科学・化学的成果をまとめた好著である。

『環境創造の思想』 武内和彦 東大出版会

『都市の風水土』 福岡義隆他 朝倉書店

『くらしの科学としての人間環境学』 鈴木路子編著 福村出版

これからの住み方や暮らし方を考え、新たな環境や都市環境の創造を考えたもので、武内は緑地学、福岡は環境地理学、鈴木は保健学の立場から取り組んだものである。

『経済人類学への招待』 山内あきら ちくま新書

未開人の生活がきわめて合理的なものであることを述べ、現代文明に対する反省を迫る。

『朝日百科 世界の地理』 朝日新聞社

きれいなカラー写真を中心にして世界各地の姿が紹介されており、みているだけでも楽しい。世界各地の自然や人間の生活については知っているようでいて、案外知らないものである。アフリカや南米、東南アジア、ソ連、東欧などについてはとくにこれがひどい。本書で偏見を改めてほしいものである。

『民族と風土の経済学』 竹内 宏 角川文庫

誰しも自分自身をものを考える尺度にしてしまう。日本人が他の国のことをみるときはいつも日本が基準になってしまうが、こうしたいかにも国らしいまとまりをもった国は、実は世界中見回してもほとんどないのだ。本書は発展途上国や中進国の実際の姿を、銀行マンの眼から浮き彫りにしている。経済学というタイトルがついているが、まぎれもなく地理の本である。

『文明の生態史観』 梅棹忠夫 中公文庫

比較文化、地域文化、国際関係についてのグローバルな視点とそのおもしろさを追及した名著。国際化の時代、ぜひ読んでおきたい。

『なぜ世界の半分が飢えるのか』 スーザン・ジョージ 朝日選書

食糧は本当に足りないのか。飢饉の原因は本当に異常気象なのか。著者はこうした疑問をいただき、食糧危機の構造に迫る。全員に一度は読んでもらいたい本である。

『アマゾン：生態と開発』 西沢利栄・小池洋一 岩波新書

『日本の景観』 樋口忠彦 春秋社

地理学には、目に見える現象を野外で観察するおもしろさがある。本書は、日本の景観を具体的にとり上げ、これを外国のものと比較しながら、日本文化を論じたものである。なにげなく見すごしている馴染みの風景にメスを入れるという、フィールドワークに欠かせない眼を肥やすのによい本である。

『空からのフォークロア』 香月洋一郎 筑摩書房

多彩な写真を駆使しながら、風景の中に潜む人々の生活を描いている。同じく野外観察のおもしろさがわかる本。

『講座 文明と環境』 梅原 猛他編 朝倉書店

全15巻からなり、古今東西の様々な人間活動と環境のかかわりが、多角的にか

つ詳細に論じられている。

(小泉武栄・高橋日出男)

学校園の活用と計画

環境教育は、個人が関心・知識をもつことから、価値観を形成し、明確な態度をもち、環境保全の技能を習得して、地域社会において直接保全活動に参加することまでを目標とする。さらに、これらの活動を通して新しいライフスタイル(暮らしぶり)を創造していくことが期待される。

学大では10年以上前からビオトープづくりを行ってきた。環境教育実践施設の教材植物園や講義棟周辺に設置していた自然観察路はその実践の場であった。カリキュラム上では以前は技術科「栽培」のなかで、その後、現在までは総合科目や専門共通科目「野外教育法」、「環境教育」のなかで学校園とビオトープ造りを取り上げてきた。2000年からは環境教育専攻の専門科目「ビオトープと生物資源保全実習」も開設する。

ビオトープの理論的な柱は、生物多様性保全にかかわる生物学とこれを裏付ける社会的背景(条約や法規制など)である。つぎに、実践的な柱は身近な生物多様性保全の活動として、学校園をビオトープ化することにある。

この学習実践は、直接体験学習、総合学習として行われる。例えば、地域自然の生態系のあり方を学習し、これに基づいてビオトープの構成要素(池、雑草園など)を設計する。この過程で実際に生物多様性を高めるための技能を習得しつつ、その成果として環境保全の場を造成する。環境を自然との関わりで作ること、それを管理していくことの学習活動がそのまま生物多様性・環境保全に役立つという成果が参加者に見える点、すなわち始まりから結果までを一連のものとして完結できる学習手法として有効である。

ビオトープは自然を修復・保全する方法として有用である。身近で、誰にもできる生物多様性保全の活動になる。理科、社会、家庭科などの教科や環境学習の教材およびフィールドになる。学校園をビオトープ化することによって多くの動植物を学校に呼ぶことができる。ビオトープが「飛び石」状につながれば、多くの動植物は移動ができ、結果として地域環境に生物多様性を拡大できる。

さらにエコミュージアムの考え方・手法と連結することにより、一層、地域社会と自然的環境を調和的な様態にすることができる。学校園を通して学校と地域社会が協力しあって、環境保全ができる。

関連した参考図書を次に紹介する。

1) 『日本を救う「最後の選択」: 豊かな「自然」を取り戻すための新提言』

日本生態系保護協会編 1992 情報センター出版局

日本の自然観, 自然保護の問題点, 自然保護教育の未熟さなどを論じ, 自然とは何かについて解説後, 自然破壊の現状を述べ, 自然生態系の再評価からドイツの事例を参考に自然保護のあり方を提示している。さらに, NGOの可能性やボランティアのあり方について提案している。

2) 『生物多様性の危機: 精神のモノカルチャー』 ヴァンダナ・シヴァ 1993

(高橋由紀・戸田清訳 1997) 三一書房

インドにおいて緑の革命が何をもたらしたか, さらにバイオテクノロジーがこれから何をもたらそうとしているのかを, 第三世界の視点から論じている。副題にあるようにこれは自然科学の範疇の議論にとどまらず, 科学技術がもたらす生産・生活様式の画一化, さらに精神的な単一性について論理的に検証している。インド滞在中に見つけて, 出版社にぜひ翻訳したい旨問い合わせたが, 既に日本語で出版直前であった。大学院修士課程の1997年後期のテキストに使用した。

3) 『保全生物学のすすめ: 生物多様性保全のためのニューサイエンス』

リチャードBブリマック・小堀洋美 1997 文一総合出版

専門的な文献となるが, 生物多様性について, それを保全する生物学について解説している。さらに生物多様性の危機の具体的な要因について述べ, 固体群, 種レベル, 生物群集レベルでの保全のあり方, さらにこれらを社会的に保障していくための国内・国際的な方策について提案している。興味深い事例が多く掲げられている。

4) 『生物多様性条約資料集』 (財)日本自然保護協会編 1993

同協会創立40周年記念国際セミナー「生物多様性を守る」における講演の収録と生物多様性に関する条約, アジェンダ21の関連部分の抄訳, NGO条約の抄訳な

どが掲載されている。

5)『ピオトープネットワーク：都市・農村・自然の新秩序』 日本生態系保護協会 1994 ぎょうせい

日本の生物多様性の危機についてその原因，メカニズム，経済的な問題を論じた後，新しい土地利用からピオトープをネットワーク化する事を提案している。野生生物を身近に呼び戻すために都市・農村・自然についての国土計画を提言し，ピオトープ造成の具体的事例を示している。

6)『ピオトープネットワークII：環境の世紀を担う農業への挑戦』 財団法人日本生態系協会 1995 ぎょうせい

前図書の続編で，農業を取り巻く環境の危機とその価値について解説し，ピオトープ化促進の事例が進んでいるドイツの農村整備や生物相保全システムについて紹介している。

7)『エコロジカル・ネットワーク：環境軸は国境を越えて』 財団法人日本生態系協会 1995

ヨーロッパの生態系・生育地の特徴，自然環境保全の方法，政策，法律などについてまとめた上で，日本向けに自然環境政策についての資料も添付されており，国境を越えた野生動物の保全ネットワークを考える上で良い参考文献となる。

8)『ECOMUSEUM』 丹青総合研究所 1993

エコミュージアムの歴史，構造を紹介し，発祥地フランスの事例を掲げ，日本の動向について論じている。

9)『実践 エコミュージアム入門：21世紀のまちおこし』 新井重三編 1995 牧野出版

エコミュージアムの意義，基本構造，管理運営について紹介し，フランスの事例を呈示している。日本におけるエコミュージアムの展望について座談会の記録を収録している。

10)『とべ！緑の教室：武蔵野市セカンドスクールの挑戦』 小原康子 2001 小学館

自然と文化を学ぶセカンドスクールが始まった経緯，考え方，内容，協力者，実践の成果などが，よくまとめている。

11)『つくって，そだてる！学校ビオトープ』 佐島群巳監修 2001 ポプラ社
ビオトープの概念から教育実践まで，具体的に示している。

(木俣美樹男)

総合学芸領域
情報系

情報・文献へのアクセス

大学における勉強は、講義で教官から与えられる知識を単に記憶するだけの受動的なものではない。講義で得た知識をヒントに自ら興味のあるテーマを見つけだし、そのテーマを追求するための参考になる文献や情報などの記録資料を探し出して、それを参考にしながら、自分の知見を加えて一つの研究成果にまとめあげ、その成果をレポートや論文などの一定の形式に従った記録資料として発表する必要がある(もちろん、社会に出てからも同じような機会が多いと考えられる)。本授業では、基礎から始めて、大学図書館をどのように活用し、文献・情報を自ら探すかという、このような知識を身につけてもらう。

まず、文献を探すことから始めよう。

(1) 文献調査

1. 『情報源としてのレファレンス・ブックス 6訂版』 長沢雅男
日本図書館協会 2001 275p
2. 『日本の参考図書 解説総覧』 日本図書館協会 1980
3. 『情報と文献の探索 - 参考図書の解題 第3版』 長沢雅男 丸善 1994
各々、資料、情報の探し方と具体的な参考図書の説明。
4. 『新・知の技法』 小林康夫、船曳建夫編 東京大学出版会 1998
5. 『文科系学生のための文献調査ガイド』 池田祥子 青弓社 1995
6. 『文科系のための情報検索入門』 安永尚志 平凡社 1996

国文学研究の立場から、研究に必要な文献や情報をどのように入手するかをわかりやすく説明。

次に、これをどのようにまとめるかだが、以下のうちどれかを読むこと。

(2) 情報処理

1. 『知的生産の技術』 梅棹忠夫 岩波書店 1969 218p (岩波新書)

知識の獲得・整理・まとめの方法について論述。(出来れば,全員これを読んでほしい)

2. 『知的生活の方法 正・続』 渡辺昇一 講談社 1976 - 1979
(講談社現代新書)
3. 『知的創造のヒント』 外山滋比古 講談社 1977 196p.(講談社現代新書)
4. 『知的検索の技術』 山崎昶 講談社 1982 205p.(講談社ブルーバックス)
パソコン・ワープロなどのニューメディアを駆使した情報検索の方法を
実例を挙げて説明。
5. 『ニューメディア時代の知的生産の技術』 脇英世 講談社 1984 302p.
6. 『「超」整理法』 野口悠紀雄 中央公論社 1993 232p (中公新書)
7. 『知的生産のためのパソコン技法』 加山裕高 [ほか] 著 技術評論社
1995 334p
データ処理と論文・レポート作成法を,パソコンを駆使して行う方法を
述べる。

(3) 論文レポートの書き方

1. 『論文の書き方』 清水幾多郎 岩波新書 1959 214p.
2. 『論文・レポートの書き方』 八杉竜一 明治書院 1971 200p.
3. 『原稿の書き方』 尾川正二 講談社現代新書 1976 218p.
4. 『学術論文の技法 第2版』 斎藤孝 日本エディタースクール出版部
1998 250p.
5. 『論文の書き方』 沢田昭夫 講談社学術文庫 1977 259p.
6. 『レポート・小論文・卒論の書き方』 保坂弘司 講談社学術文庫 1978
247p.
7. 『研究レポートのすすめ:卒論・ゼミ論のまとめ方』 杉原史朗・井上忠司・
榎本隆司 有斐閣新書 1979 210p.
8. 『論文執筆ルールブック』 中村健一 日本エディタースクール出版部
1988 258p.
9. 『文献を探すための本』 斉藤孝・佐野真・甲斐静子
日本エディタースクール出版部 1989 201p.

10. 『大学生と図書館 第3版』 日本図書館研究会 1997 209p.
11. 『大学生と「情報の活用」 情報検索入門 増補版』 長尾真監修 京都大学
図書館情報学研究会, 日本図書館協会 (発売) 2001 197p.
12. 『レポート・論文のまとめ方』 紀伊国屋書店 製作・発売 (ビデオ)
レポート・論文のまとめ方を, 劇仕立てで紹介。授業中にみましょう。
(高鷲 忠美)

人間の情報処理

人間はいかなる情報処理をしているのであろうか。人間は注意、記憶、推論、問題解決など多彩な情報処理を行っている。人間の情報処理は、自然認識、言語認識、社会認識の基礎であり、学問全体が、その結果の塊、あるいは集積のようなものである。人間の情報処理についての学習は、自らを知るためにも、また将来教師になる準備としても大切なことであろう。近年、脳科学や認知科学が急速に発展し、情報処理パラダイムが生まれ、研究は新しい展開を見せている。教育や学習について、脳についてのこうした新しい知見から総合的に考えてみたい。人間の情報処理については、現象（1/f 嗜好、ジップ則、ウォルフ仮説など）、人間の脳とコンピュータの差異、人間の情報処理の仕組み（ニューロンとその機能）、記憶とその機構、知能、学習と情報処理、知識の構造、カオスの脳観など、いろいろな角度から考察してみる必要がある。筆者による講義「人間の情報処理」では、教育や学習の基礎として、人間の脳およびその情報処理について、こうした新しい知見に基づき、認知科学を中心に、解剖学、コンピュータ科学など多方面から総合的に捉え包括的に概説する。

まず、入門書をあげる。脳の認知的機能の解説にとどまらず、脳の解剖学的な面についても解説している優れた入門書として次の3点を挙げておく。

『驚異の小宇宙・人体Ⅱ 脳と心 1～6，別巻』，NHK取材班，日本放送出版協会，1994。本書は，NHKの科学番組でテレビ放映された内容の書籍版である。カラーの図版が豊富でわかりやすい。1～6巻は各々，脳の進化，知覚，記憶，感情，発達と再生，無意識と創造性について触れ，別巻は，脳と心のビジュアル・データブックになっている。

『脳の探検 上 神経系の基本地図をたどる』，フロイド・E・ブルーム他著／久保田競監訳，講談社 BLUE BACKS 699，1992年。『脳の探検 下 脳から精神と行動を見る』，同上，BLUE BACKS 700，1992年。この上下の2冊は，脳の解剖学的な構造についてのカラーの手書き図版が豊富である。また神経生理学的内容に

についても概説されている。

次に、多少専門的な図書をあげる。神経細胞やそれらによる情報伝達の仕組みについては、次の生物学の教科書も参考になる。

『ウォーレス 現代生物学 下』,Wallace・King・Sanders 著,石川統ほか訳,東京化学同人,1992の第32章「神経とその機能」および第33章「中枢神経系」。脳についての解剖学的に詳細な写真や図は,医学書『画像診断のための脳解剖と機能系』,H・J クレッチマン,W ワインリッヒ著,久留裕・真柳佳昭訳,医学書院,1995を薦めたい。

脳の認知的側面を解説している図書としては、次の3点をあげておきたい。

『情報処理の心理学 認知心理学入門』,多鹿秀継・川口潤・池上知子・山祐嗣,サイエンス社,1993。この本は、記憶・思考・知能・社会的認知・意識と無意識の情報処理について簡潔過ぎ、また多少難解な面もあるが要領よくまとめられている。

『グラフィック 認知心理学』,森敏昭・井上毅・松井孝雄共著,サイエンス社,1995。『認知と思考』多鹿秀継編,サイエンス社。これら3書を組んで読むと、認知科学的な側面が分かりやすい。またこの3書共に、参考文献として原論文のリストがついているので、多少専門的に深めたいときの論文探しに都合がよい。筆者の講義の大半をしめる認知科学的部分については、特にこれら3書をテキストとして推奨したい。

講義内容の補助的な図書を数点あげる。『ニューラルコンピュータ 脳と神経に学ぶ』,合原一幸,東京電機大学出版局,1989。この図書では、コンピュータと脳の差異について簡単に触れられている。コンピュータはいかに情報を記憶するのか、その原理は、『やさしいコンピュータ科学』,Alan W. Biermann 著,和田英一監訳,アスキー出版社,第6章電気回路を参照するとよい。人間の思考は必ずしも命題論理に従わないが、思考についての新しいモデルについては、『言語・推論・意識の認知科学 メンタルモデル』,P・N・ジョンソン＝レアード著,海保博之監修,AIUEO訳,産業図書,1990が参考になる。時間に余裕があれば、『認知心理学と人間の情報処理 I,II,III』,R・ラックマン,J・L・ラックマン,E・C・バターフィールド著,箱田裕司,鈴木光太郎監訳,サイエンス社,1990を読むのもよい。Iの内容は情報処理パラダイム,IIの内容は意識と記憶,IIIの内容は言語

と理解である。講義内容を深めるのに適している。関連用語の意味の確認には、本講義の心理学的側面についてのみの部分については、『新版 心理学事典』、平凡社、1992の利用を薦めたい。

専門的あるいは特殊な内容の本は数多くあるが、次の4点をあげておく。

『脳の科学 Ⅰ,Ⅱ』、中村嘉男・酒田英夫編、朝倉書店、1990。

『神経回路網の数理 - 脳の情報処理様式 - 』、甘利俊一、産業図書、1991。

『脳 - 可塑性研究の進歩』、久保田競・水野昇・山本長三郎編、朝倉書店、1990。

『カオスの脳観』、津田一郎、サイエンス社、1991。これらの内前3点は、脳の解剖学・神経生理学的な専門書である。4点目は、脳の性質の一つとしてのカオスについて述べている。これらの図書の内容は高度である。

以上の本とは少し赴きを変えて、人間の情報処理について、少し異なる切り口からせまることもできる。『国家 上・下』、プラトン、岩波書店 岩波文庫、1993。内容もさることながら、ソクラテスの強固な論理性に着目してもらいたい。『ピアジェ 知能の心理学』、滝沢武久・山内光哉・落合正行・芳賀純、有斐閣新書 D46、1986。ピアジェはもう古典的であるとも言われるが、子供の知能の働きの基礎にある論理的思考の構造やその発達に関しては、汲めどもつきぬ内容を誇っている。

(下條隆嗣)

コンピュータ・ネットワーク

この分野の変化は激しい。さらにカタカナ用語や略号が多く、初心者にとってこれがハードルとなっている。学習方法としては、きちんとした入門書によって基礎知識を習得すると同時に、新しい情報や用語の解説を随時検索し理解するなど、Web ページ（ホームページ）の検索を有効活用したい。諸君は、学内ネットワーク経由で自由にインターネットにアクセスできる環境がキャンパス内にあり、嬉しいことに2003年度からシステムも一新される予定である。インターネット上には一生かかっても見切れない情報が提供されている。自分にとって価値のある情報をいかに効率よく検索（取得）するかのノウハウを早く身につけることが必要である。情報の取得、加工、伝達的能力は、情報化社会において必須である。

コンピュータネットワーク関連の書物は、書店にいわゆる「マニュアル本」や通俗的な書籍が山積みされていて、これらは生鮮食品と同じく賞味期限3ヶ月から半年の書籍である。次に紹介する書籍は、理系文系を問わず、コンピュータネットワークおよび関連分野の本質を理解するのに最適である。

1. 『インターネット』, 村井純著, 岩波新書

村井先生は日本のインターネット第一人者であり、日本のインターネットの幕を開けた方である。新書版の類書が多く出版されているが、本書はインターネットの歴史、思想、背景を分かりやすく解説している。必読書である。

2. 『誰も教えてくれなかったインターネットのしくみ』 熊谷誠治, 日経BP

3冊のシリーズ本である。入門書でも、内容は理系の素養を前提とした解説本が多いが、本書は文系向けに概念を理解できるように解説している。

3. 『ポイント図解式標準 LAN 教科書』, マルチメディア通信研究会編, アスキー 図や絵を多用してわかりやすく解説している。

4. 『インターネット白書 2002』, インターネット協会監修, インプレス

毎年刊行される。「インターネットの出来事, 1年の動き」, 「インターネット利用者動向」, 「ビジネス」, 「社会」, 「教育」, 「世界」, 「インフラ」, 「最新技術動向」などの分類で豊富な資料をもとに解説している。

5. 『eラーニング白書』2002/2003年版, 先進学習基盤協議会 ALIC 編著, オーム社

インターネットの普及によって学習環境も大きく変化した。今では, 学習意欲があれば, MITや国内の大学の講義もインターネットを利用した受講が可能であり, 単位も取得できる。本書はeラーニングの現状を網羅した書籍であり, 教育現場ごとに(初等中等教育・高等教育・各種学校・企業内教育・生涯学習)解説している。さらにWBTの動向や標準化, マーケティングも解説している。

(萩原洋一)

コンピュータ・ミュージック

『コンピュータ & MIDI』 古山俊一，枇薫，林知行著 音楽之友出版社

最近は急速に普及して来ているので，知っている方も多いと思いますが，MIDIとは（Musical Instrument Digital Interface）の略語で，コンピュータや各種の電子楽器，電子機器を相互に制御するためのデジタル音楽制御信号の規格のことです。

この本はそのMIDIについてやさしく解説することを目的に書かれており，I. 入門編（古山俊一著），II. テクニカルブック（枇薫著），III. サウンドブック（林知行著）の3冊からなっています。

入門編ではMIDIの基礎概念と，一般的なMIDI関連のハードとコンピュータおよびアプリケーション・ソフトの紹介，テクニカルブックでは，MIDI規格について，より理論的に掘り下げた解説が，サウンドブックではMIDI音源などのハードについて，より掘り下げた解説されています。これらの本は出版されてから9年の年月を経ているので，紹介されているハードはすでに古くなったものが多いのですが，MIDI制御の基本的仕組みという面では，現在のものとほとんど変わっていないので，新しいハードに置き換えて理解することが可能です。

この本は決して学術的な本ではありませんが，親しみやすく書かれており，入門者がMIDI環境における音楽製作のための基礎理論と実践知識を独学で学ぶためには便利な本です。

『音楽の科学 クラシックからコンピュータ音楽まで』 ジョン・R. ピアーズ著
村上陽一郎訳 日経サイエンス社

『MIDIバイブルI 基礎編』

『MIDIバイブルII 実用編』

リットーミュージック出版編集部編 リットーミュージック

MIDIバイブルI，IIは現在出版されているMIDI関連図書のうち，現行のMIDI1.0

規格について最も詳しく解説された本である。ソフトウェア開発を目的とする者にとっても十分な内容が盛り込まれている一方、初心者でも理解できるように丁寧な説明がなされている。

Iの基礎編では、最近MIDI規格に付加された音色バンク・セレクトを含め、すべてのMIDIメッセージが網羅され、詳しい説明がなされており、IIの実用編では、パソコンによるDTMの普及で一般的になったSMF(スタンダードMIDIファイル)、GM規格についても詳しく説明されるとともに、サンプル・ダンプ、ファイル・ダンプ、MIDIタイムコード、チューニング、マシン・コントロールなど、機材間でのデータの受け渡し、制御などに必要な実用知識のほとんどについて触れられている。MIDI環境に基づく本格的な音楽制作技術のマスターを志す者のみならず、MIDI規格の仕組みについて理論的興味を抱く者にも是非薦めたい本である。

『MIDI 1.0 規格書』(社)音楽電子事業協会(AMEI)著 リットーミュージック

この本は電子楽器製造に関わる有力メーカーの殆どが属している音楽電子事業協会がまとめたMIDI規格書1.0の日本語版である。主な内容は、1:MIDIとミュージック・シンセシス入門、2:MIDI1.0規格、3:MIDIタイムコード、4:スタンダードMIDIファイル、5:GMシステム・レベル1、6:MIDIショー・コントロール、7:MIDIマシン・コントロール、となっており、MIDI1.0規格の本規格に加え、GM、SMF(スタンダードMIDIファイル)など'98年までに組み入れられたRP(Recommended Practices:MIDI応用例)の規格内容をも併せて詳細に掲載されている。決して初心者向けの本ではないし、内容的に『MIDIパイプラインI,II』と重複しているが、MIDIをより深く知ろうとする者、MIDIを応用的に使いこなそうとする者は、辞書を引くように、この本を利用して欲しい。願わくば、現行の規格を深く知った上で、新しい機能の拡張、現行の規格の変更などの提案をして欲しいと考える。

『ケーキウォーク The best reference books "Cakewalk"』 篠田元一著 リットーミュージック

リットーミュージックから出版されている音楽用アプリケーション・ソフト解

説書シリーズのうちの一冊で、東京学芸大学の『コンピュータ・ミュージック』の授業で使われている「ケークウォークホームスタジオ」専用のマニュアルである。ケークウォークホームスタジオ用の解説書としては他に竜吟社から出版されているものがあるが、現在は品切れで手に入りにくくなっているため、日本語で書かれた同ソフトの解説書としては、この一冊が現在手に入る唯一のものと考えてよからう。

内容は、1.環境設定、2.レコーディング、3.MIDIのエディット、4.オーディオのエディット、5.応用テクニックの5章からなり、導入時の詳細の設定から、通常のMIDIデータのレコーディングと編集、デジタル・オーディオデータの取り込みと編集などが多くの図版入りで懇切丁寧に説明されている。初心者向けの解説書ではあるが、ケークウォークホームスタジオ上で使用可能な機能については、くまなく解説されており、ケークウォークを使い、効率的にコンピュータ・ミュージックの基礎を学ぶためには、非常に便利な一冊といえる。

なお、MIDI、コンピュータ・ミュージックについて、さらに深く学ぼうとする者は、他の推薦図書を併読して欲しい。

(中島洋一)

コンピュータ・プログラミング

コンピュータプログラミングとはどのようなものなのかを理解するには、プログラミング言語を使ってみることが一番の近道です。授業でも JavaScript というプログラミング言語をとりあげて、実際にプログラミングをすることを通して、プログラミングと何かを感じてもらうことを目指しています。市販されている書籍でもこの傾向は顕著で、ある言語に依存してプログラミングを解説した本が多くなっています。

そこで、ここでは授業で取り扱った JavaScript の書籍と、もっとも代表的なプログラミング言語である C 言語の書籍を紹介します。

JavaScript の入門書

『JavaScript ハンドブック 基礎編』 宮坂雅輝/著, ソフトバンクパブリッシング, ISBN 4-7973-1223-8, 1,200 円

『JavaScript ハンドブック 応用編』 宮坂雅輝/著, ソフトバンクパブリッシング, ISBN 4-7973-1224-6, 1,600 円

JavaScript の書籍にはリファレンスマニュアル的なものが多いですが、このシリーズでは豊富な例と共に文法の説明もあり、はじめて JavaScript を使ってみるときの参考書としてお勧めできます。

JavaScript の文法解説書

『JavaScript』 David Flanagan/著 村上列/監訳 安藤進/訳, オライリー・ジャパン, ISBN 4-87311-027-0, 4,200 円

JavaScript は web ページをかざるだけの簡易的なプログラミング言語と捕らえられがちですが、実は高度な文法要素を持った言語です。その文法をきちんと解説している書籍です。

JavaScript の応用解説書

『XML&JavaScriptシステム開発 Webアプリケーションによる実用的データ処理と応用』 高羽実 / 著, 秀和システム, ISBN 4-7980-0131-7, 3,200 円

最近話題になることが多い XML を JavaScript と組み合わせて利用する方法を解説している書籍です。XML で記述されたデータを web ページで表示する方法が書いてあります。

C 言語の入門書

『はじめてのC』 椋田寛 / 著, 技術評論社, ISBN 4-7741-1264-X, 1,980 円

C 言語入門書のベストセラーです。プログラミングとは何なのかを理解するのにもよい参考書です。

『プログラミング言語C』 B.W.カーニハン / 著 D.M.リッチー / 著 石田晴久 / 訳, 共立出版, ISBN 4-320-02692-6, 2,800 円

C プログラミングのバイブル的な書籍です。多少難しい記述もありますが、C プログラミング入門時には必読の書籍です。

雑誌

『C Magazine』 ソフトバンク, 月刊誌

C 言語を中心とした雑誌ですが、様々なプログラミング言語入門の連載もあり、プログラミングを学びたい人にはお勧めの雑誌です。

(加藤直樹)

総合学芸領域

自然系

現代物理学の話題

現代物理学の基礎

A thing of beauty is a joy for ever.

John Keats

最近、「物理は嫌い」という高校生が増えているようだ。でも、本当に、あなたは物理が嫌いなのだろうか。例えば、空を見上げてみよう。「なぜ、空は青いの？」「なぜ、夕焼けは赤いの？」「虹はどうしてできるの」・・・子供の頃に、こういった素朴な疑問を持ち、その秘密を知りたいとは思わなかっただろうか。上のような疑問に答えてくれるのが、物理学なのである。しかし、高校の教科書のどこを見ても、空が青い理由など載ってはいない。本当に知りたかったことは未だに分らないまま、ただ、無味乾燥な計算問題ばかりがあなたの頭に、物理の印象として残ってしまった・・・。これでは、嫌われても仕方がない。

本当の物理は、空が青い理由を教えてくれる学問なのだ。大学には、本当の物理が待っている。たとえ、講義で習うことが出来なくても、大学は、自主的に学問をする場なのだから、自分で調べてみればよい。その手助けをしてくれそうな参考書を、下にあげておいた。

空の色の秘密が分かると、青空や夕焼けはますます美しく見える。空を見上げながら、宙に浮かぶ空気分子たちが光を散乱している様子を思い浮かべるのは楽しいし、それと共に自然のしくみの見事に深い感動を覚えずにはいられない。そんな美しさと感動に、限りなく出会えるのが物理学なのである。

副読本

『物理のコンセプト(全3巻)』 ヒューエット著 共立出版

これは数式を殆ど用いずに、基礎的な物理概念を説明したもので、講義などで難しく感じた内容の理解の助けになるだろう。

『P S N S 教養の物理科学』 近角聡信他共訳 東京化学同人

これは文科系のためのテキストである。

『P S S C 物理』 山内恭彦他共訳 岩波書店

『理論物理学入門(上,下)』 スレーター,フランク著 岩波書店

『ファインマン物理学(全5冊)』 ファインマン他著 岩波書店

このシリーズは普通の教科書とは大いに異なり、これだけで基礎を学ぶのはちょっと無理だろう。しかし、通常は見過ごしてしまうような事や、難解な概念を手品のようなやり方で見事に説明してみせる。物理を本格的に学びたい人には、特に推薦できる。

『基礎物理学(全3冊)』 アルフケン著 講談社

これは、物理に用いられている数学を、分かり易く説明している。学部のレベルの物理学の理解なら、この本で十二分であろう。

現代物理学の解説書

1. 相対性理論

『相対性理論入門』 内山龍雄著 岩波新書

『重力の謎』 ベルグマン著 講談社ブルーバックス

どちらも、数式は少ないが入門書としてはしっかりと書かれている。一般相対論を中心とした内容となっている。

2. 量子力学

『量子力学入門』 並木美喜雄著 岩波新書

『やさしい量子力学』 ルイドニク著 東京図書

『1リットルの量子論』 治部真里・保江邦夫著 海鳴社

これは情熱に溢れた、素晴らしい本である。前書きだけでも、皆に読んでもらいたい。

3. 素粒子論

『素粒子の世界』 鈴木真彦，釜江常好著 岩波新書

『光と物質のふしぎな理論』 ファインマン著 岩波書店

これは、量子電気力学の産みの親の一人である著者自身による入門書。素人の君がわからないとしたら、それは僕の書き方が悪いんだとのことである。

『クォーク』 南部陽一郎著 講談社ブルーバックス

『アインシュタインを超える』 トレイナー，カク著 講談社ブルーバックス

上の2冊は、一流の研究者による、一流の解説書である。後者は、超弦理論までを対象としている。

4. 宇宙論

『ホーキング，宇宙を語る』 ホーキング著 早川書房

『宇宙論への招待』 佐藤文隆著 岩波新書

『電波でみた宇宙』 森本雅樹著 講談社

ホーキング，宇宙を語るは世界的ベストセラーになった本ではあるが、内容は難解である。

5. その他

『現代物理の世界（全10巻）』 講談社

『光の探究 ひかる』 柿内賢信著 法政大学出版社

『核融合とプラズマ』 プラバノフ著 東京図書

『オーロラ』 赤祖父俊一著 中央公論社

『超を測る』 森村正直著 産業図書

『見えないものを見る』 ヒュイッシュ編 紀伊國屋書店

『レーザー100の知識』 田幸俊治，辻内順平監修 東京書籍

現代は、多数の一般向けの解説書が出版されているので、気ままに本屋で面白そうな本を探して読んでみるのもよいだろう。また、月刊雑誌『パリティ』（丸善）には、現代の物理学の最もホットな話題が比較的易しく解説してある。本学の図書館にも置いてあるので、利用してみよう。

物理学者の伝記

『ガリレオの生涯』 シテクリ著 東京図書

『ニュートン』 島尾永康著 岩波書店

『キュリー夫人伝』 エーヴ・キュリー著 白水社

これは特に女性に薦めたい。大きな感動を呼び起こすであろう。尚、マリー・キュリーの書いた『ピエール・キュリー伝』も白水社から出版されている。

『ポルツマン』 プロータ著 みすず書房

『ランダウの生涯』 ベサラブ著 東京図書

これは、姪の目から見たランダウ（旧ソ連の代表的な物理学者で、有名な『ランダウ・リフシッツ理論物理学教程』の著者でもある）の姿が生き生きと描かれている。諸君はきっと、天才物理学者の意外に人間的な側面に驚くことだろう。

『ご冗談でしょう、ファインマンさん』 ファインマン著 岩波書店

こちらは、合衆国の代表的な物理学者であるファインマン（先に紹介した『ファインマン物理学』の著者でもある）の自伝であるが、題名から推察されるように普通の自伝とは全く違う。とにかく面白い。

『旅人』 湯川秀樹著 講談社

これは、湯川自身が、後にノーベル賞受賞の対象になった中間子論を築くまでの半生を書いたもの。ランダウやファインマンと比較してみるのもいいだろう。

『部分と全体』 ハイゼンベルグ著 みすず書房

これも自伝であるが、文学的・哲学的にも優れた名著である。読者を、ハイゼンベルグと共に、ボーアやパウリ、ディラックと量子力学について語っているような気分させる。弱冠24才のハイゼンベルグが行列力学を発見するくだりは、若い諸君らの胸を熱くするだろう。

『神は老獺にして・・・アインシュタインの人と学問』 パイス著 産業図書

これは物理学から見たアインシュタインの伝記とも言うべきだろう。力作である。式はまだ分からなくても、思想的に得るものは十分にあると思う。

物理学の発展史

『物理学とは何だろうか(上・下)』 朝永振一郎著 岩波新書

いわゆる現代物理学以前までの物理学の発展を描いた、朝永らしい名著。

『物理学はいかに創られたか(上・下)』 アインシュタイン・インフェルト著
岩波新書

アインシュタインならではの物理の捕え方に学ぶ所が多い。

『物理法則はいかにして発見されたか』 ファインマン著 ダイヤモンド社

物理学の辞典

『物理学辞典』 物理学辞典編集委員会編 培風館

『物理学大辞典』 物理学大辞典編集委員会編 丸善

これらは、分からないことを、とりあえず調べるのに便利である。前者は小項目形式で物理用語を調べるのに都合がよく、後者は大項目形式なので学習するのに都合がよい。

(物理学科教官)

宇宙と地球と人間

1. 地質関係

『46億年地球は何をしてきたか』 丸山茂徳 岩波書店(シリーズ地球を丸ごと考える 2)

日本列島の地史の見直しから、新しい地球観のプレートテクトニックから見た地球の発達史を解説している。

『リズムカルな地球の変動』 増田富士雄 岩波書店(シリーズ地球を丸ごと考える 3)

推積物の縞から太陽黒点の周期を考えたり、ミランコビッチ周期が及ぼす地球への周期的影響など今までと異なった観点から周期の原因について解説している肩の凝らない本。

『日本列島の誕生』 平朝彦 岩波新書

日本列島の地史をプレートテクトニクスの立場から解説した入門書。

『日本の地質』 木村敏雄, 速水格, 吉田鎮男 東京大学出版会

日本列島の構造発達史を最新の成果で解説している専門書。

『生物と大絶滅』 STEVEN S. STANLEY 著 長谷川善和, 清水長訳 東京化学同人

地球史の中で何回か起こった生物の大絶滅の紹介とその原因について解説している。

『ワンダフル ライフ パージェス頁岩と生物進化の物語』 STEPHAN JAY GOULD 著 渡辺政隆訳 早川書房

カナダのカンプリア系パージェス頁岩の化石はウオルコットによって研究されたが、約半世紀後ウイツェイントン等の研究でこれらの古生物は現生の生物とは大きく異なる分類群であることが判明する。NHKスペシャルでも話題になった。新版『古生物学』1-4 浅野清他共編 朝倉書店

従来『古生物学』上・下巻の改訂版で、4巻となっている。1巻は総論・原生動物・海綿動物・古杯動物・腔腸動物・蠕形動物・軟体動物、2巻は軟体動物

の一部・環形動物・節足動物・こけ虫動物・腕足動物，3巻は棘皮動物・原索動物・コノドント類・脊椎動物，所属不明の動物，4巻は植物で，概説・菌藻植物・シダ植物・裸子植物・被子植物・石炭質ナンノプランクトン・孢子および花粉となっている。

現在発行されている唯一の古生物学の参考書で，この方面の学問にたずさわるものの必携の書であり，よい手引書であるが，生物学の基礎知識がないと内容を理解するのが困難である。

『古生物学の基礎』 D.M.ラウプ&S.M.スタンレー著 花井哲郎・小西健二 速水格・鎮西清高共訳 どうぶつ社

本書は，アメリカの大学生の教科書として書かれたものであるが，古生物学の理論と方法を具体的に解説しており，古生物学の入門書として優れている。

『現代の地球科学』 猪郷久義編 朝倉書店

内容はかなり専門的なものも含んでいる地球科学の教科書としてよくまとまっております，この方面の学問に興味のあるものは，一読されたい。

図鑑類その他

『日本化石図譜』 鹿間時夫著 朝倉書店

『原色化石図鑑』 益富寿之助ほか著 保育社

『植物化石図譜』 遠藤隆次著 朝倉書店

『地球の歴史』 井尻正二・湊正雄共著 岩波書店

『日本列島』 湊正雄・井尻正二共著 岩波書店

『地球の歴史』 竹内均・都城秋穂共著 日本放送出版協会

『東京の自然史』 貝塚爽平著 紀伊国屋書店

ここにかけたのは，地学の一般普及書であるが，専門的にも深く，また，新しい発見や新説などもおりこまれ，しかも，親しみやすく面白く，比較的無味乾燥な教科書的なかたくなるしさからぬけだしているので一読をすすめる。

2. 鉱物学関係

『地殻・岩石・鉱物』 牛来正夫著 共立出版

地球の固体部分の物質、とくに地殻の物質について十分な解説がなされている。さらに、地球の進化の問題にもふれている。

『楽しい鉱物学』 堀 秀道著 草思社

この本は、鉱物を楽しく調べる手がかりを平易に解説したものであるが、単に鉱物鑑定の手順を示すのではなく、具体的にいくつかの鉱物の特性など詳細な説明がなされている。また、難しいと思われるがちな鉱物の結晶構造についても読んでいるうちに理解できるよう工夫されている。

堅い話ばかりでなく、シルクロードの青い石とか万葉ひすいを推理するなどトピック的な話も載せて楽しませてくれる。

『無機地球化学』 一国雅巳著 培風館

この本で中心となっているテーマは、水とケイ酸塩の相互作用、それとその結果生じた物質の話である。そのテーマに関する地球化学的手法について平易に解説してある。

『地球システム科学入門』 鹿園直建著 東京大学出版会

この本は、わかりやすく、地球に関する既存の知識と地球科学が成し遂げてきた成果をまとめている。また、動的地球観として、地球を流体とみなし、流体地球におけるさまざまな物質の化学的な動きを論じている。さらに、このことを通して、現在重要な問題である地球環境問題にもふれている。

『地球色変化』 中嶋 悟著 近未来社

石は、さまざまな色を呈している。これは、それを構成する物質の状態を敏感に反映している現れである。この本では、そのような色を定量的に測定することにより、地球化学における色の変化に着目し、地球表層の物質移動と化学反応の経路と速度に関わる研究を紹介している。また、著者の研究者としての歩みとその人間関係についてもふれてあり、その生きざまが読み取れて興味深い。

図鑑類

- 『原色岩石図鑑』 益富寿之助著 保育社
『原色鉱物岩石検索図鑑』 柴田秀賢・須藤俊男共著 北隆館
『原色鉱石図鑑』 木下亀城著 保育社
『続原色鉱石図鑑』 木下亀城・湊秀雄共著 保育社

3. 地球物理学関係

- 『お天気科学 - 気象災害から身を守るために - 』 小倉義光著 森北出版
天気が移り変わるとき、大気中で何がおこっているのか、また、どうしてそうなるのかを、科学的にわかりやすく説明した気象の入門書。
- 『気象の教え方学び方(気象の教室6)』 名越利幸・木村龍治共著 東京大学出版会
気象および気象教材の考え方をわかりやすく解説したもので、教育系の学生と理科担当教師を対象として書かれている。
- 『パソコンで見る気象入門』 島貫陸・浦野弘共著 講談社
パソコンを活用しながら気象を学習する入門書。大気の仕組みを視覚的にとらえることをねらっている。BASICのプログラムを8個掲載。
- 『新教養の気象学』 日本気象学会教育と普及委員会編 朝倉書店
以上の入門書に続く気象学の各論を解説したもので、気象学の多彩な性格をうかがうことができる。
- 『地球科学ハンドブック』 力武常次著 聖文社
固体地球物理学に関するたいへん平易で簡潔な入門書。
- 『地震 その本性をさぐる』 茂木清夫著 東京大学出版会
岩石の破壊現象から見た地震の本質論、地震予知学の重要な基礎。
- 『地震発生のしくみと予知』 尾池和夫著 古今書院
地震現象をさまざまな角度からとらえ、その発生のしくみと予知について、わかりやすく解説している。
- 『大地震は近づいているか』 溝上 恵著 筑摩書房
関東・東海地域を中心にして、最近の地震活動を詳しくかつ平易に解説し、大

地震発生の可能性について述べている。

『大地動乱の時代』 石橋克彦著 岩波書店

東海地震発生の可能性を指摘した著者が、現在の知見をもとにさらなる警告を行っている。江戸末期から明治にかけての地震活動を大地の動乱ととらえ、時を同じくした社会の動乱と対応づけながら解説するなど、ユニークな内容で、読みものとしてもおもしろい。

『サイレント・アースクェイク 地球内部からのメッセージ』 川崎一郎・島村英紀・浅田敏共著 東京大学出版会

現在の地震学の最前線がわかりやすく解説されている。

4．天文学関係

宇宙開闢のビッグ・バン（大爆発）後のまだ高温・高密度のときに全ての水素と大部分のヘリウムがつくられた。今も水素は宇宙に最も多く存在し、水をはじめ私たちの体の重要な構成元素となっている。その意味で私たちは“宇宙の子”である。

ビッグ・バンにより宇宙は膨張し、ガス（水素が大部分）の温度・密度が低下する中で自己重力で収縮可能なガスの塊が銀河となった。銀河は約1000億個の恒星から成り立っている。私たちの太陽が所属する銀河（銀河系）には、恒星の原材料であるガスがまだ残っており、今も恒星が形成されている。

恒星は高温・高密度の中心部で原子核融合によりエネルギーを生み出し、その結果最も軽い水素から順にヘリウム、炭素、酸素と重い元素がつくられていく。質量の大きな恒星では最後に超新星爆発を起こし、重い元素を含んだガスをまき散らし、次の恒星誕生の原材料となる。私たちの体（草木や土もそうであるが）を構成する炭素などの重い元素は恒星によりつくられたものであり、この意味で私たちは“星の子”でもある。

銀河系の多くの恒星の中で、極くありふれた（温度も明るさも質量も）恒星である太陽から適切な距離に形成された一つの惑星に生命が誕生した。その生物の一つが地球人である。

地球人による天文学の20世紀最大の成果は宇宙がビッグ・バンとともに始まり、

現在も膨張しているという発見であり、それはコペルニクス、ガリレオ以来の宇宙観の革命をもたらした。

以上についての参考図書として次のようなものがある。

『新版 100 億年を翔ける宇宙』 加藤万里子 恒星社厚生閣（1998）

文科系の学生のために書かれた本で、やさしく、わかりやすい。

『天体と宇宙の進化Ⅰ 宇宙の歴史と現在』、『天体と宇宙の進化Ⅱ 宇宙の観測』 杉本大一郎編 放送大学教育振興会（1997）

詳細にきちんと書かれた本である。

『宇宙の謎はどこまで解けたか』 海部宣男 新日本出版社（1995）

読み物として読んで面白い本である。中身は濃い本である。

『宇宙をみせて』 天文教育普及研究会編 恒星社厚生閣（1996）

宇宙にある天体を楽しくみる見方・見せ方についての本である。

（地学）

自然と数理

皆さんも、最近、インターネットやウィンドウズというような言葉をよく耳にするでしょう？テレビをはじめ、そこら中にパソコンのコマーシャルがあふれています。そうそう2年程前には“フェルマーの予想”という数学の大問題が解かれたという記事が新聞に載りました。350年も未解決だった問題が解かれたというニュースを共有できた私たちはとてもラッキーです。もはや“私は文科系だから”とか数字はむずかしくてと言っている場合ではありません。さあしりごみしないで少しだけ勇気と好奇心をもって数理の世界をのぞいてみませんか

まずは数学の考え方や面白いトピックスをわかりやすく解説した本を何冊かあげましょう。

- ・『目で見る数学の基礎 = 面積と体積 = 』（大野栄一 著，東京図書）

数学を目で見て楽しみながら，“なぜこうやって計算するのだろう”と考えてみた本である。台形や円の面積，ピタゴラスの三角形，球や円錐の体積の公式も，奥が深くてこんなに面白いことが分かる。

- ・『微分方程式で数学モデルを作ろう』（デヴィッド・バージェス，モラグ・ボリー著，垣田高夫，大町比佐栄訳，日本評論社）

生物学，経済学，プランニング，医学など，現実社会の問題を微分方程式の問題としてモデル化し，数学的にその微分方程式を解いて，その結果を現実の問題の言葉に翻訳するプロセスを解説している。

- ・『解決！フェルマーの最終定理 - 現代数論の軌跡』（加藤和也 著，日本評論社）

350年以上未解決だったフェルマーの最終定理がウイルスによってついに解かれた。一度発表した後，証明の不備が判明，1年以上の苦考の末ついにその修正に成功した。その経緯と数学的概要を独特の語り口で解説する。

- ・『ゲーデル・不完全性定理』（吉永良正，ブルーバックス，講談社）

人間が論理的思考をするときの限界を示したといわれる“不完全性定理”

のエッセンスを、素人にもわかりやすく語ってくれる。

- ・『数学ゲーム 1』(マーチン・ガードナー, 日本経済新聞社)

計算機科学, 整数論, 幾何学, ゲームの理論等から面白い話題を, トピックス形式で図解を交えてわかりやすく解説している。

- ・『図形あそびの世界』(野口広 著, 講談社現代新書 624)

この世界は様々な形に満ちあふれていてその図形の研究も奥が深い。この本では専門的に図形と取り組むのではなく, 手近な材料(折り紙, あやとり, など)を用いて図形の世界を遊びとしてとらえようとしている。

- ・『新しいトポロジー』(本間龍雄 監修, ブルーボックス, 講談社)

図形や空間の構造を調べるのにどのような道具, 手法を使えばいいのか。この本は位相幾何学の基礎を多少専門的ではあるが, 素人にもわかりやすいように解説してある。さらにその応用であるカタストロフィー理論や経済数学への応用まで話を進めている。

いかがですか? 少しは“読んでみようかな?”という気になりましたか?

さて, 次は情報とコンピュータに関する本です。情報科学には到るところ数理が現れますが, その中で比較的きれいな体系を持つ分野として, 待ち行列理論, 符号理論, 暗号理論があります。それらの中からそれぞれ一冊ずつ挙げておきます。

- ・『応用待ち行列理論』(森村英典, 大前義次 著, 日科技連)

電話ボックスの前に順番を待つ人々, スーパーのレジに並ぶ人々, トイレの前に並ぶ家族などいろいろな場面で待ち行列の現象が見られるが, たとえば, 家の中にトイレをいくつつくるのが最適か。これは大問題である。

こうした問題にたいして, 待ち行列理論は適切にこたえてくれる。この本は厳密性を少々犠牲にして直感に訴える方策をとって, 広範囲の問題を扱っており, 確率論の知識が少しあれば楽しく読める。

- ・『符合理論入門』(V. プレス 著, ワイリー・ジャパン Inc)

雑音のある通信手段を用いて情報を送信するとき, 雑音によってメッセージエラーが起きるのは避けられない。コンピュータネットワークや携帯電話が普及してきた現在, そのメッセージエラーをすばやく訂正できる回路を設計するのは焦眉の急である。そのために, 情報を送信するときできるだけ訂正し

やすい符号化を行うことが必要である。この理論は代数学の有限体論を基礎とする。この本は符合理論の入門書であり、多少代数学の知識があれば読みやすい。

・『暗号理論入門』（岡本栄司 著，共立出版）

コンピュータネットワークを通じて全世界が結ばれている現在、各自が自分の“宝物”（ファイル）を守る必要に迫られている。その楯がパスワードなるものであるが、よくしられているように、これは暗号で登録されている。暗号が簡単に解読されてはたまらない。使い勝手がよくて、解読されない暗号はどのように作ればよいのか。この理論は整数論の素因数分解を基礎とする。この本はこのような暗号理論の入門書である。

以上の本の中には数学的な知識を少し必要とするものもあります。分からないところはとばして読んでも構いません。でも、ちょっと考えてみるともっと面白いでしょう。これらの本を読んで、自分で考えることの楽しさを少しでも分かっていたければ幸いです。

（溝口紀子）

ここでは、溝口紀子教官の解説に数冊の本を追加する形で、コンピュータ科学と数理科学の接点を解説する本を紹介しましょう。

まず、最初に紹介する三冊はコンピュータ科学と数理科学の関わりを知ると同時に、世間で言われている「情報科学科」の学生が最低限知っておくべき本の一部です。

・『計算論とオートマトン理論』（A. サローマ著，サイエンス社）

現在コンピュータは様々な場所で、難しい計算を行ったり、複雑な問題を解いたり、人間の代わりに面倒臭い仕事をしてくれたりしていますが、コンピュータは何故そのようなことが出来るのでしょうか？

コンピュータを動かすためには、コンピュータへの命令書ともいべきブ

プログラムが必要です。それでは、コンピュータへの命令を人間はどうやって与え、コンピュータはその命令に従ってどのように動くのでしょうか？「コンピュータはすごい！」と神様の存在のように思う人も多いようですが、コンピュータを作ったのは人間で、そのコンピュータを動かすプログラムを書くのも人間です。コンピュータは人間が作り出したもので、決して神様では無い訳ですから限界もあるでしょう。その限界とは何でしょう？

プログラムを書くための言語（プログラミング言語）は、我々人間が話すような曖昧性を持つ自然言語とは違い、コンピュータが理解する機械語（0と1の二文字のみからなる言語）へと変訳される形式的な言語でなければなりません。この本では、形式言語を数学的に定義し、その中の文脈自由言語などを解説し、言語が形式的かつ機械的に生成される様子を解説しています。そして、現在のコンピュータが何故「計算をする機械」として動くのかを説明する数学的モデル（オートマトン、チューリング機械）を形式言語の中で定義し、この形式言語が、言語を生成するのみならず、問題を解く能力を持つことを解説してくれます。さらには、コンピュータが計算できる問題とは何か？計算の複雑さなどをも解説します。この「計算の複雑さ」というものがあるから、このコンピュータ社会の中で、皆さんは平気で、暗証番号、パスワードが使えるのです。もし、この本で紹介するものとは別のアーキテクチャーを持つコンピュータが出現して、そのコンピュータにとって全ての問題が「計算の複雑さ」を感じさせなくなってしまうたら、そのコンピュータにとって皆さんの暗証番号やパスワードを見破ることが簡単になってしまいます。あ～恐ろしい。

・『プログラミングの方法』（E.W.ダイクストラ & W.H.J. フェイン共著、サイエンス社）

皆さんはプログラムを書いたことがありますか？プログラムが正しく書かれていなければ、コンピュータは動いてくれません。『計算論とオートマトン理論』は、プログラミング言語の文法などを解説する本だったのですが、もちろんプログラムは文法的に正しく書かれていなければなりません。このような点を議論するのは「構文論」と呼ばれる分野です。ただ、日本人と英語圏の人達の間でも見られるように、正しい文法で書かれた言葉でも意志の疎通がうま

く行かない場合がありますね。例えば“Can you celebrate?”という安室さんの“あの”有名な歌はどのような意図で付けた題だったのでしょうか。英語圏の方達はこのような言い方をしないようで、あえて使うとすると「どんちゃん騒ぎできる？」となってしまう、という解説が朝日新聞に載っていました。このようなことがコンピュータと人間の間にも起こります。この様な点を議論するのは「意味論」と呼ばれます。構文論的にも意味論的にもコンピュータと人間の間意志の疎通がとれるプログラムがバグレスプログラム(正しいプログラム)です。では、バグレスプログラムをどのように書けばよいのでしょうか？この本は、そのような問に答えてくれますし、著者の一人、ダイクストラは、今現在世の中に存在する数多くの有益なアルゴリズムを発見した人物です。「数学者は数学の定理に対しては厳密な証明を要求するくせに、コンピュータの前に座ると数学者であることを放棄する」と言う皮肉があります。この本は手続き型言語(CやPascalなど)で書かれたプログラムが正しいか否かを数学基礎論の中の一理論、「ホーア部分正当性の理論」を使って、難しいことを言わずに簡単な入門書として書かれています。この理論は、70年代からIBMの「クリーンルーム」というプロジェクトとして、IBMが世に出すプログラムのバグ取りに使われ、実用としての実績が積み重ねられて来たことが新聞発表されたことでも有名になりました。

・『プログラミング言語処理系』(佐々 政孝著、岩波書店)

プログラミング言語は、人間がコンピュータにさせたい命令書であるプログラムを書くための言語ですが、これはどちらかと言うと、まだ人間の言葉に近い言語です。このような言語を「高級言語」と言いますが、コンピュータにとって理解できる文字は、0と1の二文字のみと言えます。この0と1の二文字のみで書かれた文章、皆さん読んだり書いたりする気がしますか？しかし、コンピュータが理解できる機械語は「低級言語」の中でも最も低級な0と1の二文字のみから成る言語である以上、なんとかして高級言語を低級言語に翻訳しなければなりません。この翻訳を行ってくれるのが「コンパイラ」です。この本はコンパイラの解説書です。例えば、皆さんが「 $(1 + 3) * 5$ 」を入力し、コンピュータが答え「20」を出力してくれ、皆さんが「 $(1 + 3) * 5$ 」を入力

したらコンピュータは入力ミスを指摘してきます。コンピュータは文字列「 $(1 + 3) * 5$ 」や「 $(1 + 3)) * 5$ 」をどうして認識できるか？その解説がこの本にあります。コンピュータが動くためには、ハードウェアであるコンピュータのアーキテクチャーの理論、一方、ソフトウェアであるプログラミング言語の理論、そしてこのコンパイラの理論が必要なのです。

次に少々専門的な本になってしまいますが、高度な数学とコンピュータ科学の接点を解説した本を紹介しましょう。これらは、プログラムに焦点を当てて、ソフトウェア科学と数学との接点を紹介していますが、特に最後の三冊は、プログラミング理論における最先端の研究を紹介した本です。

・『述語論理と論理プログラミング』（有川節夫&原口 誠共著，オーム社）

民間企業の研究所では、「人工知能」という言葉は死語に成りつつあるくらい、この分野は専門的に細分化されていますが、初期の人工知能と言えば、あの、皆さんも悩まれたでしょう「数学の定理の証明」をコンピュータにやらせる話でした。ところで皆さんは、小学校から大学まで、学校の数学の先生から「経験的に教わった」数学の考え方や推論の仕方に対して、「どうしてそういう風に考えていいんだろう？」と疑問を感じたことはありませんか？普通の数学の先生にこのような質問を投げかけても答えは期待できないでしょう。たとえ大学の先生でも。こういったことを扱う分野は「数学基礎論」と呼ばれる特殊な分野です（と言うと数学基礎論の友人から怒られそうですが）。この本では、まず、数学を記述する形式言語とその上の「述語論理」が紹介されます。この述語論理の様々な定理として、我々が経験的に習った数学の考え方や推論の仕方の正しさが証明されています。この述語論理をベースに、コンピュータに定理を自動証明させるための「論理プログラミング」が解説されています。これは実際に Prolog と言った言語で世に出ています。また、最近の研究では、定理の自動証明のアイデアをコンピュータにプログラムを自動的に導出させることに応用する研究も進められています。

・『プログラム検証論』(林 晋著, 共立出版)

この本は、『ダイクストラ プログラミングの方法』で触れた, ホーア論理, ダイクストラの検証法をより専門的に解説したものです。著者の林氏はご自身, 構成的プログラミング言語PXを開発している人です。構成的プログラミングについては同氏の『構成的プログラミングの基礎』の紹介で。

・『プログラム意味論』(横内寛文著, 共立出版)

皆さんは数学の位相空間論という分野をご存知ですか? この分野の未だ解かれていない問題を集めて出版されている本がありますが, その中に Domain Theory という分野があります。この分野はプログラムが実行されるとき, その意味を明示するための数学的道具になります。これを介して我々はプログラムが実行するところの意味を把握する訳です。この本は題名の通りプログラム意味論, つまり, 我々の意図するところとプログラムがコンピュータによって実行されるところの意味との意志の疎通をはかるための数学的理論を解説した本です。横内氏は日本IBMの東京基礎研究所で活躍されている現場の研究者です。

・『構成的プログラミングの基礎』(林 晋&小林 聡 共著, 遊星社)

我々が小学校から大学まで習う数学は, YES または NO しかない世界, 背理法が使える世界ですね。では, 例えば「この問題に対して回答を出すいかなるプログラムも無い」と仮定して矛盾が出たとしましょう。そうしますと背理法により「この問題に対して解答を出すプログラムが何か存在する」という結果が, 我々が習って来た数学の中で得られます。しかしプログラマーにとっては, 「プログラムがある」と言われてもそれは具体的が姿を見せないただの紙に書かれた餅(具体的に絵として描かれていればまだマシ)でしかなく, 実際のプログラムを示してくれなければ意味が無いのです。皆さんは, おそらく小学校から大学までに「存在」という意味を形式的には習わなかったでしょうが, 我々が習った数学の中には, 「存在」の意味がちゃんとあります。ただ, その「存在」の意味は YES または NO しかない世界の「古典理論」の中で付けられます。残念ながらプログラミングという立場からは, この古典理論は合わない所があります。プログラミングの世界にマッチした数学として現在「構成的

数学」というものがあります。この数学は古典理論ではなく、直観理論を公理的に整備した論理体系に立脚しています。この数学が目玉されたのは、Curry-Howardの対応、簡単に言えば、「構成的数学の定理の証明と構成的プログラミングにおけるプログラムが対応している」という対応のためです。この本はその構成的プログラミングの基礎になります。林氏は中野浩氏と共にPXという構成的プログラミングのシステムを開発していますが(本がMIT Pressから出版されてます)、その基礎ともなる本です。

(安原 晃)

最後に、コンピュータの仕組みを知りたい方に以下の図書を紹介します。

・『痛快！コンピュータ学』 坂村健著 集英社インターナショナル発行 1999年

本書の著者である坂村健先生は自らをコンピュータアーキテクト(電脳建築家)と呼んでいらっしゃいます。コンピュータアーキテクトと言われてもピンとこないのではないのでしょうか？しかし、電脳建築家と書かれるとなんとなくおわかりになるのではないのでしょうか？コンピュータを建築とのアナロジーでとらえ、それは文化や伝統と深く関わるテクノロジーであり、コンピュータのあるべき姿を世界に提案していくのが電脳建築家ということのようです。坂村先生はこの理念に基づきTRONというプロジェクトを世界に向けて提唱された方として有名です。

さて、本書の内容は、コンピュータの歴史、現在のコンピュータの動作原理である逐次処理方式や論理回路などのハードウェアの基礎知識、オペレーティングシステムやアルゴリズムの概念などのソフトウェアの基礎知識、インターネットなど通信技術の基礎知識など、計算機システム概論やコンピュータ概論で講義されるテーマについて述べられています。「コンピュータが身近なものになればなるほど、問われてくるのが、コンピュータの本質につながる理解であり知識です。これからの高度情報化社会を生きていくには、こうした基礎知識がますます重要になってきます。」と強く述べられているように、理科系

の学生を対象とした教科書としてではなく、コンピュータを専門としない文科系の学生や一般の社会人の方にも読んでいただけるように新たな試みをしようという意気込みが随所に伝わってきます。それは例えば目次をみればわかります。従来の教科書だと、「第6章 論理素子」とするところを「第6章 世界を変えた小さな『石』」というように章のタイトル1つとっても工夫されています。また写真やゴルゴ13の挿絵を織り交ぜながら説明されているので、読み進めやすいのではないのでしょうか。それと同時に私自身も勉強になるような深い内容も書かれているのです。

本書は計算機システム概論やコンピュータ概論の参考書ですが、本学も2000年度の学部改組に伴い「情報処理」が全学必修科目になります。本学の学生皆さんがコンピュータに触れることになります。そこで私は全学生の皆さんに本書の一読を薦めます。なぜならば、本書はコンピュータのハードウェアやソフトウェアに関する技術的な知識のみでなく、セキュリティや倫理の問題にも触れられており、また、近未来のコンピュータ像についても語られているからです。本書の最後の一節でも述べられていますが、コンピュータやインターネットは皆さんの夢を実現するための道具でしかないのです。それらを使って皆さんが何を実現させてゆくのかを大学生活の中で考えていただきたいと思います。

(樫山淳雄)

追加して、現代のインターネット時代にぴったりの数学家内書を紹介したい。

・『数学名所案内 代数と幾何のきらめき 上下』G.トス著 蟹江幸博訳 シュプリンガー・フェアラーク東京)

現在の数学の全体像をおおまかにつかみたい人に最適な数学家内書である。それぞれの分野ごとに参考文献としてwebサイトの紹介もあり、活用性の高い本である。

(竹内伸子)

脳と人間

人間の感情、思考、記憶、信念など心の働きはどのように生まれるのか、考える自分、意識している自分とは何か、これらは古来より人類の最大の謎として常に自問し続けている問題である。脳が壊れれば、呼吸が止まり、記憶が喪失し、不安に怯える。ヒトの「心」と「脳」の間に深い関係のあることは誰しも認めるところであろう。現代の神経科学は認知科学や計算論科学の発達と相まって「脳」と「心」の結びつけ問題に迫ることを可能にしている。講義では脳の構成単位である神経細胞（ニューロン）の基本的性質を理解し多数のニューロンが複雑に結合して出来上がったシステムとしての脳・神経系の情報処理機構を医学・生物学的視点から学ぶことになる。「自分とは何か」という問いかけに現代の神経科学はいかに応えてくれるのだろうか。脳神経系に関する生物学の専門書(1)と現代の脳科学研究の成果に立脚した一般向けの著書(2)を以下に紹介しておく。

(1) 脳・神経系に関する生物学の専門書として

- 『ニューロサイエンス入門』 松村道一著 サイエンス社
- 『ニューロンの生物学』 F. デルコミン著 小倉明彦・富永恵子訳 トップラン
- 『脳と神経 分子神経生物学入門』 金子章道・川村光毅・植村慶一編 共立出版
- 『脳・神経と行動』 佐藤真彦著 岩波書店

(2) 脳に関する一般向け著書として

- 『唯脳論』 養老孟司著 青土社
- 『脳と心』 山本健一著 講談社選書メチエ
- 『脳と心の正体』 ベンフィールド著 塚田裕三・山河 宏共訳 文化放送出版
- 『脳と心の地形図』 リタ・カーター著 養老孟司監修 藤井留美訳 原書房
- 『知性の脳構造と進化』 澤口俊之著 海鳴社
- 『脳と心の進化論』 澤口俊之著 日本評論社

(吉野正巳)

生物へのいざない

私たち人類は、自分と同じ生命をもっているものに本能的に引きつけられる。それは、生きているということはどういうことなのか、私たちはどこから来て将来はどうなっていくのか、というような疑問を大昔から持ち続けていたからであろう。その疑問に答えるために、生物に関する学問（生物学）が成立し、発達してきたのである。そして人類は、DNA やその突然変異による「生物的進化」を越えて、情報を世代から世代に遺伝子を介さずに伝える「知識的進化」を遂げつつあり、今や生命の神秘を解き明かすだけに飽きたらず、生命の操作をも人の手で行おうとさえしている。このように生物学（ライフサイエンス）は、私たちの日常生活にさまざまな影響を及ぼしており、その内容を理解する事は私たちにとって欠かせないものである。しかし、生命の基本単位は細胞であり、本講義では、その細胞がどのようにして創られて来たのか、また、その細胞をもとにして、現在のような生物がどのようにして生まれて来たのかを話したい。

松香光夫・吉田邦久編『生物学を読む』（玉川大学出版部，1994）には、そうした現代の生物学（ライフサイエンス）を構成している諸分野の位置づけが示されており、それぞれの分野の内容を把握するのに適した本とその読み方が、編者を含めて20人の生物学者達によって紹介されている。この本に取り上げられていない下記の書籍もいずれ劣らぬ良書である。これらの先人達の業績やさまざまな分野の研究の一端に触れることによって、生物学を、そして自分自身を理解してもらいたい。

生物学の歴史・導入

『微生物の狩人（上・下）』 ポール・ド・クライフ著 秋元寿恵夫訳 岩波文庫
（1980）

オランダ人レーウェンフックが手製の顕微鏡で小さな生物を観察したときから

微生物（細菌）の研究の歴史は始まった。主に病原体の追及に貢献したパスツール、コッホ、北里柴三郎など人物中心の細菌学史。

『海藻学入門』 西沢一俊著 講談社学術文庫（1989）

海藻は萬葉集の時代から日本人にとって身近な生物であった。海藻の成分の研究を続けてきた著者が、海藻の生物的側面だけでなく海藻と人との関わりも解説。

『モヤシはどこまで育つのか』 増田芳雄著 中公新書（1990）

種子が発芽し、光や重力などに応答しながら成長し、花を咲かせ実を結び子孫を残していくという植物特有の生命現象を、植物生理学者の立場から紹介。

『生命科学の新しい流れ』 渡辺 格監修・山口雅弘著 同文書院（1990）

生命現象を遺伝子の本体DNAに還元し、新しい生命概念を包括した生物学として、発生分化、免疫現象、脳の機能など幅広い生命現象をわかりやすく解説。

『発酵 ミクロの巨人たちの神秘』 小泉武夫著 中公新書（1990）

身近な食品、医薬品などの発酵産物は広く利用されている。利用されている微生物の紹介、発酵のしくみや発酵の研究と利用の歴史などをわかりやすく解説。

『生化学の夜明け 醗酵の謎を追って』 丸山工作著 中公新書（1993）

20世紀前半、生化学はアルコール発酵の研究を中心としてめざましい発展をとげた。ノーベル賞受賞者も含めた生化学者達の研究競争の歴史を紹介する。

『脳と神経の生物学 三訂版』 伊藤 薫著 培風館（1996）

発生・遺伝・成長・行動など、さまざまな生命活動を、特に脳の機構と関連させて総合的に解説。

生態学・生物進化

『生命進化7つのなぞ』 中村 運著 岩波ジュニア新書（1990）

生物が誕生してから現在までの生物の歴史の中で、生物学的に重要な7つの出来事があった。生命現象を進化の視点からとらえてやさしく解説。

『はじめてのえころじい』 藤井宏一編著、可知直毅・佐倉 統・徳永幸彦・石川真一著 裳華房（1995）

大学教授と大学院生・学部学生の対話（病原体と病気、ギフチョウ、熱帯雨林、

地球温暖化などが話題)という形式を通して生態学全般をやさしく紹介。

『海藻おしば カラフルな色彩の謎』 横浜康継・野田三千代著 海游舎(1996)
どうして海藻が紅色, 褐色, 緑色など様々な色彩を持つのかを生態的, 進化的にわかりやすく解説。生の海藻と海藻押し葉のカラー写真は見ていて楽しい。

『生物は重力が進化させた 実験で検証された新しい進化の法則』 西原克成著
講談社ブルーバックス(1997)

注目を集めた宇宙(スペースシャトル内)でのメダカの発生実験。それ以前から生物の形は重力に左右されることを実験的に示してきた著者が打ち出す新しい進化理論。

『分子人類学と日本人の起源』 尾本恵市著 裳華房ポピュラーサイエンス
(1997)

化石や遺骨をよりどころとする従来の人類学に疑問を抱き, 分子生物学の手法を取りいれてタンパク質や核酸の相同性に基づいて人類の系譜を作ろうとしている著者の研究の歩みを綴る。

『共生の生態学』 栗原 康著 岩波新書(1998)

閉鎖生態系についてやさしく解説した名著『有限の生態学』(岩波同時代ライブラリー)の著者がその後の研究成果も加味して書き上げた, ヒトと自然の共生の可能性を探る本。

遺伝子・遺伝子工学

『生命をつくり変える バイオテクノロジー革命』 G. J. V. ノッサル著 丸山工作・石川 統訳 岩波現代選書(1986)

一種類の抗体産生細胞が一種類の抗体を産生するという画期的な発見をした著者が, バイオテクノロジーの原理から研究, 社会的インパクトに加えて将来性や問題点まで易しく解説。

『DNA から遺伝子へ 生命の鍵をにぎる巨大分子』 石川 統著 東京化学同人
(1988)

DNAは生物の遺伝情報が書き込まれている膨大な設計図に例えられるが, その

発見や、DNA にまつわる話を遺伝子治療にまでわたって広範囲に解説。

『バイオサイエンス入門』 藤本大三郎著 講談社現代新書（1993）

遺伝子の働きの基礎的なことからバイオテクノロジーの内容までやさしく解説。

『あなたのなかのDNA 必ずわかる遺伝子の話』 中村桂子著 ハヤカワ・ノンフィクション文庫（1994）

DNAは生物の形や働きを決めていくプログラム。DNAと遺伝子の関係から、遺伝子治療やバイオ技術による食糧生産まで、DNAについてやさしく解説。

『クローン羊の衝撃』 米本昌平著 岩波ブックレット（1997）

なぜクローン羊がタイム誌の表紙にまでなったのか？クローンとはなにか、哺乳類のクローンを作るのはなぜ困難なのかななどを簡潔に解説した小冊子。

形態学・細胞生物学

『形を読む 生物の形態をめぐって』 養老孟司著 培風館（1986）

生物の形態については古くからさまざまな説明づけがなされてきた。生物の形とその意味について、哲学や文学まで引用し、議論を展開している形態学総論。

『形態学の復権 分子生物学を越えて』 吉村不二夫著 学会出版センター（1988）

形態の研究は、生命科学の初歩であると同時に最も根元的な領域と言える。生化学や分子生物学的な手法による研究が主流となっている現代に、敢えて形態学の独自性とその役割について考察する。

『超ミクロ世界への挑戦 生物を80万倍で見る』 田中敬一著 岩波新書（1989）
走査型電子顕微鏡で世界最高の倍率を実現した著者が、その苦勞と喜びを語りつつ、見事な写真を示して超ミクロの世界へ案内する。

『からだの設計図 プラナリアからヒトまで』 岡田節人著 岩波新書（1994）

簡単なつくりの生物から複雑なつくりの生物まで、からだの各部分を作る遺伝子を統括する遺伝子（ホメオ遺伝子）が存在していることやそれらが類似していることから、生物体のからだ作りの基本は同じであると説く。

ウイルス・癌・免疫・老化

『免疫学の時代 自己と外界の認識ネットワーク』 狩野恭一著 中公新書
(1990)

自己と非自己の認識の機構が解明されつつある。この分野の急速な発展の後をたどり、難病である自己免疫疾患や癌，臓器移植など今日的话题に迫る。

『生物の寿命と細胞の寿命』 高木由臣著 平凡社 (1993)

生物は必ずいつかは死ぬ。老化の延長線上に死がある。ヒトや動物，培養細胞の寿命について記述し，老化と寿命の生物学的意味について考察。

『アポトーシス 細胞の生と死』 田沼靖一著 東京大学出版会 (1994)

個体の中で細胞の死は絶えず起こっている。オタマジャクシが蛙になる時に尻尾が消えてなくなるのは細胞の死による。この遺伝子によって制御された細胞死 (アポトーシス) についての最新の知見をやさしく紹介。

『細菌の逆襲 ヒトと細菌の生存競争』 吉川昌之介著 中公新書 (1995)

抗生物質のおかげで細菌性の病気が治ったのはひと昔前，今では薬剤耐性菌が増えている。細菌，薬剤耐性，免疫などについて解説。1996年夏，日本中をパニックに陥れた O-157 型大腸菌についても詳しく紹介。1996年のベストセラー。

『がん遺伝子の発見 がん解明の同時代史』 黒木登志夫著 中公新書 (1996)

正常な細胞がどうして癌細胞に変わるのか。癌遺伝子と発癌性物質との関連 癌抑制遺伝子の存在など遺伝性の癌についてわかりやすく解説。

『エイズの生命科学』 生田 哲著 講談社現代新書 (1996)

AIDSとはなにか，どのようにして感染し，発症するのかなど基礎的なことから生物学的に解説するとともに，薬害AIDSの発生とその後の対応など社会的問題まで幅広く取り上げて検討する。

『現代の感染症』 相川正道・永倉貢一著 岩波新書 (1997)

先進国ではもはや縁がないと考えられていた感染症。しかし，近頃の新興感染症 (エボラ出血熱や AIDS など) と再興感染症 (結核やマラリアなど) の流行は人類の今後に影響を落としている。そうした感染症について，丁寧に正確に解説する。

(福原敏行)

バイオテクノロジーと生活

21世紀はバイオの時代と言われている。実際には、既に30年も前から遺伝子やタンパク質を取扱う分子生物学を基盤とした学問分野が急速に発展し、同時にその応用研究であるバイオテクノロジーも驚くべき速さで進歩している。たとえば、1970年に、今日の組換えDNA技術になくってはならない制限酵素が発見された。1973年にはもう制限酵素を使って増殖能のある新たなプラスミドDNA(染色体外遺伝因子)が作られた。また、1977年には画期的なDNA塩基配列決定法が発表された。そして今日では、遺伝子組換え食品、クローン羊、DNA鑑定、遺伝子治療など、我々の生活に密接に関連する物や方法が開発されている。

社会的にも大きな関心を持たれているバイオテクノロジーを生活と結び付けて考えるには、まずバイオテクノロジーの基礎としてのDNAやタンパク質とは何かを理解しなければならない。そのためには、分子生物学の第一人者が理系以外の学生にも分かりやすく解説した

『DNA学のすすめ』柳田充弘著(講談社)

を奨めたい。

また、バイオテクノロジーの学問的基礎を簡潔に解説した

『知っておきたいDNA、遺伝子、遺伝子工学の基礎知識』カーター&ボイル著、加藤郁之進監訳(宝酒造バイオ研究所学術情報・出版部門)を奨める。

遺伝子組換え技術をもっと詳しく知りたい人は

『組換えDNAの分子生物学』J.D.ワトソンら著、松橋通生ら監訳(丸善)

を参考書として適宜読むとよいであろう。この本で、著者らは幾つもの実例を示しながら、微生物、植物、動物を使った遺伝子組換えを解説している。

最後に、勉強する際の心構えについて一言述べたい。ここで紹介する本はたった3冊であるが、そうしたのはある学問分野をきちんと学ぶには「良い本を徹底的に理解すること」が必要であると考えからである。あいまいな知識をたくさん身に付けて何の役に立つのだろうか。少なくとも確かな知識に価値がある。確

かな科学知識を基盤として社会問題を考えるべきである。まずは、『DNA学のすすめ』を徹底的に理解し、その上で次の書物にトライするのがよいであろう。

(飯田秀利)

身近な物質と化学

我々はきわめて多様な物質に囲まれて生活しているが、それらはすべて原子、分子、イオンから構成されている。これらの物質の静的・動的な性質がどのような原理・法則に従っているのかを探求する学問が化学である。化学が現在の人間生活にとって重要な役割を担っていることは、医薬品、石油化学製品等の例を挙げるまでも無く誰しも認めることである。21世紀を迎え、人類はこれまで以上に環境・エネルギー・食料・健康等の諸問題に直面しているが、これら諸問題の解決の為には、化学に対する深い理解が必要であろう。本講義では、身近な物質を通して化学の基礎的概念を理解し、物質や自然をみつめる化学的な感性を養うことを目的としている。化学に関連している書籍は数多く出版されているが、ここでは身近な物質や現象、自然の理解をテーマとした基本的な書籍について紹介する。

化学の入門書

『現代化学展望 - 原子から宇宙まで - 』西川 勝編 (培風館) 1997

化学の基礎的事項から生命化学、環境など境界領域まで身のまわりの現象と化学とのかかわりを解かり易く解説している。

『わかりやすい基礎化学 - 材料・環境・生体へのアプローチ - 』神戸 哲他著 (講談社) 1998

化学の基本法則から平易にまとめてあり、化学の基本を、高校で化学を学んでいない学生にも理解できるように物理化学を中心に要領よくまとめてある。

『ピメンテル 市民の化学 - 今日そして未来』G. C. Pimentel, J. A. Coonrod 著 / 小尾 欣一他訳 (東京化学同人) 1990

『新ロウソクの科学 - 化学変化はどのようにおこるか - 』P. W. Atkins 著 / 玉虫伶太訳 (東京化学同人) 1994

ロウソクの燃焼を現代の目で見つめ、化学とは何かを学ぶ上で良い参考書である。

『化学の基礎 化学入門コース 1』竹内敬人著（岩波書店）1996

化学入門コースは全8巻であり，この他に，物理化学，無機化学，有機化学，有機合成化学，量子化学，分析化学，生化学がある。

身近な物質や環境について取り上げている書籍

『身近な現象の化学』日本化学会編（培風館）1978

日常身近に接している現象の中から化学的に面白い14のテーマをそれぞれの分野の専門家が解説している。

『化学・意表を突かれる身近な疑問』日本化学会編（講談社）2001

言われてみればなぜだろう？という暮らしの中で出会う意外な疑問を集めて謎解きしている。

『身のまわりの高分子 - 巨大分子の世界 - 』藤重昇永著（東京化学同人）1992

身のまわりの高分子材料について日常生活とのかかわりを含めて平易に解説している。

『プラスチック』佐藤功著（ナツメ社）2001

プラスチックとは何か、プラスチックの用途、未来のプラスチック等について、詳しく図解されており、プラスチックのリサイクルについてもわかりやすく書かれている。

『ペニシリン開発秘話』J. C. Sheehan 著 / 往田俊雄訳（草思社）1994

アオカビから得られる抗生物質であるペニシリンの発見から簡単な化合物からペニシリンの合成についてまで当時の歴史も踏まえて書かれている。

『事件からみた毒 トリカブトからサリンまで』A. T. Tu 編著（化学同人）2001

「毒」というと何か特殊なものと思いがちであるが、身近に存在するものである。本書では、くすり中毒、覚せい剤、麻薬、スポーツ界のドーピング剤などいくつかの毒についてトピックス的に取り上げている。

『ダイオキシンと環境ホルモン』日本化学会編（東京化学同人）1998

信頼性のある科学的データに基づいた視点でダイオキシンや環境ホルモンについて述べられている。

『水の話・十講 [その科学と環境問題]』鈴木啓三著（化学同人）1997

『地球環境問題に挑戦する』黒田千秋・宝田恭之共著（培風館）1996

今や自分自身のこととして考えなければならない地球環境問題の中から「地球の姿」、「化学工学との関わり」等いくつかのテーマに焦点を絞って解説している。

その他，一般的な化学の雑誌として『現代化学』（東京化学同人），『化学』（化学同人），も参考になるであろう。

（吉原伸敏）

科学・技術と社会

現在、科学は科学・技術として技術と手をつなぎ、一体化し、社会に影響を与えると共に、社会からも大きく影響を受ける関係となった。21世紀においては、科学・技術と社会との関係は一体、どのようなものになるのであろうか。過去、現在を時の流れの中で知ることにより、そこから明日を位置づけることは極めて重要なことである。そのような取組みとして、科学論（哲学、社会学を含む）、科学史、そして身近な環境問題を取り上げる。

以下に、参考となる図書、できるだけ新しいものの一部を紹介する。

1. 科学技術と社会（歴史なども含む）の分野

『科学者とは何か』 村上陽一郎著 <新潮選書>（新潮社）1994

科学者共同体の問題として 科学者という職能の内部に存在する倫理や行動規範を解明するもの。

『科学と技術の歴史』 道家達将・赤木昭夫著（（財）放送大学教育振興会）1999

放送大学の教材、優れて良くまとめられた内容である。

『序説 S T S 教育』 小川正賢著（東洋館出版社）1993

市民のための科学技術教育としての S T S ,すなわち科学、技術と社会の関係を S T S 教育として捉えているもの。

『科学技術の歩み』 岡本正志著（建帛社）2000

S T S（科学・技術と社会の関係）を知る格好の書。

『公共のための科学技術』 小林傳司著（玉川大学出版部）2002

科学技術社会論あるいは S T S 研究という領域に属する諸問題を扱ったものである。専門家集団の「知識の正当化（科学的合理性）」と一般市民の「知識の正統化（社会的合理性）」に存在する差異やずれの関係を取り上げている。

『21世紀への技術発展』 森谷正規著 ((財)放送大学教育振興会) 1999
山積する社会問題の解決,高度情報化社会への展開,そして人間・自然において残された課題の達成が21世紀の発展の方向性であるという。

2. 環境問題(判断力を育成)の分野

『サイレント・スプリング(沈黙の春)』 レイチェル・カーソン著/青樹梁一訳
<新潮文庫> (新潮社) 1974

あまりにも有名な“自然を毒(農薬など)で汚すな”という警告の書。

『奪われし未来』 シーア・コルボン他著/長尾力訳 (翔泳社) 1997

多様な合成物質がホルモン分泌系の繊細な作用をどのように攪乱しているかを鮮やかに描いた解かりやすい研究報告。

『危険は予測できるか!』 J.V.ロドリックス著/宮本純之訳 (化学同人) 1994

毒性学とリスクアセスメント(危険度の査定)に関する原則と方法論を解説したもの。化学物質の危険性に対する科学的根拠,科学的知識の長所と弱点,科学と政策との関わり合いなどを明らかにしている。

『環境アセスメント』 原科幸彦著 ((財)放送大学教育振興会) 2000

環境影響評価法の全面施行によりこの方面の研究が注目されている。環境アセスメントとは環境を配慮した社会的な意思決定という,この問題を取り上げている。

(吉田俊久)

健康・スポーツ領域

「健康・スポーツ領域」とは

健康・スポーツ領域は、知性、感性、身体性の統合的な教育によって教養を深めようとする「共通科目」の基本的な理念の中で、「健康・スポーツ領域」の授業を履修することにより主に身体に関わる教養と技能を身につけるばかりでなく、現在の大学生活の充実をはかることをそのねらいとしています。ところでこの身体的教養と技能とは、次のようなことを意味しています。

スポーツ文化に対する深い認識

生活の場で積極的に運動やスポーツに取り組む態度

良好な人間関係を創り出す能力

各種の運動やスポーツ技能

大学生として必要な自己健康管理能力

生涯にわたる健康づくりや管理に関する知識と技能

このような教養や技能を培うことによって、有為な社会人、さらに教育者・指導者として基礎的な素養を身につけることをこの領域の大きなねらいとしています。すべての授業が男女共学です。

「健康・スポーツ領域」におけるベーシックコース (標準開設学期：Ⅰ・Ⅱ期)のねらいと性格

これらのコースは、基本的な「生涯スポーツ」の理論と実践の場を提供する授業です。これらの授業を通して、基礎的な体力の向上や、運動やスポーツ技術の学習、また体力科学を中心とした幅広いスポーツや身体についての基礎知識を身につけることを主な目的としています。このため、これらの授業は一年次（標準履修時）の教育系学生の必修として位置づけられており、教養系の学生で教員免許取得を希望する学生以外には必修ではありませんが、上記の理由により履修することが望ましい科目です。教員免許取得することを希望している学生は必ず指定された学期にこれらの科目を履修して下さい。ベーシックコースは履修学生の定員と施設を考慮して開設してありますので、止むをえず再履修しなければならない学生を除いて、指定された学期以外での履修はできません。このコースには「スポーツ・フィットネス実習」と「ウェルネス概論」がそれぞれ開設されています。

(繁田 進)

スポーツ・フィットネス実習

「スポーツ・フィットネス実習」は、半期の定期コース（5～6種目）と集中授業（8コース）から構成されています。クラスに指定された標準的な科目の中から自分の希望する内容の実習を自由に選択することができます。（受講希望者の人数によっては調整することもあります）これらの授業を通じて、新しいスポーツ技術の習得や、ゲーム技術の上達、基礎体力の向上などを図り、基本的な実践方法を身につけます。

身体になんらかの障害を持っていたり、病気や怪我のため、「スポーツ・フィットネス実習」で他の学生と同様のプログラムに参加が困難な学生のために特別に、「個別フィットネス・プログラム」を用意しています。「個別フィットネス・プログラム」（ハンディキャップコース）では、本学の管理センターの医師や本人の通院先の医師などと相談し、最も適切な個別の運動プログラムを作成し、カウンセリングを交えながら、指導をする個別の授業です。

定期コース

サッカー、バスケットボール、バレーボール、硬式テニス、ダンス、ソフトボール、フィットネス

集中コース

初級水泳、ゴルフ、硬式テニス、アクアティック・スポーツ、ボーリング、水泳エクササイズ、アウトドア・アクティビティー、ハンディキャップコース

授業の成果が上がるように、参考図書を推薦する。

『実戦バスケットボール』 関 四郎著 大修館

『基本レッスン硬式テニス』 小山秀哉著 大修館

- 『サッカー教室』 長池 実著 大修館
- 『舞踊入門』 J. マーチン著 大修館
- 『ソフトボール教室』 吉村 正著 大修館
- 『水泳の段階的指導と安全管理』 木庭修一著 ぎょうせい
- 『基本レッスン ゴルフ』 小林正義他著 大修館
- 『セーリング入門』 J. ムーア著 志賀仁郎訳 ベースボール・マガジン社
- 『ボウリング入門』 須田開代子著 成美堂出版
- 『楽しいウォーターエクササイズ』 クラセベック, グライムズ著 柴田義晴, 神戸周訳 大修館
- 『キャンプテキスト』 日本野外教育研究会編 杏林書院
- 『障害者とスポーツ』 芝田徳造著 文理閣
- 『スポーツ・ウォーキング』 小林寛道監修 大修館
- 『健康・体力づくり入門』 小野三嗣著 大修館

(繁田 進)

ウエルネス概論

「ウエルネス概論」では、「ウエルネス」という考え方、すなわち「各人がそのライフスタイル（生活習慣）を自己変容することにより、効率的で、生産的な質の高い生活を営むことを不断に目指すこと」を理論的に理解し、実践できることをそのねらいとしています。具体的には、個人のライフスタイルに影響を与える構成要素であります。運動、食生活、休養、ストレス等とライフスタイルとの関わりを明らかにすると共に、健全なライフスタイルの形成に向けて身体的、知的、情緒的、精神的、社会的な側面で積極的に取り組むための方法や知識の講義が行われます。「ウエルネス概論」においても「スポーツ・フィットネス実習」同様に、指定された時間枠内で異なった内容の講義が開講されていますので、自分の希望にあった内容の講義を選択し履修します。

以下の参考図書を推薦します。

- 『健康・ウエルネスと生活』 内山 源著 家政教育社
- 『健康生活と現代』 原田寿子著 不昧堂出版
- 『現代社会における健康と運動』 稲垣安二著 共栄出版
- 『現代人の健康と運動』 川村仁視著 杏林書院
- 『健康体力づくりのスポーツ科学』 波多野義郎著 同朋舎出版
- 『成人保健マニュアル』 大野良之著 南山堂
- 『健康と体力の科学』 小野三嗣著 大修館
- 『からだどころにエアロビクス』 武井正子著 大修館
- 『メンタルヘルス入門』 藤井久和著 創元社
- 『大学生からの成人病の予防』 片岡幸雄著 学術図書出版社
- 『運動と栄養』 山岡誠一著 杏林書院
- 『健康・体力づくりの栄養学』 大磯敏雄著 大修館

（繁田 進）

「健康・スポーツ領域」におけるアドバンスドコース (標準開設学期：III・IV期)のねらいと性格

これらの科目は、スポーツ・フィットネス実習及びウエルネス概論を履修した学生やこれらの科目に代えて「健康・スポーツ領域」の必修単位(2単位)を修得しようとする学生のために開設されています。標準開設学期はIII・IV期ですが、どの学期においても履修することが可能です。学生の興味や関心に応じて、基礎的な知識や技能の獲得を目的とする学生からスポーツの指導者として専門的な知識と技能の学習をめざす人たちのために幅広い科目を目的のコース別に用意しています。自らの好みによって最も適したコースを選択したり、受講者のニーズや能力に合わせて履修できるように設計することも可能です。より専門的な内容を学習し、生涯スポーツの推進に役立てる様に、以下のような科目を開設しました。

実技

卓球

バドミントン

ミニスポーツ

集中・初級アクアティックスポーツ

集中・スキーと雪上スポーツ

理論(演習)

生活習慣病予防とスポーツ

ウェイトコントロールと栄養

心の健康とストレス管理

マスコミとスポーツ

テーピングの理論と実際

以上の授業の参考図書等につきましては、それぞれの授業において各先生から推薦していただけたと思います。

(繁田 進)

語学領域

英 語

はじめに

共通科目語学領域の英語授業科目には、必修の「英語コミュニケーション」から、「上級英語リーディング」「上級英語コミュニケーション」「上級英語集中演習」まで、さまざまな科目がありますが、全体として目指すところは、現代英語の運用能力を高めることです。そのために上記の他「英語リーディング」「英語リスニング」「英語コミュニケーション」等、読み・書き・聞き・話す能力を鍛える科目を用意し、それぞれに初級・中級のクラスがあります。「英語集中演習」(中級・上級)は、小人数で、すべてのことを英語で行う短期集中の科目です。『履修ガイド』を参照の上、目的意識をもって、その目的と力に合わせて4年の間に上手に時間割を組み立てて下さい。

英語は、現在、国際共通言語 (lingua franca) としての性格を帯びており、国際間の直接的なコミュニケーションと理解のための基本言語として、その運用能力を身につけることは、大学においても英語を学ぶ主要な目的の一つです。しかし、その実用性をあまり狭く考えるのは賢明ではありません。たとえば会話能力を十分なまでに伸ばすことが最終目的であるならば、本学で用意している科目だけでは不十分であり、独自の努力も必要でしょう。(可能であれば、民間の英会話学校を並行して利用することも一つの方法です。)一方、読む能力・書く能力は、聞き・話す能力に比べて従来あまりにも力点が置かれ過ぎてきたために、近年逆に軽視されている、あるいはその力が低下しているように思われますが、読む能力の実用性は、現在および将来においても高いはずです。実際には、これらの能力が分離していることは言語能力として不自然・不完全であり、この点に従来の英語教育に対する私たちの反省があります。バランスのとれた運用能力を養って下さい。

言語はそれを用いる人々の文化と不可分であり、言語を通して見えてくるその民族・国民の微妙な意識の深部があります。それゆえに私たちは、外国語を学ぶ

ことを通して、その文化を理解しようと努めてきました。異言語理解を通じて異文化を理解し、その知的活動のなかで自国の言語・文化を客体化して見る このことが外国語を学ぶことの大きな意義であることは、現在も変わっていません。このことは、大学における外国語教育が、外国語の運用能力を高めることと併せて重視しているもう一つの点です。ぜひこの点に絶えず意識を向けて下さい。

外国語・英語学習法

英語を含めて一般に外国語学習について書かれた本がいろいろあります。千野栄一『外国語上達法』(岩波新書), 渡辺照宏『外国語の学び方』(岩波新書), 水野光晴『外国語習得 その学び方100の質問』(研究社)などが参考になるでしょう。ことばと文化, 日本語と外国語に関するものとしては, 鈴木孝夫『ことばと文化』, 同『日本語と外国語』(いずれも岩波新書), 金田一春彦『日本語』上・下(岩波新書)など。

英文法の知識をあらためて実践的に整理したいと思う人には, 長く広く読まれてきた文法書として, 江川泰一郎『英文法解説』(金子書房)があります。英語の表現の微妙な問題, 英語の発想の特徴などに目を向ける余裕のある人には, 池上嘉彦『<英文法>を考える』(ちくま学芸文庫), 安西徹雄『英語の発想』(講談社現代新書), 同『英文翻訳術』(ちくま学芸文庫), 大津栄一郎『英語の感覚』上・下(岩波新書), 行方昭夫『英文快読術』(岩波書店同時代ライブラリー), マーク・ピーターセン『日本人の英語』正・続(岩波新書)などはどうでしょうか。

英和・和英・英英辞典

通常だれにでも, それぞれ愛用の英和辞典があります。どんな辞典をお使いですか。近年, 学習辞典クラスの英和辞典にめざましい進歩が見られ, 英語学習上の有益な情報を盛り込んだ特色のある辞典がいろいろあります。『スーパーアンカー』, 『ニューアンカー』(学研), 『新グローバル』(三省堂), 『ジーニアス』(大修館), 『ライトハウス』(研究社), 『ブライト』(小学館), 『ルミナス』(研究社)

など。ただ、新聞、雑誌、小説などを読むには、これらの辞典では語彙が足りないでしょう。学習の配慮も行き届き、語彙もかなり多いのは『プログレッシブ』(小学館)、『カレッジ・ライトハウス』(研究社)、『研究社新英和中辞典』(研究社)、それから『カレッジクラウン』(三省堂)など。中型で最も語彙の多いのは『リーダーズ』(研究社)で、27万語をおさめています。大型の辞典としては、全面改訂で最大級の語義・用例を収録、収録項目26万の『研究社新英和大辞典』第6版(研究社)、収録語句25万余、新語・新語義、成句・俗語、語法解説が充実している『ジーニアス英和大辞典』(大修館)、36万語収録の『グランドコンサイズ英和辞典』(三省堂)、『ランダムハウス英和大辞典』第2版(小学館)、『岩波英和大辞典』(岩波書店)などがあります。自分の辞典に載っていない語などは、それで終わりにせずに、図書館等でこれらの大型辞典に当たって下さい。

英語を本格的に勉強したい人には、英英辞典を使うことをお勧めします。使いやすさでは、Oxford Advanced Learner's Dictionary, 6th ed. (Oxford University Press)、基本語彙2000語で定義してある Longman Dictionary of Contemporary English, 3rd ed. (Longman) や Cambridge International Dictionary of English (Cambridge University Press) など。Collins COBUILD English Dictionary, 2nd ed. (Collins) も、定義を完全な文の形で行っていて、わかりやすいでしょう。もう少し進んだ人には、The Concise Oxford Dictionary, 9th ed. (Oxford University Press) や The American Heritage Dictionary, 3rd ed. (Houghton Mifflin) 大型辞典では、The Random House Dictionary of the English Language, 2nd ed. (Random House)、Webster's Third New International Dictionary (Merriam Webster)、そして世界最大の英語辞典 The Oxford English Dictionary, 2nd ed., 20 vols. (Oxford University Press)。図書館では、この『オックスフォード英語大辞典』2版のCD-ROM版も使えます。

和英辞典では、学習辞典クラスで『ニューアンカー』(学研)や『ライトハウス』(研究社)、中型で『プログレッシブ』(小学館)、『研究社新和英中辞典』(研究社)、『カレッジ・ライトハウス』(研究社)など、大型辞典として『研究社新和英大辞典』第4版(研究社)があります。『新編 英和活用大辞典』(研究社)は、慣習的な語と語の結合すなわち連語 (collocation) の辞典です。英語で文章を書くときにこの辞典がいかにか有り難いかぜひ実地に試してみてください。

なお、以上ご紹介した辞書のかなりのものはCD-ROMの形で利用できます。

事 典

現代英語の文章を読んでいて、語義・語法を中心にした辞書・辞典だけでは情報が不十分であったり、理解できなかつたりすることがあります。学習辞典でも相当の百科事典的な情報を載せていますが、たとえば『リーダーズ・プラス』(研究社)は、『リーダーズ英和辞典』編纂後の新語と、固有名詞等それに盛りきれなかった百科事典的な情報を一冊に編んだものです。なお『リーダーズ英和辞典』と『リーダーズ・プラス』を同時に収めた『リーダーズ+プラス』がCD-ROM及び電子ブックの形で利用できます。以下ここでは、辞典を超えたことさらにに関するもの、事典類を補っておきます。

英語の特性に関する基礎知識、日本人と英語、日常生活の中の英語の常識等、具体的で実用性のある知識・情報を集めたのが、岩崎春雄他編『現代人のための英語の常識百科』(研究社)で、非常によく編集されています。新しいものでは、伊村元道他編『英語なんでも情報事典Q & A』(研究社)、イギリスの歴史・社会、生活環境・習慣、宗教、生産・運輸、教育・文化、スポーツ、政治・経済等については、安東伸介他編『イギリスの生活と文化事典』(研究社)が参考になるでしょう。アメリカに関しては、佐伯彰一他編『アメリカ・ハンドブック』(三省堂)、大きいものでは『講座アメリカの文化』全7巻(南雲堂)、『総合研究アメリカ』全7巻(研究社)。ほかに『英語語法大事典(風物編)』(大修館)、稲村松雄『アメリカ風物誌』(開隆堂)など。文学については『英米文学辞典』第3版(研究社)や『改訂増補 新潮世界文学辞典』(新潮社)など。英文法については、『新英語学辞典』(研究社)、『新英文法辞典』(三省堂)、『現代英文法事典』(大修館)、語法についても『英語慣用法辞典』(三省堂)、『英語語法大事典』全4集(大修館)、『英語表現辞典』(研究社)などがあります。

故事来歴・伝説その他、いろいろ珍しいことを教えてくれるのは、Brewer's Dictionary of Phrase and Fable, 15th ed. (Cassell)で、初版は1870年ですが、幾度も改訂を経て人気があります。たとえば hat trick とか sour grapes を引くと、その

意味やいわれを教えてください。加島祥造他訳『ブルーワー英語故事成語大辞典』(大修館)は、その第14版の翻訳です。日本における類書では、井上義昌『英米故事伝説辞典』増補版(富山房)。諺では、大塚高信・高瀬省三編『英語諺辞典』(三省堂)、さらには柴田武他編『世界ことわざ大事典』(大修館)、外山滋比古他編『英語名句事典』(大修館)、柴田武他編『世界なぞなぞ大事典』(大修館)などもあります。ブルーワーもそうですが、近年は、外国で出版された特色ある事典類の翻訳も増えています。たとえば、アト・ド・フリース/山下主一郎他訳『イメージ・シンボル事典』(大修館)、I. オウピー & M. テイタム/山形和美監訳『英語迷信・俗信事典』(大修館)、K. ブリッグズ/平野敬一他訳『妖精事典』(富山房)、あるいはA. ルーム/渡辺時夫他訳『英国を知る辞典』(研究社)、チャールズ・カイトリー/渋谷勉訳『イギリス祭事・民俗事典』(大修館)などがあります。

英語世界において重要な固有名詞とその発音について調べるときには、今世紀前半までの事項であれば、The New Century Cyclopeda of Names, 3 vols. (Prentice-Hall) を引くと、実在および架空の人物、文学作品、歴史上の出来事その他、およそ10万件の固有名詞が説明され、発音表記が付されています。発音だけならば、大塚高信他編『固有名詞英語発音辞典』(三省堂)。もちろん各種百科事典も役に立ちます。

最後に、絵で見る辞典、図解辞典として、古典的なものでは、I See All, 5 vols. (Amalgamated Press)、ほかに The New Oxford Illustrated Dictionary, 2 vols. (Oxford University Press), The Macmillan Visual Dictionary (Macmillan), Oxford-Duden Pictorial English Dictionary (Oxford University Press) などがあります。『オックスフォード・ドゥーデン図解英和辞典』(福武書店)は、Oxford-Duden の翻訳版です。

視聴覚教材

英語の学習には、音声の利用が欠かせません。英語を聞いて、英語独特の発音、リズム、イントネーション等を習得するためには、ラジオやテレビ、テープ、ビデオ、CDなどを使って学習するのが有効です。各種の視聴覚教材が出ています。以下、代表的なものを挙げておきます。図書館の教材を利用するほか、経済的に

余裕があれば、自分で買って勉強して下さい。

Intensive Course in English ELS (English Language Service)編 (ランゲージ・サービス社)

初級・中級・上級のコースがあります。中級から始めるとよいでしょう。読み物、発音、会話練習など、英語を総合的に学習できます。

English 900 ELS 編 (マクミラン社)

教材がたくみに繰り返されていて、自然に種々の表現形式を覚えられるように工夫されています。Book 4 ぐらいから学習するとよいでしょう。

リンガフォン (リンガフォン協会)

伝統があり、信用のある教材です。イギリス英語とアメリカ英語のコースがあります。

The Passport for You (Japan of the World)

ビデオとテキストで現代の英語・会話の学習ができます。

英語・米語・世界の英語 (大修館)

イギリス英語やアメリカ英語のほかいくつかの英語があり、いろいろな英語に慣れるのに役立ちます。

(野田哲雄・長原幸雄)

ドイツ語

1. ことばの愉しさ 鏡としての外国語

わたしたちは日々いろんなことを考えながら暮らしていますが、ことばを使って考えているということ自体に思いをめぐらすことは少ないかもしれません。ケーキを食べたいと思うとき、思いはすでにケーキの形状や色彩や味覚や材料へ、あるいはケーキ屋さんへと移り、ケーキという語や「ケーキを食べたい」という文について考えはじめる人はまずいないでしょう。ところが、ケーキを食べたいという欲求が具体的になるにつれ、思いはことばとつながりを持ちはじめます。イチゴ・ショートでもなければモンブランでもなくて、あの横浜の喫茶店で食べたおいしいケーキは何という名まえだったろう、といった具合です。違いが気になりはじめるのです。それでも、個々の語について思い出そうとすることはあれ、日本語の文について考えはじめる人はいないでしょう。それは自明なものと思われるからです。ところが「ケーキを食べたい」という文はそれほど自明なものでしょうか。もちろん、大抵の日本人にとっては明らかです。ただ、西洋人がこの文を見たら、誰が食べたがっているのだらうと首を傾げることでしょう。

ゲーテというドイツの詩人が、外国語を知らない者は自国語を知らないといいました。外国語を学ぶことによってわたしたちはよりよく日本語を知ることになります。手近な例をあげますと、日本語の二人称の代名詞には「きみ」「あなた」「おまえ」など色々なニュアンスを伴う語があります。それに対して英語では現在 you という語しか使われていないので、なんと合理的なことばなんだろうと思ったことが、皆さんにも一度はあるのではないのでしょうか。ところが、西洋では常にそうかといえ、決してそうではありません。ドイツ語では du と Sie という二つの語があって、状況に応じて使い分けます。フランス語でも同様です。明治以降、日本人は西洋との出会いを通してより広い世界を獲得してきました。夏目漱石や森鷗外から小林秀雄や大江健三郎にいたるまで、すぐれた文学者の多くが外国語

と関わりをもっていることは、外国語を知ることの大切さを暗示しているといえるでしょう。

ところでことばはコミュニケーションの道具にとどまるだけではなく、そのことばに特有の思考や感性の形式を内在させているにちがひありません。ヴァレリーの明晰さはフランス語と、カントの厳密さはドイツ語とふかく関わっていると思われまふ。また、シャンソンがフランス語の音色を生かしたものであるように、リート（歌曲）はドイツ語のひびきを生かしています。

現在、国際化という文字が至るところで見受けられます。しかし多くの場合、日本を国際化するか国際社会を日本化するかといった単純なレベルでしか語られていないような印象があります。ところが、そのような理解では、国際社会というのは観念にほかならず実体ではないことが見落とされてしまいます。実際には、日本があり、アメリカがあり、E C諸国があり、アジアやアフリカの諸国がある。それぞれに歴史をもち特色をもつそれらの国々の一つひとつの文化と、真剣に勇気をもって出会いつづけることが国際化なのです。そのような多元的な世界にたいする敏感な知性と感性とを一人ひとりが育てていくために、いろいろな世界の言葉を学ぶことは、特にこれから必要なことですし、私たちの世界が広がっていくのですから、とても楽しいことではないでしょうか。

2. ドイツ語の世界

ドイツ語圏の文化といえば、音楽と哲学が有名です。モーツァルト、ベートーベン、シューベルト、ワーグナー、マーラーといえば誰もが知っているでしょうし、カント、ショーペンハウアー、ニーチェの名も耳にしたことがあるでしょう。優れた科学者や思想家もたくさん出ています。相対性理論のアインシュタイン、量子力学のハイゼンベルク、動物学者のローレンツ、資本論のマルクス、精神分析学のフロイトやユングの、現代への影響は測り知れません。文学ではゲーテ、ハイネ、トーマス・マン、カフカがいますし、画家ではデューラー、クレーがよく知られています。それから ドイツ・ロマン派 と呼ばれる人たちの独特な精神運動があります。それらのテキスト（文化遺産）に触れる糸口となるのがドイツ

語の学習です。誰もが、原文のテキストを読む愉しさを味わって欲しいと思います。

なお、ドイツ語が使われている国は、ドイツ、オーストリア、スイス(の2/3)、ルクセンブルク、リヒテンシュタインですが、東欧諸国はドイツ文化の影響がきわめて強い地域です。

3. 辞書について

各クラスの先生からの紹介を参考にして選んでください。初心者向きのものから、高度の訳語を掲載した上級者向きのもので、さまざまあります。ただし、古くからある辞書を使おうとする場合には先生に相談してください。

4. 参考書について

初級については、書店で自分が使うときのことを考えながら自由に選んでよいと思いますが、以下に主なものを挙げます。

- (1) 『新ドイツ語文法教程』 関口存男著 (第4版) (三省堂)

戦前からあるドイツ語参考書の定番ですが、改良を加えられて今日なお利用価値を失っていません。

- (2) 『詳解ドイツ大文法』 橋本文夫著 (三修社)

やや古典的ですが、日本語で書かれた文法書としてはもっとも網羅的なものです。

- (3) 『これからのドイツ語』 ミッヒェル他著 (郁文堂)

とても説明の親切な学習参考書です。読むのに少しくたびれますが。

- (4) 『標準ドイツ語』 常木実著 (郁文堂)

全体的にわかりやすくなっている学習参考書です。

- (5) 『中級ドイツ語の研究』 信岡資生・藤井啓行 (朝日出版社)

本を読めるようになりたいと思う人にとっての定番的な参考書です。

- (6) 『現代ドイツ語 初級から中級へ』 浜川祥枝著（白水社）
大学院受験をめざす人に薦めます。ドイツ語の語感まで学ぶことができます。
- (7) 『詳解 ドイツ語文法』 在間 進著（大修館書店）
かなり高級な文法書ですが、本当の意味でドイツ語を理解しようとする人には必携の参考書と言えます。言語の奥の深さを垣間見せてくれます。
- (8) 『改訂・標準ドイツ会話』 村田経和・インゲボルク村田著（白水社）
会話のための表現集ですが、多くの文例が掲載されており、作文の参考にもなる利用価値の高い参考書です。テープも別売であり、発音練習や旅行にも使えます。
- (9) 『ドイツ・会話と暮らしのハンドブック』 渡辺・レグナー・嘉子著（三修社）
実際にドイツで暮らそうとする人のための参考書です。語学留学などを目指す人には最適でしょう。
- (10) 『コレクション・ドイツ語』（全8巻 白水社）
全8巻の構成で、各巻が技能別に編集されており、全体としては網羅的で本格的な、参考書ですが、1冊ずつ購入することもでき、ドイツ語を学ぼうとする人が計画的に利用していくことのできる、良質の参考書です。入門段階からやさしく説明されており、また、テープなども別売でありますので、各人それぞれの学習ペース・方法・志向に合わせて使うことができます。
現在、第1巻・入門、第2巻・初級、第3巻・話す、第8巻・文法が公刊されていますが、近々に第4巻・聞く、第5巻・読む、第6巻・書く、第7巻・基本単語が続くはずで、入門段階に不安のあるひとには第1巻を、初級の参考書を必要とするひとには第2巻を、本格的な文法書が欲しいというひとには第8巻を薦めます。
- (11) 『必携ドイツ文法総まとめ』（白水社）
文法の説明や変化表をコンパクトにまとめ、すぐに必要な箇所が探せるように、わかりやすく編集してある文法ハンドブックです。ドイツ語の文法は難しいというイメージがあるかも知れませんが、全体の見通しがつけば決してそれほど複雑ではありません。とくにこのような一覧表になったものを使いこな

せれば、ドイツ語を読むのも書くのも早く修得できると思います。

1年生が教科書以外に手元に持っていること(だから「必携」!)で活用することもできますが、一通り初級文法を学習し終えたい人には大いに役立つはずです。

5. ドイツ語圏について

以下はドイツ語圏についての知識を深めるための参考書です。説明は省略します。

- (1) 『はじめてのドイツ語』 福本義憲著(講談社現代新書)
 - (2) 『現代ヨーロッパの言語』 田中克彦他著(岩波新書)
 - (3) 『読んで旅する世界の歴史と文化・ドイツ』 池内 紀監修(新潮社)
 - (4) 『読んで旅する世界の歴史と文化・オーストリア』 池内 紀監修(新潮社)
 - (5) 『私のスイス案内』 笹本駿二著(岩波新書)
 - (6) 『ハプスブルク家』 江村 洋著(講談社現代新書)
 - (7) 『世紀末ドイツの若者』 上山安敏著(講談社学術文庫)
 - (8) 『ナチス追及』 望田幸男著(講談社現代新書)
 - (9) 『ユダヤ人』 上田和夫著(講談社現代新書)
 - (10) 『戦後ドイツ その知的歴史』 三島憲一著(岩波新書)
 - (11) 『国境をこえるドイツ』 永井清彦著(講談社現代新書)
 - (12) 『荒れ野の40年』 R. v. ヴァイツゼッカー著(岩波ブックレット)
- (赤司英一郎・中島裕昭・若林 恵)

フランス語

フランス語を学ぶために

大学に入って今までの高校の勉強と根本的に異なるところは、何を勉強するかを自分で組み立てる、ということではないでしょうか。入った専攻によって各々必修の縛りがあって完全に自由というわけではありませんが、かなりの科目については自分の好きなものを好きな時期に履修することができます。その中で好むと好まざるにかかわらず、やはり一番大学に入ったという感じを与えてくれるのは語学の学習ではないでしょうか。中学、高校の時と違い、頭から英語を押し付けられるのではなく、どこかの国、既によく知っていてあこがれていた国、全く知らないが、なんとなく好奇心をそそる国、大好きな芸術家のいる国、今すごい事件の起きている国などの言葉を自分自身で選ぶことができます。そんな中でフランス語を勉強してみたいと考えた皆さんに少しだけアドバイスをしてみましょう。

フランス語はフランス共和国の言語であるだけでなく、ベルギー、スイス、カナダなどの公用語であることは皆さんもご存じだと思います。その他にも、悲しいかな、植民地主義の名残として北アフリカ諸国や中部アフリカのかなりの国でよく使われています。さらに国連関係の主要言語であり、かつてガリ国連事務総長がアメリカの横槍で再選阻止された時、後任の候補にフランスがフランス語が話せることという条件を付けて粘ったことはまだ記憶に新しいところです。特に文化部門となると、ユネスコの本部がパリに置かれていることもあって、フランス語抜きでは話は進みません。スポーツの好きな人はオリンピック競技の実況をテレビで見ていると思いますが、進行係のアナウンスに英語のあと必ずフランス語も含まれていることに気づいた方もあるでしょう。長野オリンピックでもメダル授与式では日本語、英語のほかにも必ずフランス語のアナウンスもありましたし、シドニーでは英語の前にフランス語が流れていたと思います。そんなわけでフラ

ンス語は現在の世界の状況からも比較的実用性の高い言語です。それと同時にこの言語によって織り成された文学も忘れるわけにはいきません。フランス文学だけを取り上げて明治以来邦訳された作品はおびただしい数に上りますが、その方の紹介は「文学」の項に任せて、ここでは専ら皆さんが教室でこの言葉を学び始める時に参考になることを書きましょう。

教科書は教室に入った時は既に教官によって決められています。教科書によってはその中で使われる単語は全てまとめて意味を付けているものもありますが、その傾向はまだ大勢にはなっていませんし、何よりもその教科書を越えて勉強したい時のためにどうしても辞書は必要なので、まずその紹介から始めましょう。

< 辞書 >

仏和中辞典 I

- (1) 『ロワイヤル仏和中辞典』(旺文社)
- (2) 『新スタンダード仏和辞典』(大修館)

共通外国語科目として週二回はフランス語を学び、三年間は続けたい、あるいはフランス語が必要となる専攻に進みたいという学生にはこのレヴェルの辞書を勧めます。(1) (2)ともに見出し語の数は同じくらいで多くの古語、専門用語なども収録されています。(1)は関連した情報をまとめて随所に示しているのが特徴ですが、やや横幅の大きい型で、値段も少し高い。(2)は重要語義が見やすく印刷されています。

仏和中辞典 II

- (1) 『クラウン仏和辞典』(三省堂)
- (2) 『プチ・ロワイヤル仏和辞典』(旺文社)
- (3) 『現代フランス語辞典』(白水社)
- (4) 『プログレッシブ仏和辞典』(小学館)
- (5) 『ジュネス仏和辞典』(大修館)

この部類はIに比べると見出し語を大幅に減らし、その分だけ基本語の説明に工夫をこらして初学者に使いやすいようにという配慮がなされています。さらに

どれも巻末に付録して簡単な和仏も付けられていますから、フランス語基礎の授業にはこれで十分でしょう。見出し語の語数も値段もほぼ同じですが、あえて特徴を挙げるとしたら (2) (4) (5)はそれぞれ同じ会社の大辞典あるいは中辞典を縮めたものであるのに対し (1)と(3)は最初からこのレベルを対象にして構想されたものですから、その点で初学者向きの配慮が行き届いているかもしれません。(3)が最初から基本語の発音について片仮名表記を取り入れ (1)も 1995年の改訂版からその方式を採用しています。

大辞典

『仏和大辞典』(白水社)

『小学館ロベール仏和大辞典』(小学館)

これらは見出し語、情報量ともに多いのですが、卓上版の大型辞書で値段も高いですから、図書館に備えられたものを利用すればいいでしょう。

和仏辞典

『スタンダード和仏辞典』(大修館)

『コンコルド和仏辞典』(白水社)

『プチ・ロワイヤル和仏辞典』(旺文社)

『コンサイス和仏辞典』(三省堂)

自分からなにかフランス語で表現してみようという段階になると上記の中辞典の付録ではどうしても間に合いませんので、このレベルのどれか一冊が必要になるでしょう。

<参考書>

フランス語の自習書・参考書は星の数ほど、というと大袈裟ですが、非常に出版点数も多く、私自身もそのごく一部しか知りませんので、具体的に解説することはできません。ただ一般的な忠告として各人の必要に応じて選び方をしてくださいとだけ言っておきましょう。つまり、たとえば週一回の「基礎」だけで勉強する場合、授業では文法事項もごく基本的なことしか扱われないので、それで物

足りないと感じる人には、文法を体系的に説明している文典的なものが適しているでしょう。他方、文法的な説明よりも実際の用例に多く触れ、実用的な訓練を積みたいと思う学生には、テキスト、説明、練習問題などが組み合わされている自習書的なものを薦めます。新しい外国語に接して学習意欲がムクムク湧き上がり、早く参考書がほしいという気持ちも分からないではありませんが、その点では数回実際に授業を受けてから選ぶ方がいいかもしれません。

<カセット類>

現在では語学の勉強に音声的な面を無視することはできません。教室の週一、二回の授業だけではフランス語の実際の発音に接する機会がどうしても不足しがちです。それを補うためには前述の自習書を選ぶ際にカセットの付いているものを選ぶこともできますが、一番の安上がりはやはりラジオ、テレビのフランス語講座を利用することです。図書館にもいくつかのカセットは備えてありますから、それも活用してください。どの語学にも言えることですが、とにかく繰り返し聞くことは確実な成果を約束します。

<テレビ>

また生のフランス語とフランス社会についての直接の情報に触れるために最も有効なのは、NHKのBS放送で毎日流される「フランス2」のニュースを見ることです。早朝の放送なのでビデオに録画しておけば時間のあるときにゆっくりと見ることができ、また何度も繰り返し確認することが可能になります。

<新聞>

さらに図書館にはフランスの新聞「*le Monde*」が皆さんのために置いてありますから、自分の関心のあるテーマの記事を辞書を片手に読み続けることをお勧めします。日本語のメディアでは考えられないような分析と質の高い情報が詰まっている世界をそこに見出すことができるでしょう。

< インターネット >

もちろんインターネット上のフランス語のホームページを訪ねることは、手軽で興味深いフランス体験を可能にしてくれます。これも第一回目から辞書を片手に皆さんの関心に則して気楽にネット上をナビゲイトしてみてください。幾つかのアドレスをご紹介します。

- ・ ルーブル美術館 <http://www.louvre.fr>
- ・ 国立図書館 <http://www.bnf.fr>
- ・ 東京日仏学院 [http://www.iac.co.jp/ netifjt/](http://www.iac.co.jp/netifjt/)
- ・ ニューヨーク・フランス大使館 <http://www.info-france-usa.org/>
- ・ 検索エンジン
<http://www.indexa.fr>
<http://www.voila.fr>
<http://www.yahoo.fr>

最後にフランスについての本はあらゆる分野にわたって、これまた参考書などよりもさらに無数にありますから、皆さんの関心がどの方向にあるかを知ってからでないといふ助言もしいのです。ただ全貌をかいま見たいという人には『事典現代のフランス』(大修館)、『読む事典フランス』(三省堂)などをばらばらとめくってみることをお勧めします。その後で興味のある部分の書誌から適当なものを選んでじっくり読むこともできますし、こういう事典類は最新の情報からは少し遅れていることが普通ですので、授業の後で先生に質問すればなにか手掛かりを与えてくれるでしょう。

それでは Bon Courage(ボン・クラージュ)(= ガンバッテネ)

(大矢タカヤス)

上級日本語会話・講読・作文

会話

文法や語彙・表現を覚えれば十分な会話ができるかという点、そうではありません。ある言語社会でスムーズにコミュニケーションをおこなうためにはそのでの会話のルール、それから、その社会の文化についても知らなくてはなりません。本はたくさん出ていますが、ここでは次のものを紹介しておきます。

- ・『外国人の疑問に答える日本語ノート』 水谷修・水谷信子 ジャパンタイムズ (Mizutani & Mizutani "Nihongo Notes" The Japan Times)
- ・『話しことばと日本人』 水谷修 創拓社
- ・『外国人とのコミュニケーション』 ネウストプニー 岩波新書 (Neustupny, "Communicating with the Japanese", The Japan Times)
- ・『外国人留学生とのコミュニケーション・ハンドブック』 大橋敏子他 アルク
- ・『外国人を悩ませる日本人の言語慣習に関する研究』 彭飛 和泉書院
- ・『日本語の視点 - ことばを創る日本人の発想 - 』 森田良行 創拓社
- ・『タテ社会の人間関係』 中根千枝 講談社現代新書 (Nakane, "Japanese Society", University of California Press)
- ・『英語と日本語 - 発想と表現の比較 - 』 最所フミ 研究社出版
- ・『日本語文法セルフマスターシリーズ6 文の述べ方』 森山卓郎・安達太郎 くろしお出版
- ・『日本語の発音教室』 田中真一他 くろしお出版

講読

上級レベルですから、自分の興味のあるものをたくさん読んで読む力をつけるといいと思います。読まない力はつきません。図書館や書店に足を運んでみてください。安価なものとしては、「新書」と呼ばれる縦長の小型本の中から好きなものを選ぶといいかもしれません。また、「文庫」という小型本の中にも適当なも

のがあるでしょう。読むことと書くことは連動しています。自分の好きな日本語の文章を見つけること、そして、その文章のスタイルをまねて書いてみることで表現力もアップします。

- ・『中・上級者のための速読の日本語』 三浦昭・岡まゆみ The Japan Times

作文

文章の書き方には一定の決まりがあります。そして、その決まりは分野によって多少違います。ですから、自分の専門分野の本や論文を読む際に、内容を理解するだけでなく、その分野でよく使う表現を覚えたり、論文の構成や参考文献の挙げ方などにも注意をはらうなどして、普段から書くための準備をしておきましょう。論文の書き方を学ぶなら次のテキストがお勧めです。

- ・『大学生と留学生のための論文ワークブック』 浜田麻里 他 くろしお出版
- ・『日本語の表現技術 読解と作文 上級』 倉八順子 古今書院

辞書

辞書は「外国語 日本語」「日本語 外国語」ともにたくさん出ていて、いいものも多くあります。大きな本屋さんに行っているいろいろ見てみてください。ここでは「日本語 日本語」の辞書を中心にいくつかあげておきます。

- ・『例解新国語辞典』 林 四郎他 三省堂
例文の多く出ていて、評判がいい辞書です。韓国語版なども出ています。
- ・『新明解国語辞典』 金田一京助他 三省堂
語の定義がいい上、例も簡略ですが的確なものが出ています。
- ・『学研 国語大辞典』 金田一・池田 学習研究社

例文は文学作品などからそのまま抜き出されていてすぐに使えるものはあまりありませんが、この辞書のいいところは後ろの要素から語が探せるという点です。たとえば、「～込む」の欄には「売り込む」「押し込む」などの語例が100以上あげられています。

- ・『新編 英和活用大辞典』 市川繁治郎他 研究社

日本人が英文を書くために作られたものですが、英語の分かる外国人にとって

は日本語の表現を探すための辞書としても使えてとても便利です。

- ・『現代形容詞用法辞典』 飛田・浅田 東京堂出版
- ・『現代副詞用法辞典』 飛田・浅田 東京堂出版
- ・『15万例文・成句現代国語用例辞典』 林 史典他 教育社
- ・『使い方の分かる類語例解辞典』 小学館辞典編集部 小学館

例えば、「避ける」と「よける」の意味や使い方の違いなどが例文付きで紹介されています。

- ・『新漢英字典』 春遍雀来 研究社
- ・『日本語発音アクセント辞典』 日本放送出版協会

書店・図書館

- ・『Tokyo Book Map 東京 23 区書店・図書館徹底ガイド』 書籍情報社

紀伊国屋書店（新宿区）、三省堂書店（千代田区）、八重洲ブックセンター（中央区）などの大型書店がいくつもあったり、百数十軒の書店が1か所に集まっている神保町のような街があったり、東京は本を探すには世界でもっとも恵まれたところのひとつです。この本は、その東京の書店や図書館の総合ガイドブックです。小さな本ですが、内容はびっくりするほど充実しています。日本の本だけでなく外国の本を扱っている店も紹介されています。このガイドブックを片手に自分の足で本探しをしてみましょう。

（林明子ほか）

上級日本語文法 A

「文法」とは、単語がいくつか集まって意味のあるまとまりを構成して行き、文法的に最も大きな単位である文を形作って行く上でのきまり、法則を言います。従来学校で行われていた文法の授業では、品詞分類や活用を暗記し、諸家の文法学説を覚えることに力点が置かれていました。しかし、それより更に大切なことは、生きて使われている日本語の中にひそむ、様々な法則性、特に文法的な要素の意味用法や使い分けの事実を、自ら追及する態度を養うことにあります。その手助けをしてくれる文献資料を以下に掲げます。

- (1) 『日本文法学概論』 山田孝雄著 宝文館
- (2) 『日本口語法講義』 山田孝雄著 宝文館
- (3) 『日本文法論』 山田孝雄著 宝文館
- (4) 『日本文法講義』 山田孝雄著 宝文館
- (5) 『日本文法 口語篇』 時枝誠記著 岩波書店 岩波全書
- (6) 『国語法研究』 橋本進吉著 岩波書店 橋本進吉博士著作集第2冊
- (7) 『改稿 日本文法の話』 阪倉篤義著 教育出版
- (8) 『象は鼻が長い』 三上章著 くろしお出版
- (9) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 寺村秀夫著 くろしお出版
- (10) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 寺村秀夫著 くろしお出版
- (11) 『ケーススタディ 日本文法』 寺村秀夫他編 おうふう
- (12) 『ことばの意味 1～3』 柴田武他著 平凡社 平凡社選書47・66・73
- (13) 『生成日本文法論』 奥津敬一郎著 大修館書店
- (14) 『国語構文論』 渡辺実著 塙書房
- (15) 『子どもとことば』 岡本夏木著 岩波書店 岩波新書
- (16) 『日本語の文法を考える』 大野晋 岩波書店 岩波新書
- (17) 『岩波講座 日本語 6 文法Ⅰ』 岩波書店

- (18) 『岩波講座 日本語 7 文法Ⅱ』 岩波書店
- (19) 『シンポジウム日本語 日本語の文法』 松村明他編 学生社
- (20) 『日本の言語学 第3巻 文法Ⅰ』 服部四郎他編 大修館書店
- (21) 『日本の言語学 第4巻 文法Ⅱ』 服部四郎他編 大修館書店
- (22) 『日本文法大辞典』 松村明編 明治書院

(高橋久子)

上級日本語文法 B

日本の古典文学作品を読む場合、古典文法の基本的な知識は、必要不可欠のものであります。ただし、品詞や活用を、ただむやみに暗記しただけでは、具体的な個々の作品を読んで行く上での役には立ちません。回り道をするようでも、一つの作品をじっくりと読み、一語一語の意味・用法や接続のしかたなど、丁寧に確かめ、考えながら読み進めることによって、真の意味での知識が、身に付いて行きます。そのような経験をある程度積んだ上で、文法研究書を読めば、そこに書いてあることの意味が、自然に理解できるようになるはずであります。以下に、その参考資料を掲げます。

A 注釈書等

- (1) 『土佐日記』 鈴木知太郎校注 岩波書店 日本古典文学大系 20
- (2) 『源氏物語』 阿部秋生他校注 小学館 日本古典文学全集 12 ~ 17
- (3) 『枕草子』 池田亀鑑校訂 岩波書店 岩波文庫
- (4) 『全釈更級日記』 鈴木知太郎他著 笠間書院 笠間選書 114
- (5) 『新訂 方丈記』 市古貞次校注 岩波書店 岩波文庫
- (6) 『百人一首』 島津忠夫訳注 角川書店 角川文庫
- (7) 『新訂 徒然草』 西尾実・安良岡康作校注 岩波書店 岩波文庫

B 辞典

- (1) 『岩波 古語辞典』 大野晋他編 岩波書店
- (2) 『新明解 古語辞典』 金田一春彦他編 三省堂
- (3) 『大辞林』 松村明編 三省堂

C 文法書

- (1) 『日本文法講義』 山田孝雄著 宝文館

- (2) 『日本文法論』 山田孝雄著 宝文館
- (3) 『日本文法 文語篇』 時枝誠記著 岩波書店 岩波全書
- (4) 『国文法体系論』 橋本進吉著 岩波書店 橋本進吉博士著作集第7冊
- (5) 『助詞・助動詞の研究』 橋本進吉著 岩波書店 橋本進吉博士著作集第8冊
- (6) 『助詞の歴史的研究』 石垣謙二著 岩波書店
- (7) 『古文解釈のための国文法入門』 松尾聡著 研究社
- (8) 『古典解釈文法』 遠藤嘉基著 和泉書院
- (9) 『概説文語文法』 亀井孝著 吉川弘文館

(高橋久子)

共通科目のための読書案内 2003

平成 15 年 3 月 31 日発行

編集・発行 **東京学芸大学附属図書館**

東京都小金井市貫井北町 4 - 1 - 1

(〒 184-8501) 電話 042-329-7223

FAX 042-329-7226
